

京都府遺跡調査概報

第 95 冊

1. 名神大山崎ジャンクション関係遺跡
2. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡
3. 国道1号京都南道路関係遺跡
4. 木津地区所在遺跡

2 0 0 0

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成11年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団関西支社・京都府土木建築部・建設省近畿地方建設局・都市基盤整備公団の依頼を受けて行った名神大山崎ジャンクション関係遺跡・平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡・国道1号京都南道路関係遺跡・木津地区所在遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、大山崎町教育委員会・宇治市教育委員会・久御山町教育委員会・木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 名神大山崎ジャンクション関係遺跡
 2. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡
 3. 国道1号京都南道路関係遺跡
 4. 木津地区所在遺跡
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|----|------------------|------------------|--------------------|------------|------------------------------|
| 1. | 名神大山崎ジャンクション関係遺跡 | | | 日本道路公団関西支社 | |
| | 下植野南遺跡 | 乙訓郡大山崎町大字円明寺小字門田 | 平11.4.12～平12.1.28 | | 松井忠春 石井清司 藤井 整 中島史子 |
| | 算用田遺跡 | 乙訓郡大山崎町大字円明寺小字井尻 | 平11.7.14～8.11 | | 伊賀高弘 |
| 2. | 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡 | 宇治市塔ノ川 | 平11.12.30～平12.2.24 | 京都府土木建築部 | 田代 弘 森下 衛 |
| 3. | 国道1号京都南道路関係遺跡 | | | 建設省近畿地方建設局 | |
| | 市田齊当坊遺跡 | 久世郡久御山町大字市田小字新珠城 | 平11.5.14～平12.3.3 | | 岩松 保 野々口陽子 |
| | 佐山遺跡 | 久世郡久御山町大字佐古小字外屋敷 | 平11.9.18～平12.1.14 | | 竹原一彦 |
| | 佐山尼垣外遺跡 | 久世郡久御山町大字佐山小字尼垣外 | 平11.6.21～平12.3.3 | | 中村周平 柴 暁彦 |
| 4. | 木津地区所在遺跡 | | | 都市基盤整備公団 | |
| | 内田山遺跡・内田山B1号墳 | 相楽郡木津町木津内田山 | 平11.9.1～平11.12.22 | | 筒井崇史 |
| | 木津城山遺跡 | 相楽郡木津町大字木津小字片山 | 平11.4.12～平12.2.28 | | 戸原和人 |

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

本文目次

| | |
|--------------------------------------|----|
| 1. 名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成11年度発掘調査概要----- | 1 |
| 2. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡発掘調査概要----- | 15 |
| 3. 国道1号京都南道路関係遺跡発掘調査概要----- | 35 |
| 4. 木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要----- | 71 |

挿図目次

1. 名神大山崎ジャンクション関係遺跡

| | |
|---------------------------|----|
| 第1図 調査地位置図----- | 1 |
| 第2図 下植野南遺跡調査区一覧----- | 2 |
| 第3図 G・Hトレンチ上層遺構平面図----- | 3 |
| 第4図 F・Gトレンチ下層遺構平面図----- | 4 |
| 第5図 弥生土器実測図----- | 7 |
| 第6図 Gトレンチ上層遺構出土土器実測図----- | 8 |
| 第7図 Hトレンチ上層遺構出土遺物実測図----- | 10 |
| 第8図 S R08出土遺物----- | 11 |
| 第9図 算用田遺跡検出遺構平面図----- | 13 |
| 第10図 算用田遺跡土層柱状模式図----- | 14 |

2. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡

| | |
|-----------------------|----|
| 第11図 調査地位置図(1)----- | 16 |
| 第12図 調査地位置図(2)----- | 16 |
| 第13図 調査区の配置図----- | 17 |
| 第14図 A地区検出遺構実測図----- | 18 |
| 第15図 B地区検出遺構実測図----- | 19 |
| 第16図 C地区検出遺構実測図----- | 20 |
| 第17図 C地区S K04実測図----- | 21 |
| 第18図 C地区各土坑断面図----- | 21 |
| 第19図 A地区土層堆積状況図----- | 21 |

| | | |
|------|------------------|----|
| 第20図 | C地区SK04出土鉄釘実測図 | 22 |
| 第21図 | C地区トレンチ出土縄文土器実測図 | 23 |
| 第22図 | B・C地区出土遺物実測図 | 23 |
| 第23図 | C地区SK04出土瓦実測図(1) | 26 |
| 第24図 | C地区SK04出土瓦実測図(2) | 27 |
| 第25図 | C地区SK04出土瓦実測図(3) | 28 |
| 第26図 | C地区SK04出土瓦実測図(4) | 29 |
| 第27図 | C地区SK04出土瓦実測図(5) | 30 |
| 第28図 | C地区SK04出土瓦実測図(6) | 31 |
| 第29図 | C地区SK04出土瓦実測図(7) | 32 |

3. 国道1号京都南道路関係遺跡

| | | |
|------|-------------------------|----|
| 第30図 | 主要遺跡分布図 | 36 |
| 第31図 | 市田齐当坊遺跡調査区配置図 | 38 |
| 第32図 | 市田齐当坊遺跡遺構配置図 | 39 |
| 第33図 | 井戸SE453実測図 | 42 |
| 第34図 | 井戸SE453立面図 | 43 |
| 第35図 | D地区遺構配置図 | 46 |
| 第36図 | 出土土器実測図(1) | 49 |
| 第37図 | 出土土器実測図(2) | 50 |
| 第38図 | 竪穴式住居跡SH451玉作り関連遺物 | 51 |
| 第39図 | 佐山遺跡調査区 | 54 |
| 第40図 | A-1地区中世遺構平面図 | 55 |
| 第41図 | 出土遺物実測図 | 56 |
| 第42図 | 佐山尼垣外遺跡調査区配置図 | 58 |
| 第43図 | 調査地遺構平面図(中世・平安時代) | 59 |
| 第44図 | 調査地遺構平面図(縄文・弥生・古墳時代) | 61 |
| 第45図 | 方形周溝墓ST119・溝跡SD098遺構平面図 | 63 |
| 第46図 | 方形周溝墓ST227・溝跡SD229遺構平面図 | 64 |
| 第47図 | 方形周溝墓ST119出土絵画土器壺実測図 | 66 |
| 第48図 | 溝跡SD09出土縄文土器実測図 | 68 |

4. 木津地区所在遺跡

| | | |
|------|------------------|----|
| 第49図 | 調査地位置図および周辺遺跡配置図 | 72 |
| 第50図 | 調査トレンチ配置図 | 74 |
| 第51図 | 内田山B1号墳測量図 | 75 |
| 第52図 | 内田山B1号墳埴輪棺1・2実測図 | 76 |

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 第53図 | 内田山遺跡出土遺物実測図----- | 77 |
| 第54図 | 内田山B 1号墳出土遺物実測図(1)----- | 78 |
| 第55図 | 内田山B 1号墳出土遺物実測図(2)----- | 79 |
| 第56図 | 内田山B 1号墳出土遺物実測図(3)----- | 80 |
| 第57図 | 木津城山遺跡トレンチ配置図----- | 81 |
| 第58図 | 北地区遺構配置図----- | 82 |
| 第59図 | 15トレンチ中央付近遺構配置図----- | 82 |
| 第60図 | 14～16トレンチ南端付近遺構配置図----- | 83 |
| 第61図 | 16トレンチS X05実測図----- | 84 |
| 第62図 | 南地区遺構配置図(1)----- | 85 |
| 第63図 | 22トレンチ実測図(1/80)および土層堆積図----- | 86 |
| 第64図 | 南地区遺構配置図(2)----- | 86 |
| 第65図 | 木津城山地区出土遺物実測図(1)----- | 88 |
| 第66図 | 木津城山地区出土遺物実測図(2)----- | 89 |

付 表 目 次

3. 国道1号京都南道路関係遺跡

| | | |
|-----|-------------------------|----|
| 第1表 | 国道1号京都南道路関係遺跡調査一覧表----- | 35 |
|-----|-------------------------|----|

4. 木津地区所在遺跡

| | | |
|-----|---------------|----|
| 第2表 | 管玉・棗玉法量表----- | 80 |
| 第3表 | 白玉法量表----- | 80 |

図 版 目 次

1. 名神大山崎ジャンクション関係遺跡

| | |
|------|---------------------------|
| 図版第1 | (1)下植野南遺跡 全景(東から) |
| | (2)下植野南遺跡 Gトレンチ調査区全景(東から) |

- (3) 下植野南遺跡 F-2 トレンチ調査区全景(北から)
- 図版第2 (1) 下植野南遺跡 S B79(南から) (2) 下植野南遺跡 S H55・56(北から)
 (3) 下植野南遺跡 S H54(南東から)
- 図版第3 (1) 下植野南遺跡 G トレンチ方形周溝墓群(北東から)
 (2) 下植野南遺跡 S T66完掘状況(南東から)
 (3) 下植野南遺跡 S T73完掘状況(北から)
- 図版第4 (1) 下植野南遺跡 S T85出土遺物(北から)
 (2) 下植野南遺跡 F-2 トレンチ方形周溝墓群(東から)
 (3) 下植野南遺跡 F-2 トレンチ方形周溝墓群(南から)
- 図版第5 (1) 下植野南遺跡 H トレンチ全景(北から)
 (2) 下植野南遺跡 H トレンチ全景(東から)
 (3) 下植野南遺跡 H トレンチ S R08(北から)
- 図版第6 (1) 下植野南遺跡 H トレンチ S D13・S E11(北から)
 (2) 下植野南遺跡 H トレンチ S D22(東から)
 (3) 下植野南遺跡 H トレンチ墨書人面土器出土状況(東から)
- 図版第7 (1) I K32(算用田遺跡)調査地全景(完掘段階・西南西から)
 (2) I K32(算用田遺跡)1 トレンチ遺構検出状況(第1遺構面・西南西から)
 (3) I K32(算用田遺跡)1 トレンチ遺構検出状況(第2遺構面・西南西から)
- 図版第8 下植野南遺跡 出土遺物(1)
- 図版第9 下植野南遺跡 出土遺物(2)
- 図版第10 下植野南遺跡 出土遺物(3)

2. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡

- 図版第11 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 A トレンチ完掘状況(西から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 A トレンチ完掘状況(北東から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 A トレンチ掘削風景(西から)
- 図版第12 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 B トレンチ完掘状況(北東から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 B トレンチ完掘状況(西から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 B トレンチ土層堆積状況(北東から)
- 図版第13 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 C トレンチ完掘状況(北東から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 C トレンチ掘削状況(北東から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 C トレンチ S K12掘削状況(北東から)
- 図版第14 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 C トレンチ S K09完掘状況(北から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 C トレンチ S K03完掘状況(北から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 C トレンチ S K02完掘状況(北から)

- 図版第15 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K07完掘状況(南から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K07埋土の状況(北から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K06完掘状況(西から)
- 図版第16 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04検出状況(東から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04掘削状況(北西から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K02掘削状況(南東から)
- 図版第17 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04瓦検出状況(北東から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04瓦検出状況(南西から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04瓦検出状況(北東から)
- 図版第18 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04瓦検出状況(北東から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04瓦検出状況(東から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Cトレンチ S K04瓦検出状況(真上から)
- 図版第19 (1) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Dトレンチ掘削風景(南東から)
 (2) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Dトレンチ完掘状況(南西から)
 (3) 平等院旧境内・宇治市街遺跡 Dトレンチ土層堆積状況(南壁)
- 図版第20 平等院旧境内・宇治市街遺跡 出土遺物

3. 国道1号京都南道路関係遺跡

- 図版第21 (1) 市田齐当坊遺跡 遠景(南から) (2) 市田齐当坊遺跡 C地区全景(南から)
 (3) 市田齐当坊遺跡 D地区遠景(南から)
- 図版第22 (1) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ中世遺構面全景(南から)
 (2) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ中世南北坪境道検出状況(南から)
 (3) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ中世東西坪境道検出状況(東から)
- 図版第23 (1) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ方形周溝墓 S T410全景(西南西から)
 (2) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ方形周溝墓 S T455検出状況(北から)
 (3) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ方形周溝墓 S T437西溝内土器検出状況
 (北西から)
- 図版第24 (1) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ竪穴式住居跡 S H451全景(南から)
 (2) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ S D40検出状況(西から)
 (3) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ井戸 S E108検出状況(東から)
- 図版第25 (1) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ井戸 S E453井戸枠全景(北東から)
 (2) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ井戸 S E453井戸枠細部(北東から)
 (3) 市田齐当坊遺跡 C-2トレンチ井戸 S E453井戸枠細部(南から)
- 図版第26 (1) 市田齐当坊遺跡 Dトレンチ南半周溝墓群検出状況(南西から)
 (2) 市田齐当坊遺跡 Dトレンチ溝 S D18検出状況(西から)

- (3)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ溝S D18内土層(トレンチ東壁部・西から)
- 図版第27 (1)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ井戸S E31全景(南東から)
(2)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ井戸S E31井戸枠全景(南東から)
(3)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ井戸S E31井戸枠全景(南西から)
- 図版第28 佐山遺跡 A-1地区中世遺構面全景(上が北)
- 図版第29 (1)佐山遺跡 A-1地区全景(西から)
(2)佐山遺跡 A-1地区東部全景(西から)
(3)佐山遺跡 坪境道S F126北壁断面(南から)
- 図版第30 (1)佐山尼垣外遺跡 調査前全景(北から)
(2)佐山尼垣外遺跡 坪境道南側溝(S D202・203)全景(北から)
(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D31全景(北から)
- 図版第31 (1)佐山尼垣外遺跡 池状遺構S X226全景(東から)
(2)佐山尼垣外遺跡 池状遺構S X226獣骨出土状況(北から)
(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T119全景(南から)
- 図版第32 (1)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T119絵画土器壺出土状況(南から)
(2)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T119遺物出土状況(南から)
(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T119遺物出土状況(北西から)
- 図版第33 (1)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T101全景(南東から)
(2)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T101土層断面(東から)
(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T101遺物出土状況(東から)
- 図版第34 (1)佐山尼垣外遺跡 竪穴式住居跡S H09遺物出土状況(南から)
(2)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D099全景(南東から)
(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D099遺物出土状況(西から)
- 図版第35 (1)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T228全景(南東から)
(2)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T227全景(東から)
(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓S T227遺物出土状況(南東から)
- 図版第36 (1)佐山尼垣外遺跡 土壙S K239検出状況(北東から)
(2)佐山尼垣外遺跡 土壙S K239遺物検出状況(北西から)
(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D229検出作業風景(北西から)
- 図版第37 (1)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D229遺物出土状況(北西から)
(2)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D229遺物出土状況(南東から)
(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D229遺物出土状況(北西から)
- 図版第38 市田齊当坊遺跡 出土遺物(1)
- 図版第39 (1)市田齊当坊遺跡 出土遺物(2) (2)佐山尼垣外遺跡 出土土器(1)
- 図版第40 佐山尼垣外遺跡 出土土器(2)

4. 木津地区所在遺跡

- 図版第41 (1)内田山遺跡・内田山B1号墳第1トレンチ全景(西から)
(2)内田山遺跡・内田山B1号墳第2トレンチ全景(北西から)
(3)内田山遺跡・内田山B1号墳第3・4トレンチ全景(南東から)
- 図版第42 (1)内田山B1号墳 墳頂部全景(南東から)
(2)内田山B1号墳 埴輪棺1全景(南西から)
(3)内田山B1号墳 埴輪棺2全景(南西から)
- 図版第43 (1)木津城山遺跡 全景(北西から)
(2)木津城山遺跡 第14トレンチ調査風景(南東から)
(3)木津城山遺跡 第14トレンチSD01検出状況(南東から)
- 図版第44 (1)木津城山遺跡 第15トレンチSD01・SH03検出状況(北東から)
(2)木津城山遺跡 第15トレンチSH03検出状況(北東から)
(3)木津城山遺跡 第15トレンチSH06・07検出状況(北から)
- 図版第45 (1)木津城山遺跡 第16トレンチSX04遺物出土状況(北から)
(2)木津城山遺跡 第16トレンチSX05遺物出土状況(北から)
(3)木津城山遺跡 第17トレンチ調査範囲(南東から)
- 図版第46 (1)木津城山遺跡 第22トレンチ調査状況(南東から)
(2)木津城山遺跡 第22トレンチ北断面(人工盛土の状況)(南から)
(3)木津城山遺跡 第23～28トレンチ調査状況(南東から)
- 図版第47 (1)木津城山遺跡 第23トレンチテラス検出状況
(2)木津城山遺跡 第29トレンチテラス検出状況(東から)
(3)木津城山遺跡 第30トレンチテラス出土状況(北東から)
- 図版第48 (1)木津城山遺跡 第31トレンチ調査状況(南東から)
(2)木津城山遺跡 第34トレンチ調査状況(北西から)
(3)木津城山遺跡 第35トレンチ調査状況(北東から)
- 図版第49 内田山B1号墳 出土埴輪(埴輪棺1・2)
- 図版第50 (1)内田山B1号墳 埴輪棺1出土玉類
(2)内田山B1号墳 SD84出土不明鉄製品
- 図版第51 出土遺物(1) (番号は実測図番号に対応)
- 図版第52 出土遺物(2) (番号は実測図番号に対応)

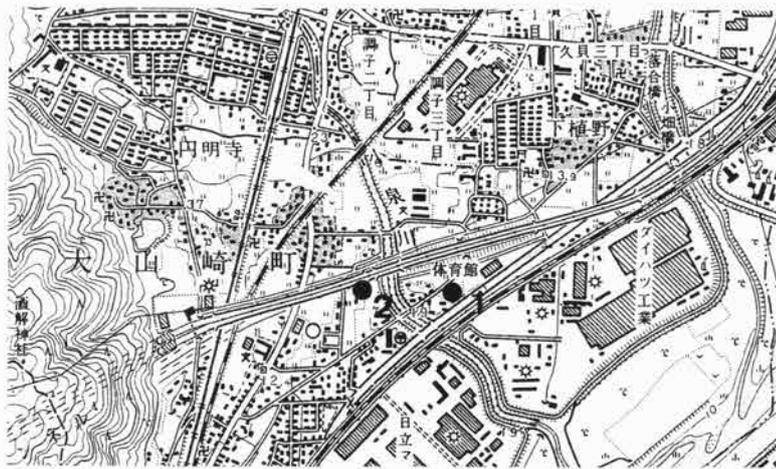
1. 名神大山崎ジャンクション関係遺跡 平成11年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、名神高速自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。平成11年度は、京都府乙訓郡大山崎町大字円明寺小字門田ほかに所在する下植野南遺跡と、同円明寺小字井尻に位置する算用田遺跡の2か所で発掘調査を行った。発掘調査は、平成10年度のIK第31次調査の試掘調査結果に基づき、古墳時代後期の集落遺構とその下層の弥生時代中期の方形周溝墓群を検出し、同遺跡の南限を確定するため、F-2・GトレンチおよびHトレンチの総面積7,460㎡にわたり、平成11年4月12日より平成12年1月28日まで現地調査を実施した。その間、算用田遺跡でも約120㎡のトレンチを設定し、平成11年7月14日より同8月11日まで発掘調査を行った。調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、主任調査員松井忠春・石井清司、主査調査員竹井治雄、調査員伊賀高弘・中村周平・藤井 整・中島史子が担当した。調査期間中、猛暑・酷寒のなか発掘調査・整理業務に従事していただいた作業員・

調査補助員・整理員に心から御礼申し上げます。^(注1)また、調査に当たっては、日本道路公団・京都府教育委員会・大山崎町教育委員会をはじめ、関係諸機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して、あつく御礼申し上げます。なお、発掘調査に係る経費は全額日本道路公団の負担による。

(松井忠春)



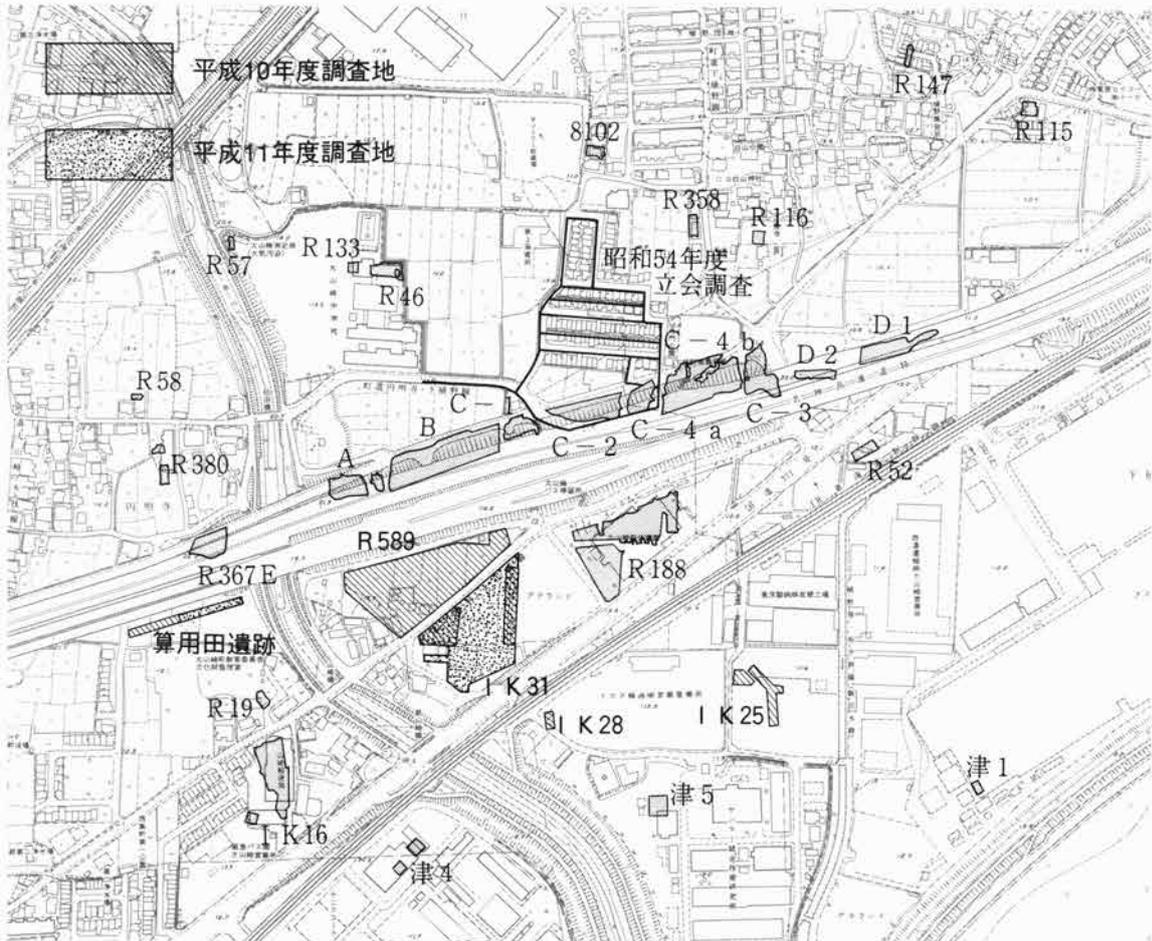
第1図 調査地位置図(1/25,000)

1. 下植野南遺跡 2. 算用田遺跡

(1) 下植野南遺跡

1. 検出遺構(第3・4図)

本概要では、整理作業の関係上、その詳細は後日に報告し、各トレンチでの遺構を略述する。

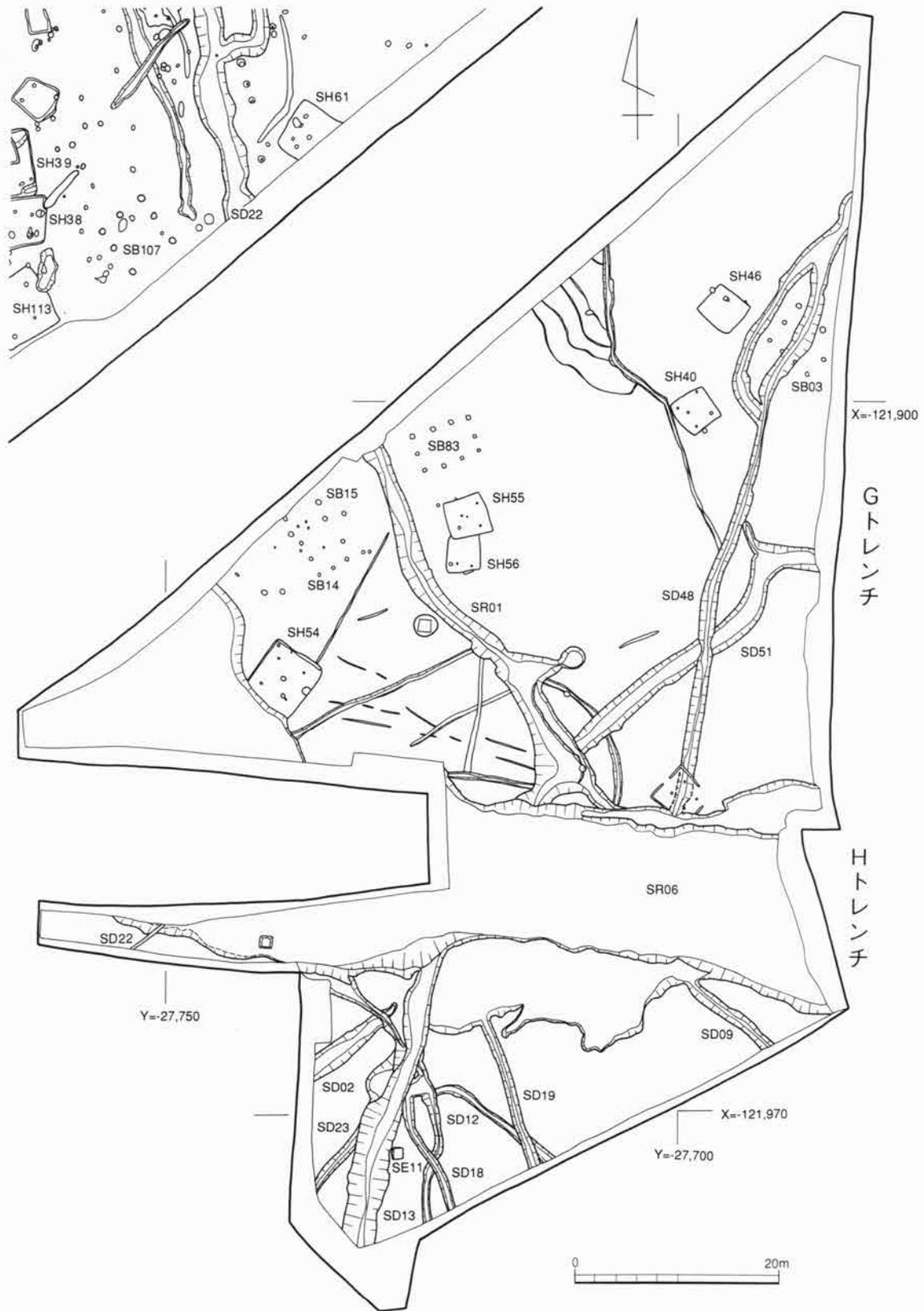


第2図 下植野南遺跡調査区一覽(1/10,000)

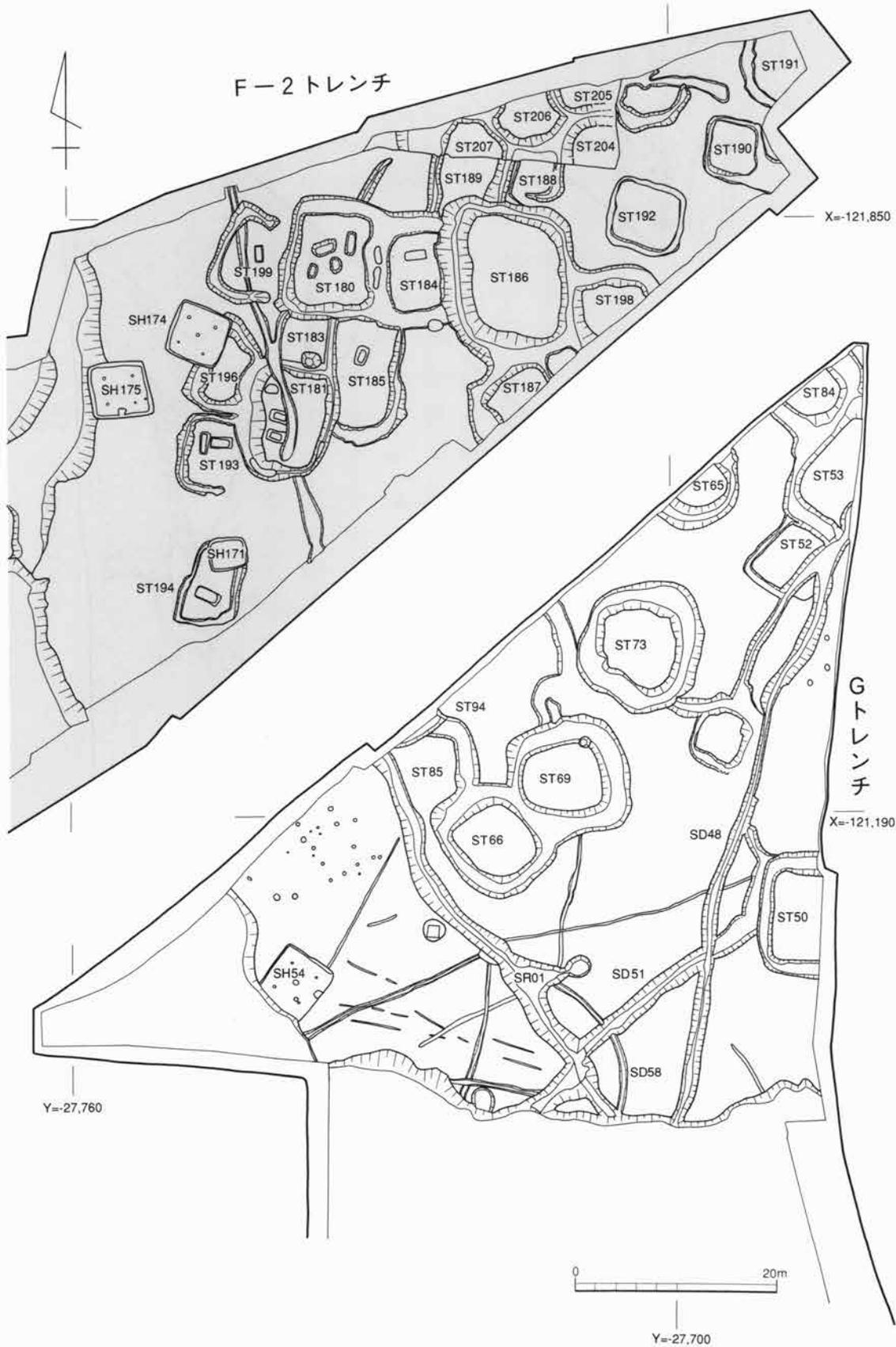
①上層の遺構(第3図)

Gトレンチの上層遺構としては竪穴式住居跡5基・掘立柱建物跡4棟・溝状遺構などを検出した。昨年度発掘調査を実施したF地区では、古墳時代後期の竪穴式住居跡を30基以上検出しているが、今回のG・Hトレンチではいずれもまばらな状態で一辺約4.0m前後の竪穴式住居跡を5基検出した。トレンチ西端では昨年度のI K第31次調査で報告したトレンチの下層で、一辺約8.0mの古墳時代前期の竪穴式住居跡(S H54)を1基検出している。掘立柱建物跡は前述のI K第31次調査概報で報告しているように、トレンチ西側で2棟(S B14・15)、東側で1棟(S B03)の掘立柱建物跡を検出しているのみである。溝状遺構には、右京第589次調査で検出しているS D01の延長上にあるS D01のほか、トレンチ東側ではほぼ南北方向にのびるS D06を検出した。Hトレンチの上層遺構には、古墳時代～奈良時代の溝状遺構や平安時代の井戸(S E11)、水田跡、土壙および自然流路跡(S R06)などがある。自然流路跡(S R06)はI K第31次調査でS R01、S R26として部分的に確認されていたが、4回以上の大洪水層で形成する旧小泉川の支流であることが明確になった。また一辺約95cmの方形井戸(S E11)は、横棧縦板組み合わせ式で、縦板の下部には方形の穿孔がある。S R08は、幅約4m・深さ約40cmの溝状遺構で溝の西辺に沿って等間隔に墨書人面土器が、同東辺からは土師器皿・長胴甕が出土し、好対称を成す。

(石井清司・松井忠春)



第3図 G・Hトレンチ上層遺構平面図



第4図 F・Gトレンチ下層遺構平面図

②下層の遺構(第4図)

今年度の調査では、F-2トレンチで4基、Gトレンチで9基の方形周溝墓を検出した。前者のうち1基がFトレンチのものに対応するため、総数27基に達する墓域を確認したことになる。

Gトレンチで検出した方形周溝墓は、それぞれ数基の単位で溝を共有して連結するが、墓域の端にあたるため、その分布は散漫である。方形周溝墓1基の規模は一辺が10m前後のもの、6m前後のものがある。最も大型となるST73は長辺11m・短辺10mの墳丘をもつ。この方形周溝墓とほぼ同規模と考えられるST50では、南溝の底から遺物が出土している(第5図1)。この溝は検出面で幅1.5m、「U」字形に急激に深く掘削されており、山城地域ではきわめて特異な事例といえる。この溝は遺構面に近いレベルまでは比較的早く埋没したようで、溝底からも溝の中層からも同じ第Ⅱ様式末から第Ⅲ様式初頭の限られた時期の遺物しか出土しない。

今回の調査では、方形周溝墓のマウンドを確認することができた。盛土部分の厚さは、いずれも20~30cm程度で、断面観察も行ったが、盛土の単位は確認できず、やや細かい砂粒を含んだ安定した層として観察される。このマウンド部分は、比較的短期間に埋没したと考えられる周溝部分と異なり、長期間埋没せずに残り、最終的には古墳時代の洪水層と考えられる砂礫層によって埋没している。

主体部を検出するために、マウンドについては弥生時代のベース面まで、トレンチを入れて確認したが、この調査区では検出することができなかった。また、周溝内埋葬についても確実な事例は確認できなかった。

この遺跡では昨年度からの一連の調査によって、墓域の全体像が明らかになりつつあるが、確認できたのはその南西隅のみである。この墓域は、これまでの調査によって北は名神高速道路方面へ、東は大山崎町体育館まで広がることが確認されている。この範囲内に、これまで27基の方形周溝墓が築造されていることが確認されており、今後その数はさらに増加するものと考えられる。後述するように、これらの方形周溝墓は畿内第Ⅱ様式末から第Ⅲ様式初頭にかけてのきわめて短期間に築かれており、造墓主体となる集落が単数であればかなりの規模になるものと考えられるが、そうした集落の存在はまだ知られておらず、周辺調査の報告を待たねばならない。

今年度調査区の隣接地については、平成12年度にも調査が継続して行われる予定である。平成11年度に検出できなかった方形周溝墓の主体部や、周溝内埋葬についても再度検討を行いたい。

(藤井 整)

2. 出土遺物

整理箱にして74箱程度の遺物が出土した。遺物の整理作業は次年度以降も継続実施する予定で、ここでは方形周溝墓出土の弥生土器と、顕著な遺構から出土した遺物について概観する。

①下層の遺物(第5図)

今回の調査区では、GトレンチとF-2トレンチあわせて11基の方形周溝墓を検出した。各周溝墓からは1~3個体のほぼ完形となる土器が出土しているが、その大半の個体は出土状況から

周溝内に転落したものと判断できる。

今年度調査区出土分のうち、主なものを図示した。壺は胴部の張る短頸壺(1)と、広口長頸壺(2・3)がある。ともに、口縁端部にも頸胴部にも加飾を持たない。甕(4~6)はいわゆる大和型のハケ甕であるが、いずれも口縁端部をヨコナデによって整形し、刻目などを持たないことから、森田氏の分類^(注2)でいうところの摂津型にあたるものである。鉢には如意形口縁のもの(7)と直口(8・9)、コップ型で脚台と把手がつくもの(10)などがある。大型の鉢(9)の器壁は厚く鈍重であるが、口縁端部はヨコナデによってシャープに面を形成する。S T 206南溝の中層から出土している。高杯はともに水平口縁であるが、端部を垂下させない。いずれも脚部が未発達で、口縁内面の突帯も矩形化しない三角形のものがつく。

以上の遺物は、短頸壺(1)の存在や、甕の胴部径が口径を上まわることなどから、各周溝墓の時期は畿内第Ⅲ様式でも、最も古い段階に属するものと評価できる。ただし、1点のみ新しい傾向をもつものが出土している。S T 85北溝から出土した把手付きの鉢(7)は、器壁が乳白色で、胎土は長石・石英・チャートを含み、この遺跡で一般的な胎土と区別がつかない。外面にはヘラで斜格子文と鋸歯文が描かれており、縦位置に把手が付く。把手は器壁に差し込む形態のもので、断面は長方形を呈する。脚台部はすでに失われているが、残存部分から方形の透かしが6か所に穿たれていることがわかる。また、その間には三角形の透かしがさらに配置されている可能性が高い。この鉢は口縁端部の処理など、他の方形周溝墓出土土器と比べてやや新しい傾向を持つが、これまでに周辺調査を含めて凹線文をもつような時期の遺物は出土していない。方形周溝墓の墳丘が、のちの時期に再利用された事例が、愛知県朝日遺跡^(注3)などでも報告されているため、位置付けには慎重にならざるを得ないが、現時点ではこの墓域に伴うものと考えている。

今年度調査区で出土した遺物は、包含層資料などを含めても、畿内第Ⅱ様式末~第Ⅲ様式初頭までの短い期間のものに限られ、それ以外の時期の弥生土器は出土していない。

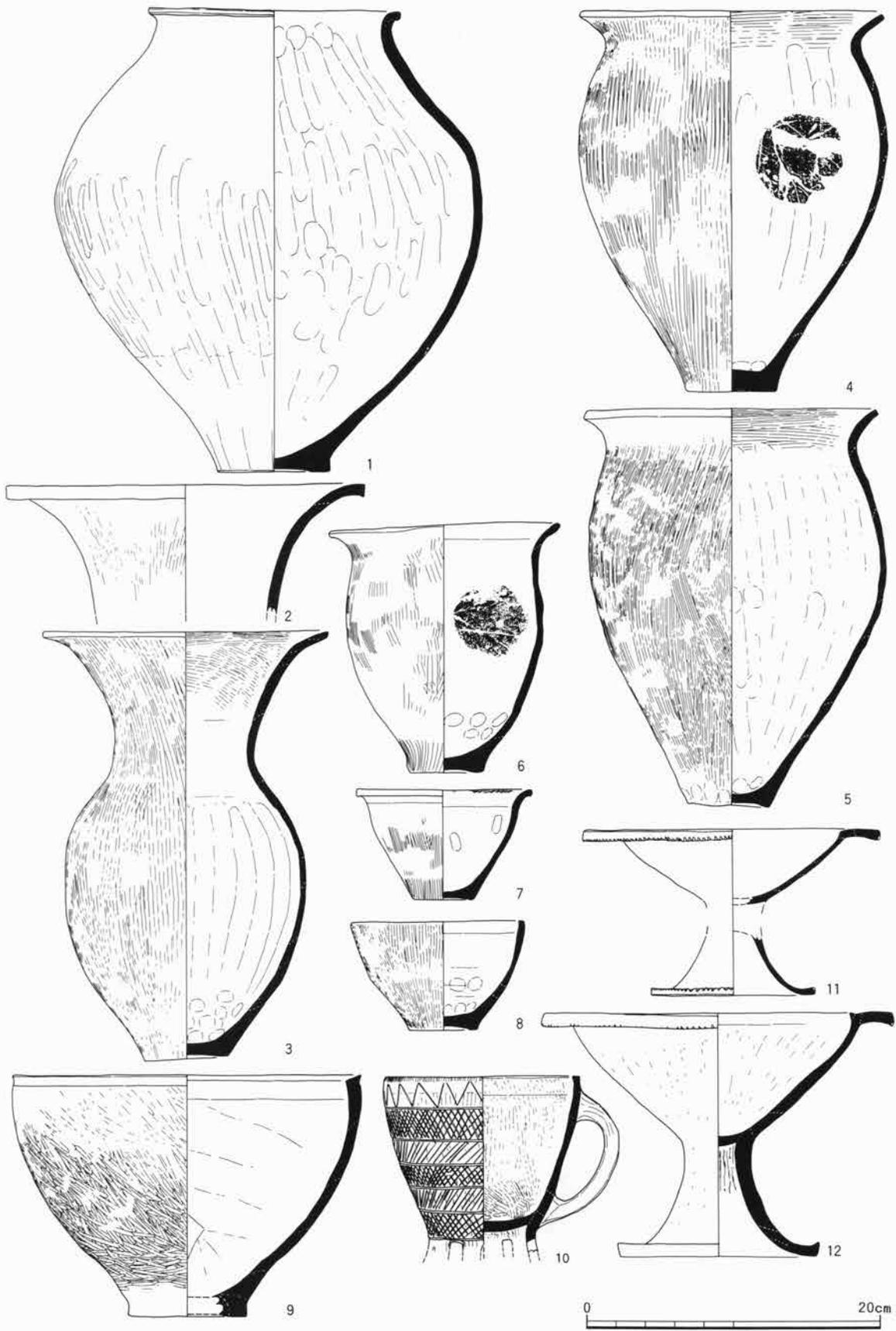
(藤井 整)

②上層の遺物(Gトレンチ)

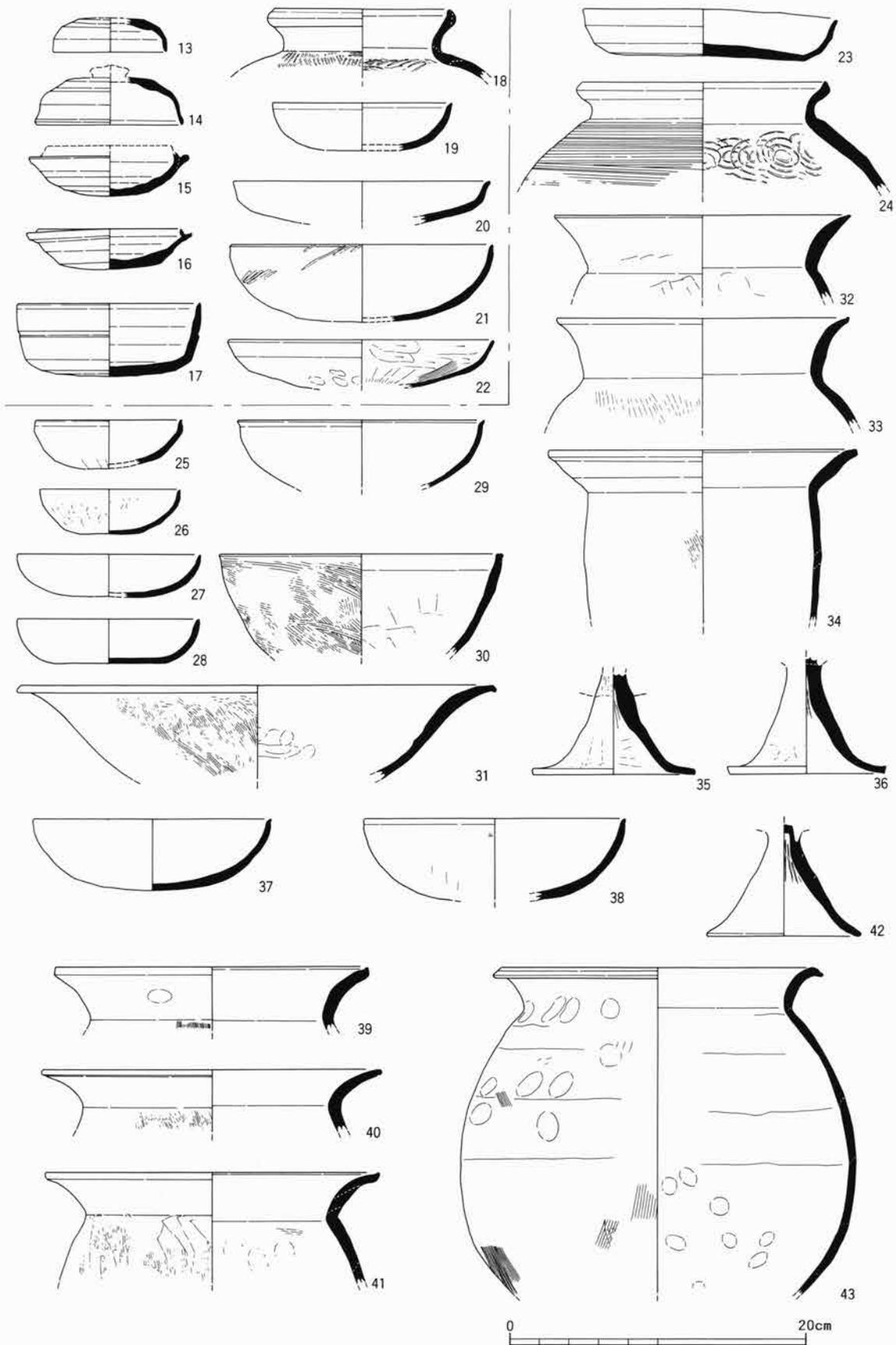
コンテナ約30箱分の遺物が出土した。今回は、溝状遺構S D 59、竪穴式住居跡S H 55・56の一部の土器を図示した。完形で出土した土器は少なく、詳細が不明な遺物も多い(第6図)。

S D 59の出土遺物の多くは、溝底より少し高い位置から出土していることから、ある程度時間が経過した後に、土器を投棄したと考えられる。須恵器蓋杯(13~16)、椀(17)、甕(18)、土師器椀(19~22)などが出土した。13~16は、ヘラケズリを行った後、ナデによって調整しているが16の底部外面には、ナデによってのみ整形されている。17の底部外面は、ケズリを施し、その後ナデで調整を行う。内面は、ヨコナデを行った後、底部にナデを施す。18の体部内面は、タタキを行った後ナデで痕跡を消す。内面には、青海波の当て具痕がある。頸部と口縁部はナデによって調整を行う。19~21は、摩滅のため詳細は不明であるが、22では、ユビオサエの後に、内面を板状工具でナデ、最終調整としてミガキを行う。これらは7世紀前半の特徴をもつ。

S H 55・56の出土遺物の多くは、床面から遊離しているため、住居が廃絶後、ある程度の時間



第5図 弥生土器実測図(1/4)



第6図 Gトレンチ上層遺構出土土器実測図(1/4)
 13~22 : S D59 23~36 : S H55 37~43 : S H56

が経過してから土器を投棄したと考えられる。完形で出土した土器はなく、欠けていたり一部分しかない土器が多く出土した。これらは、7世紀前半から中頃の特徴を持っている。

S H55からは、須恵器杯身(23)、甕(24)、土師器碗(25～29)、鉢(30・31)、甕(32～34)、高杯(35・36)などが出土した。23は、焼成によってひずんだと考えられる。ケズリは中軸線からズレている。ケズリの後ナデによって調整を行っている。24の体部外面は、タタキによって整形を行った後にカキ目を行っている。内面には、青海波の当て具痕がある。頸部と口縁部はナデによって調整している。25～29は、器面が摩滅しているため詳細は不明であるが、26では、ユビオサエの後にナデで調整を行っている。30・31の体部外面はハケで、内面はナデによって調整されている。30の内面には、板状工具でナデている。31の内面では、強いユビオサエ・ナデにより凹凸が顕著になる。32～34の体部外面はハケによって、内面はナデによって調整している。頸部や口縁部もナデによる調整である。32の頸部には、板状端部の圧痕がある。35・36は、ユビオサエの後、ナデで調整を行っている。脚部内外面上端にはしほり痕が残されている。35の脚部内面裾部には、板状工具でなでた痕跡がある。

S H56から出土した土器には、土師器碗(37・38)、甕(39～41・43)、高杯(42)などである。37・38は器面が摩滅しているため詳細は不明だが、38には不規則なハケ痕跡がわずかに残っている。下半部には黒斑がある。39～41・43の外面は、ユビオサエの後にハケ調整を行う。41では、ハケの後に板状工具でナデを施す。内面は、ユビオサエの後に頸部や口縁部にハケを施し、ナデを認める。高杯は摩滅のため詳細は不明であるが、脚部上端内外面には、しほり痕が残される。

(今林信祐)

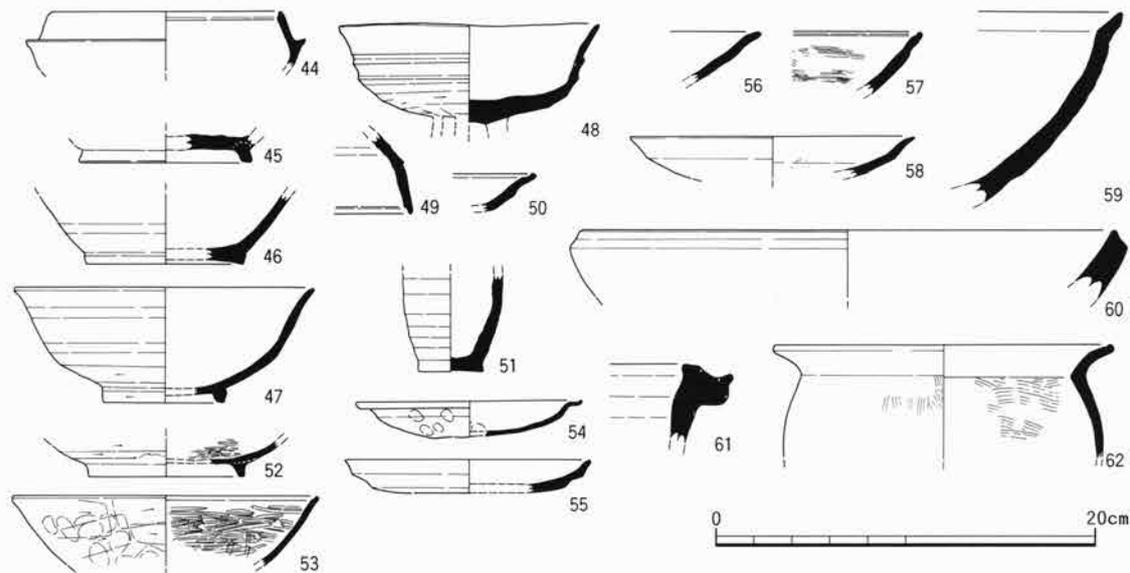
③上層の遺物(Hトレンチ・第7・8図)

遺物の多くは、S R06・S E11・S R08から出土した。以下3遺構出土の遺物を概観する。

S R06からは弥生時代から鎌倉時代の各時代の遺物が出土している(第7図)。実測図には現時点で図化できているものを掲載した。45・46・48・49・51は須恵器である。48・49は高杯および杯蓋で、古墳時代後期の集落に伴う遺物である。45は杯B、46は平高台の碗、51は底部糸切りの小壺である。50・54・55・61・62は土師器で、50・54・55は皿、62は甕である。61は羽釜の口縁部と鐙でいわゆる「撰津C型」^(注4)である。52・53は黒色土器A類の碗、47は京都系の緑釉陶器碗である。この他、灰釉陶器・瓦器・白磁・土馬等が出土している。出土状況については下層から弥生・古墳時代、中層から奈良・平安時代、上層から鎌倉時代の遺物が出土する傾向がある。

S E11から出土した遺物について述べる(第7図)。56・58は土師器皿である。60は土師器の鉢・甕・羽釜のいずれかの口縁部と考えられる。胎土は暗褐色で撰津系のものである可能性がある。57は黒色土器B類の碗である。内外面をていねいに磨いているが、炭素の吸着が悪く色調は淡褐色である。59は須恵器鉢である。ロクロで成形されており、体部下半外面をケズリで調整する。内面には炭素がかなり付着している。胎土は白い砂粒を多く含み、焼成はあまく瓦質に近い。土師器の年代から11世紀前半代の資料と考えられる。

(中島史子)



第7図 Hトレンチ上層遺構出土遺物実測図(1/4)

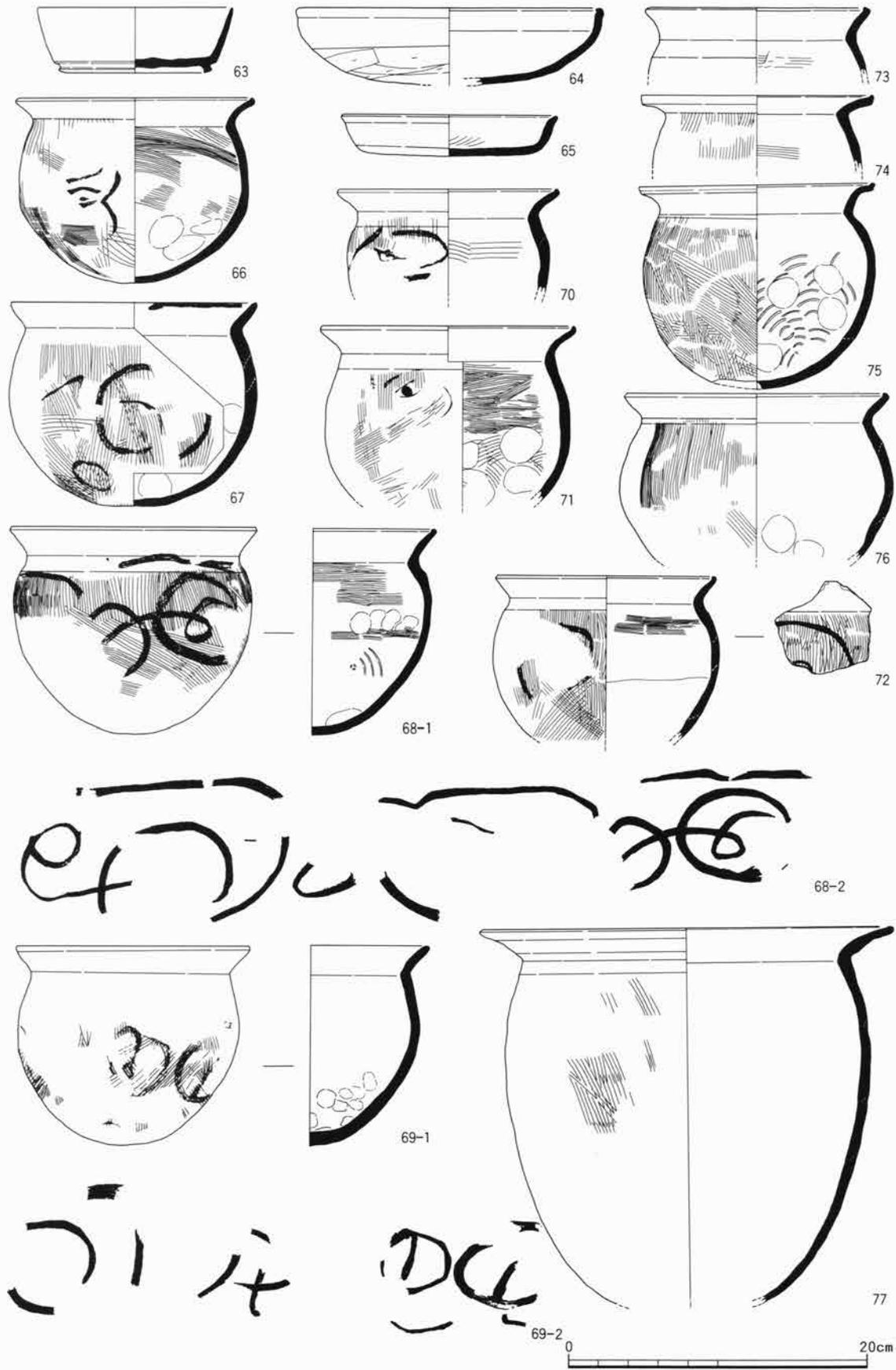
44：S D09 45～55・61・62：S R06 56～60：S E11

S R08から出土した遺物(第8図)には、須恵器の杯身B(63)、土師器の杯C(64)・皿A(65)・甕A(66～76)・甕C(77)などがある。

63の胎土はやや緻密で、色調は淡灰色を呈する。体部から口縁部にかけてわずかに内湾し、高台も外にやや強く踏ん張っている。64の胎土はやや緻密で、色調は淡橙褐色を呈する。口縁端部の折り返しは弱く、口径と器高からしてもあまり見られない形態である。65は胎土が粗く、色調も暗橙褐色で、他の土器とは様相が異なる。内面の暗文は、摩滅のため一部しか認められないが、一段と考えられる。77の甕Cは、頸部から口縁部にかけて大きく開き、口径が胴径より大きくなっている。胎土はやや粗く色調は淡褐色を呈する。

最も注目すべきものは、以下に報告する墨書人面土器^(注5)である。一般に「墨書人面専用土器」と言われる壺B・Cは、底部を型押しして外面に粘土紐の巻き上げ痕を残すが、今回出土した墨書人面土器は、すべて外面にハケが認められ、球形に近い胴部を持つ甕Aに属する。66～68・71・75・76の胴下半部内面に無文叩きが、68と75の胴下半部内面に青海波叩きの技法が確認できる。66・68・70～74の内面には、頸部から胴部内面にかけて板ナデ痕がある。67と76の器形は全く異なるが、胎土はともに硬質で、色調も酷似している。68・69は、他の土器と比較すると底部が尖り気味であるという点で共通しているが、内面調整や胎土が異なる。66は胴部下半で顕著に屈曲し、北河内地域で出土する甕Aの形態に酷似している。75だけが、他の甕Aと異なる淡灰褐色を呈したきめのやや細かい胎土である。この胎土の状況や胴下半部内面に青海波叩きの当て具痕が見られる点などは、北河内産の土器の様相を強く示している。

出土した11個体には、墨書のあるもの(66～72)とないもの(73～76)とがある。甕Aの墨痕は全体的に摩滅して確認しづらいが、外面の墨書の形態は二大別できる。66・70・71は、明確な眉・目・顔の輪郭が表現され、67～69・72は、顔とは判断し難いような円弧が描かれる。67にのみ、口縁端部をなぞるような墨書が見られる。68の胴部内面全体には二次的な被熱の痕跡が認められ、甕



第8図 SR08出土遺物(1/4)

の中で何かを燃やすなどの祭祀的行為を行ったとも考えられる。また75は焼成後、底部が外側から意図的に穿孔されている点から、祭祀具としての性格を持っていたとも考えられる。

ところでこれら遺物の出土状況であるが、63の須恵器杯身は例外として、甕AはすべてSR08の西寄り、それ以外のもの64・65・77はSR08の東寄りで見出されている。さらに甕Aの中でもまとまりが見られ、北側寄りでは66・76と63・71が、そこから少し南に下がった地点で75が、さらに同じ距離南に下がった地点から、67～69が点々と北から並んで出土している。

今回出土した墨書人面土器は、平城宮跡や長岡宮跡においてよく見られる壺B・Cといった、いわゆる「墨書人面専用土器」ではなく、甕Aに墨書するものである。共伴する須恵器や土師器は、総体的に奈良時代後半の様相を示しているが、これらの資料が長岡京遷都直前における大祓の祭祀具として使用された可能性も否定できないであろう。

(尾上 忍)

3. ま と め

今回の発掘調査では、Gトレンチで、古墳時代前期と後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などを、下層からは弥生時代中期前半の方形周溝墓を検出し、Hトレンチでは河道跡、弥生時代から奈良時代までの数条の溝状遺構や平安時代の井戸等を、多くの遺物とともに確認した。巨視的には、集落や墓地としての土地利用はGトレンチのほぼ全域に展開し、それより南側は水利的に活用したにすぎなかった。ただ奈良時代後期に遺跡の南西隅で祭祀を行ったことは注目されよう。

(松井忠春)

(2) 算用田遺跡

1. 調査概要

算用田遺跡は、桂川の支流である小泉川の河口から約1km上流の現河道の右岸に接して立地する遺跡である。調査地は乙訓郡大山崎町円明寺小字井尻地内に所在しており(第1図)、乙訓条里の推定案では三条八里の中の東西に並ぶ十二坪と十三坪にまたがるように位置している。

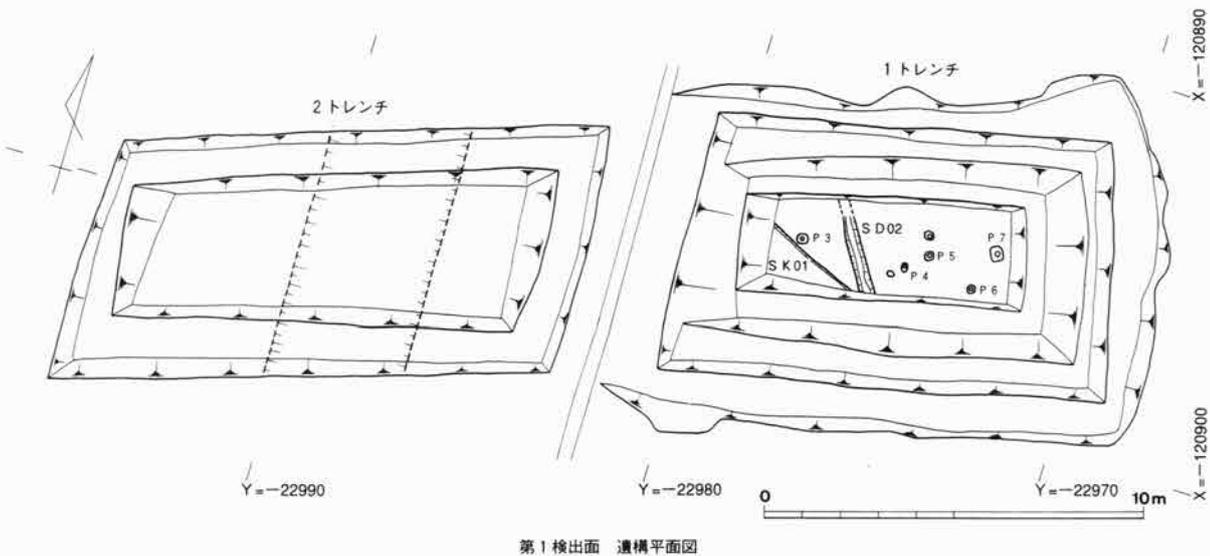
調査地は、路線幅10m前後の狭長な土地で、横断する農業用水路を境に東西2か所のトレンチを設定して調査にあたった。調査前の現地の地勢は、東側に小泉川の堤防があるため、東から西方へ傾斜する緩斜面地を呈していた。したがって、遺構面までの掘削深度が最大で3mを測るため、壁面崩壊防止と湧水対策をとって、トレンチは数段の段掘りを行った。検出面はごく限定された範囲にとどまらざるを得ず、面的な遺構の確認は充分に行い得なかった。

基本層位は、第10図に示したように、上位より1)現耕作土または竹藪の土入れ層、2)中～近世に形成された耕作土および耕地造成土(褐灰色系土、7'層より瓦器碗出土)、3)平安時代前期

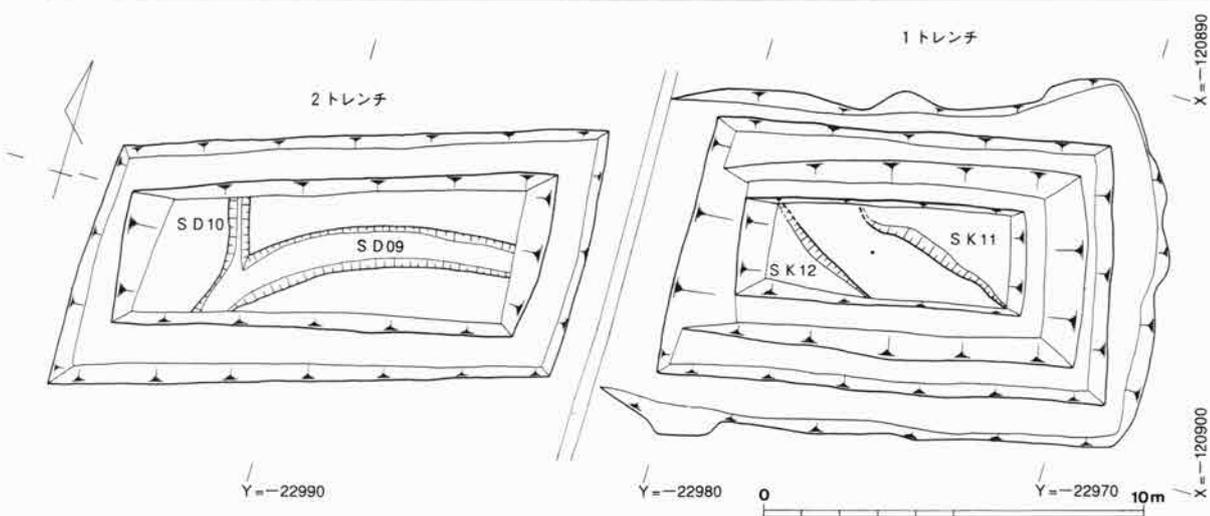
の包含層(灰色シルト質粘土)、4)古墳時代後期の包含層(茶褐灰色砂質土)、5)シルト質～砂礫質の池沼性もしくは河川堆積土(若干の弥生土器片を含む)となる。比較的安定した土層面は、3)・4)層下面に位置し、各面で遺構検出を試みた(第1・2検出面)。各検出面の標高はおよそ10.8mと10.6mを計測する。

平安期の遺構は、調査区の東寄り(1トレンチ)に偏在し(第9図上)、主軸が直線状をなす溝(SD02)や建物としてまとまらない小規模な柱穴(P3～7)、浅くてその外縁線の一侧が直線状をなす土坑(SK01)などが検出された。遺構に伴う遺物は全く確認できなかった。

4)層下面(第2検出面)においては、上縁が直線的なラインを描き底部が平坦面をなす土坑(SK11・12)、およびゆるく円弧を描き東西に流れる浅い溝状遺構(SD09・10)を検出した。SK11は、東方に向かってゆるやかに傾斜して深くなる底部から側壁が外上方に直線的に立ち上がる断面形を示し(深さは最大43cm)、内部に暗灰色系のシルトと粗砂礫が互層になって堆積していた。埋土から弥生土器壺甕底部片や、庄内～布留式併行期の土師器甕小片が若干出土した。これと対

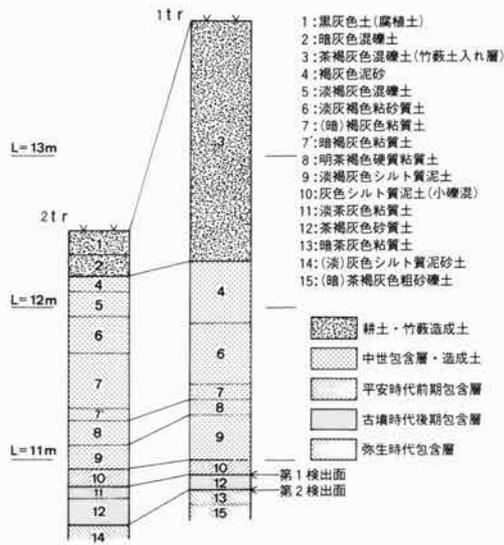


第1検出面 遺構平面図



第2検出面 遺構平面図

第9図 算用田遺跡検出遺構平面図(1/200)



第10図 算用田遺跡土層柱状模式図

角線上に位置するSK12は、SK11と同じく暗茶褐色粗砂礫土をベースにするも、内部の埋土は暗灰色シルトの単一層で、出土遺物中に須恵器片を混じえる点でSK11とは時期を違えるものとみられる。2トレンチのSD09は、検出幅0.9~1.2mを測り、大きく開く「U」字形断面を呈す。上面はかなり削平を受けたものとみられ、残存状態は悪い(深さ最大10cm)。調査区西寄りで南北に流れる浅い溝(上縁幅0.6m)が合流する。合流点付近にて須恵器甕体部片(外面平行叩き、内面スリケシ)がややまとまって出土した。2トレンチでは第2検出面より下位をさらに1mばかり深く掘り下げ、生活面の存在を追跡したが、青灰色系のシルトと砂礫層の互層が厚く堆積しており、これより下位に遺構面は認められなかった。

2. ま と め

今回の調査は、きわめて限られた範囲にとどまったが、古墳時代と平安時代前期の遺構面の存在を確認した。ただ、検出した遺構は伴出遺物が少ないことも含めて、その性格を明らかにするには至らなかった。なお、前回の調査(平成10年度調査)で指摘されていた乙訓郡条里の坪界線(十二坪と十三坪の坪界線)については、その想定位置付近に幅約3mの溝状遺構を認めたが(第9図の破線で示した遺構)、それは2)層上面をベースに掘り込まれており、中世段階を遡るものではないことが判明した。

(伊賀高弘)

注1 穂積優子・中村美也・松野元宏・尾上 忍・壱岐一哉・渡辺咲子・石丸和正・鷲原裕太郎・小山達也・前田修一・今林信祐・谷内高章・大野雅哉・植木理人・田中園子・寺尾貴美子・荻野富紗子・西村香代子・内藤チエ・西村敏子・長谷川マチ子・田中美恵子・堀 大輔・古賀友佳子・田嶽美紀・高田良太・西村美智子・楠木美那子・久米政代・奥島かおり・平林千佳・古川智子・岩戸晶子・小林桂子・奥田久美子・安田純子・玉谷友子・春日満子・村上奈弥

注2 森田克行「摂津地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社) 1990

注3 石黒立人・森勇一『朝日遺跡Ⅰ』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター) 1991

注4 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所) 1983

注5 上村和直「人面土器製作技術の検討」(『長岡京古文化論叢』Ⅱ) 1992

2. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡 発掘調査概要

1. はじめに

平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡は、古代から近世までの遺構・遺物が複合する遺跡として周知されている。今回、当該遺跡地内で、府道大久保宇治川線緊急街路整備工事が計画されたことから、京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施した。調査地は宇治市塔ノ川で、平等院境内の南側に隣接する地点である。調査の目的は、工事に先立って遺構・遺物の広がりとその性格を確認し、記録を作成するとともに、特に重要な遺構・遺物が確認された場合には、その保存のための資料を作成することであった。調査面積は約200㎡である。

調査は平成11年12月20日に着手した。調査後、平成12年2月24日に関係者説明会、25日に機材の撤収・安全対策を行い、28日に終了した。平成12年に出土遺物・図面整理等を行い、本概要報告書を作成した。調査・整理報告にかかる費用は、京都府土木建築部が全額負担した。調査にあたっては、宗教法人平等院、京都府宇治土木事務所、宇治市教育委員会などの関係機関をはじめ、周辺住民の方々に協力していただいた。また、調査補助員・整理員として多数の方々に参加していただいて記録作業を完了することができた。記し、感謝の意を表わしたい。^(注1)

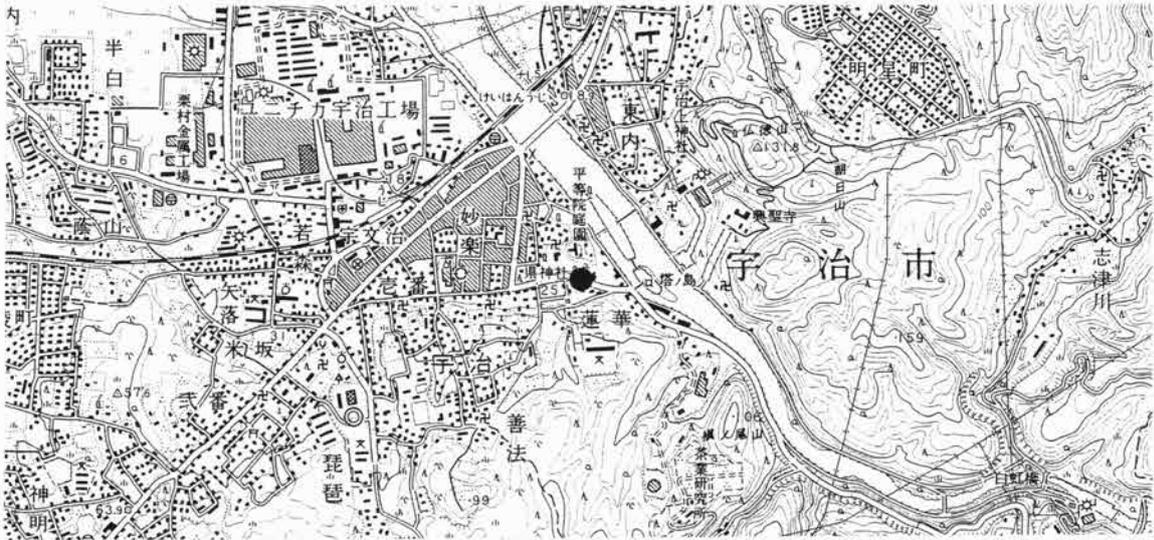
なお、遺物整理・概要報告作成に関する作業は調査第2課第2係主任調査員田代 弘が担当し、執筆は田代、森下 衛(調査第1課資料係主任調査員)、山岡匠平(奈良県立商科大学3回生)が分担した。末尾に文責を記した。

(田代 弘)

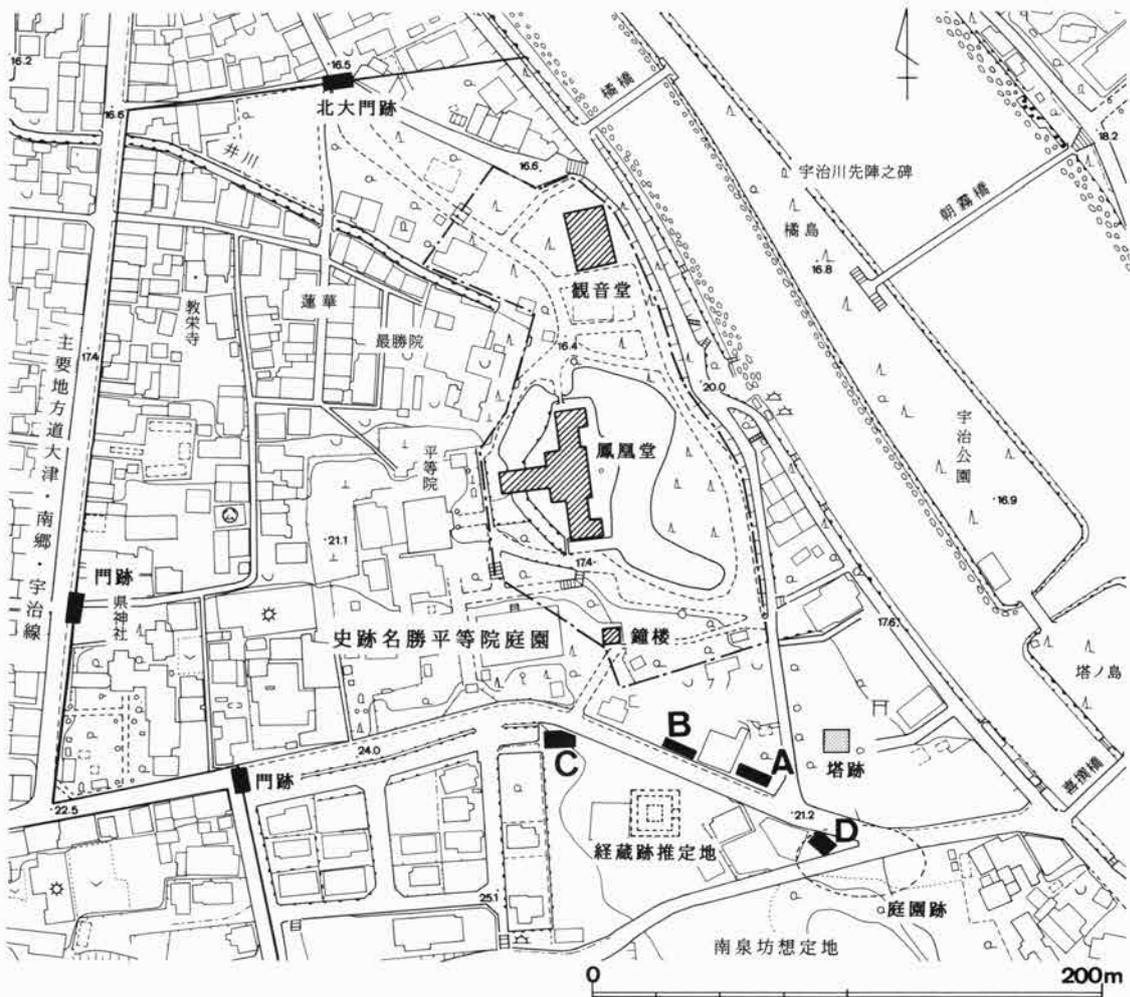
2. 地理的・歴史的環境

今回の調査地は、宗教法人平等院境内の南側を東西に走る主要地方道大久保宇治川線沿線である。鳳凰堂中堂から南に100m内外のところである。この場所は南側の山塊から派生する標高約20mの台地縁辺にあたり、南東には塔ノ川が流れ、丘陵はこれにむかってゆるやかに傾斜しているところである。この道路は現在の平等院境内の南限をなし、杉山信三氏の研究以来、平等院旧境内の南限を示す遺構と考えられてきた場所である。^(注2)

近年、宇治市教育委員会が中心となり、平等院境内周辺で発掘調査・研究が精力的に進められた結果、塔跡や修理所跡、南泉坊に関連する可能性がある庭園遺構が検出されるなど、平等院に関連する新たな発見が相次いだ。これらの遺構の配置を検討する過程で、平等院旧境内の推定範囲、特に南限について見直す必要が生じた。平等院旧境内が、さらに南の丘陵裾部付近に至る可能性が出てきたのである(平等院旧境内跡)。また、下層には縄文時代に遡る遺構(塔ノ川遺跡)が



第11図 調査地位置図(1) (●: 調査地 1/25,000)



第12図 調査地位置図(2) (アルファベットはトレンチ名)

あり、中・近世には門前、街路を軸として数多くの家屋が建ち並び、これに関連する遺構が残っていることもわかってきた(宇治市街遺跡)。以上の成果から、調査対象地は、縄文時代から江戸時代にわたって形成された複合遺跡の一面に位置し、平等院旧境内南部の重要な地点を占めることが確認されたのである。^(注3) これらの調査成果を概観しておきたい。

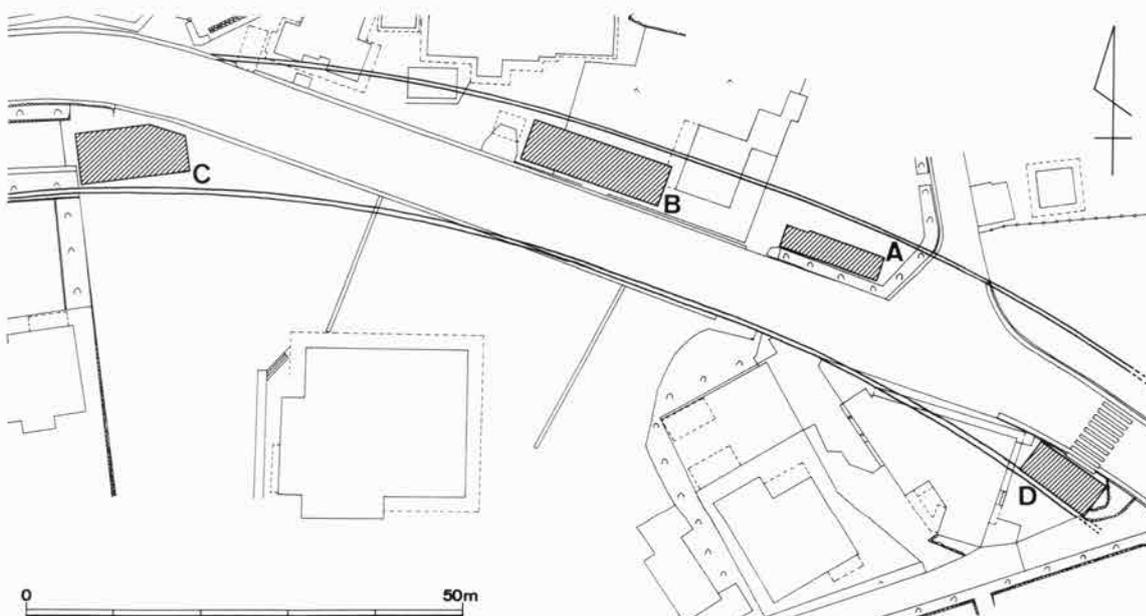
(1)塔ノ川遺跡

平成3年度から実施された史跡名勝平等院庭園整備に伴う調査で、下層に弥生時代に遡る遺跡が存在する可能性が考えられるようになった。平成6年度に塔ノ川周辺で行われた京都府立宇治公園都市公園施設整備に伴う調査で弥生時代末～古墳時代初頭の掘立柱建物跡、古墳時代前期の竪穴式住居跡、古墳時代中期の土坑などの遺構が確認された。加えて、奈良時代を上限とする集落跡であることが明らかとなった。^(注4) 塔ノ川遺跡として周知された。

(2)平等院旧境内関連遺構

庭園遺構 宇治市教育委員会は、平等院旧境内遺跡推定範囲の南東端にあたる丘陵部で、平成5年度に平安期の平等院の庭園跡の一面を確認した。平成10年度に隣接地の試掘調査で、これに続く遺構が発見されたことを受けて、平成11年度に発掘調査が実施された。庭園跡は丘陵縁辺に位置する谷地形を利用して作られ、大小の礫で構成された洲浜、小島ないし岬とみられる人工陸地を伴うことが確認された。平等院坊院のひとつである南泉坊に伴う庭園跡であると推測された。^(注5)

塔跡 塔ノ川遺跡が明らかになった平成6年度の調査で、平安時代末期の基壇建物(S B60)の基壇と考えられる礫の集積が発見された。杉山信三氏はこの場所に藤原頼通の娘四条宮寛子が建立した多宝塔跡を推定しており、S B60はこの塔跡に比定された。この遺構は、平等院旧境内跡に展開した建物群の配置状況、平等院旧境内の範囲を明らかにする上で重要なものである。庭園跡とともに、旧境内の南東端を決定づける遺構である。^(注6)



第13図 調査区の配置図(アルファベットは調査地区名)

宇治市街遺跡 平等院旧境内遺跡の周辺に発展した中世の町屋跡(宇治郷)に関連する遺跡群である。宇治市街遺跡では、平等院関連の調査とあわせて20回を超える調査が実施され、市街の成立と変遷に関する資料が蓄積しつつある。杉本 宏氏^(注7)による詳細な論考がある。

(田代 弘)

2. 調査の経過と概要

a. 調査の経過

対象地内にA・B・C・D地区の4か所の調査区を設け、調査を実施した。最初に、バックホーで表土と包含層の一部を除去した。排土はすべて場外に搬出し、処分した。その後、作業員の手作業により、掘削・精査を行った。包含層から出土する遺物に留意しつつ掘り進め、土色の変化に注意しながら遺構検出につとめた。遺構を検出した段階で、平板による遺構分布略測図を作成し、遺構番号をつけた。遺構を順に掘削し、出土遺物を注意して取り上げた。A地区、B地区、D地区、C地区の順に作業を行った。掘削完了後1/20の尺度で検出遺構実測図を作成した。調査終了後に、遺物を洗浄し、出土地点・層位・出土日を記入した。主な遺物について実測図を作成した。現地で作成した遺構関連の図面・遺物実測図等を整理・製図し、概要報告を作成した。

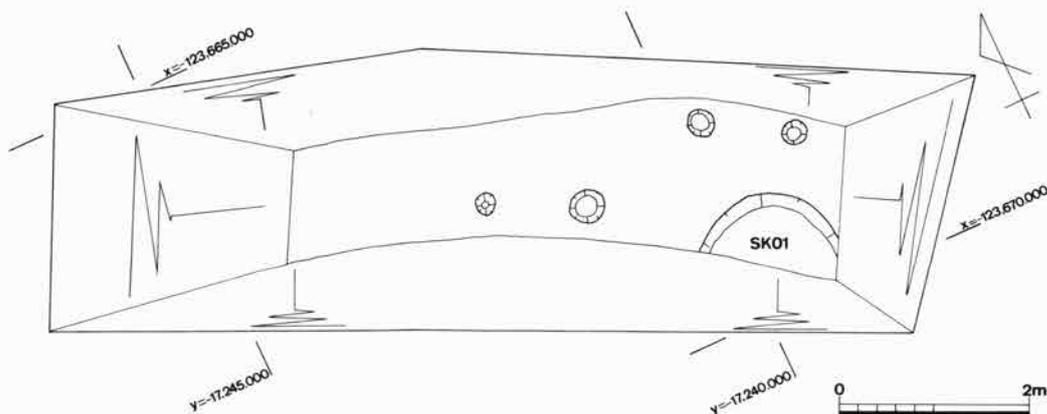
(田代 弘)

b. 各地区の調査成果

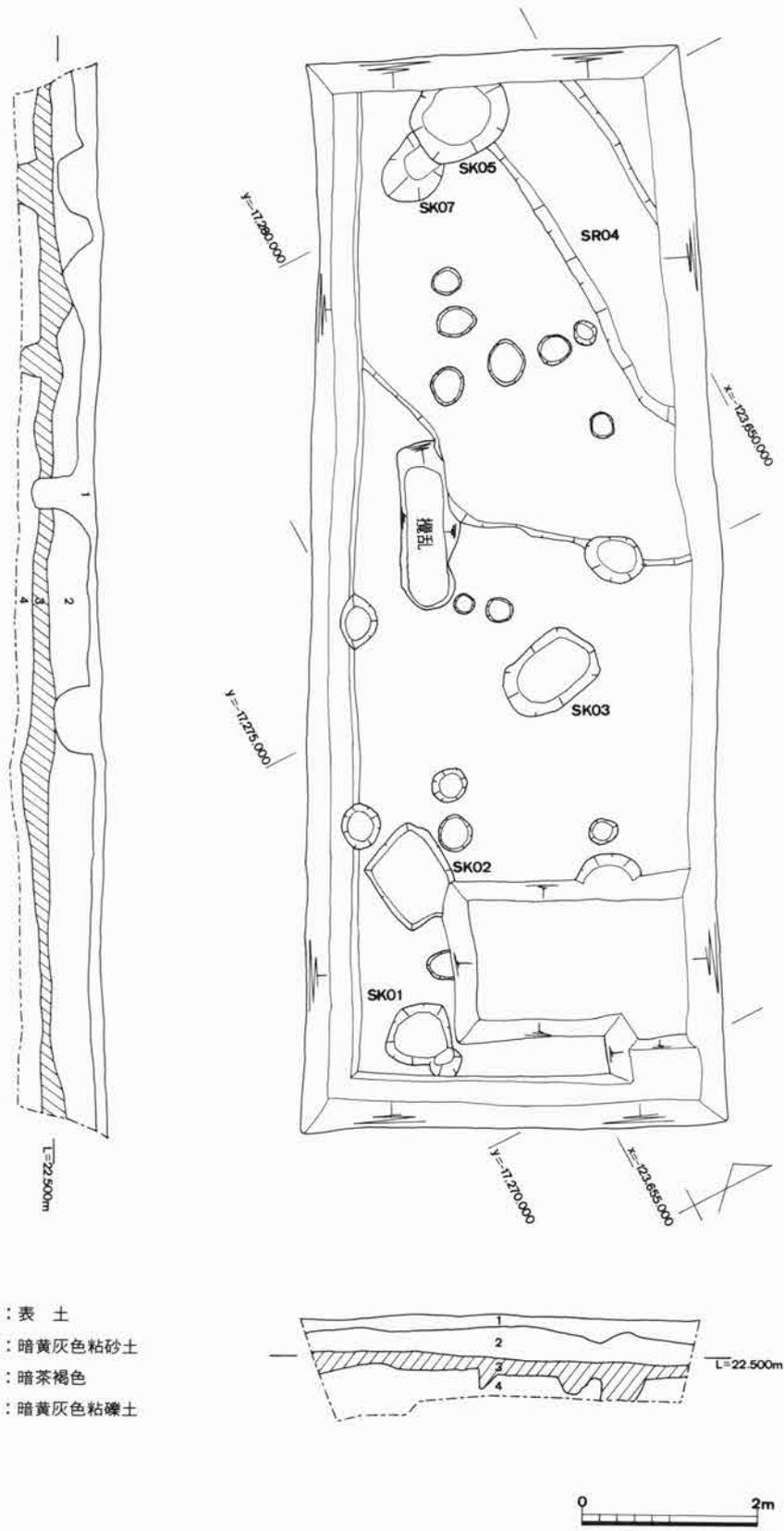
各地区を発掘調査した結果、土坑・ピットなどを検出した。建物跡や建物周辺施設など顕著な遺構の検出には至らなかった。各地区毎に主な遺構を取り上げ、概要を記す。

(1) A地区(第14・19図)

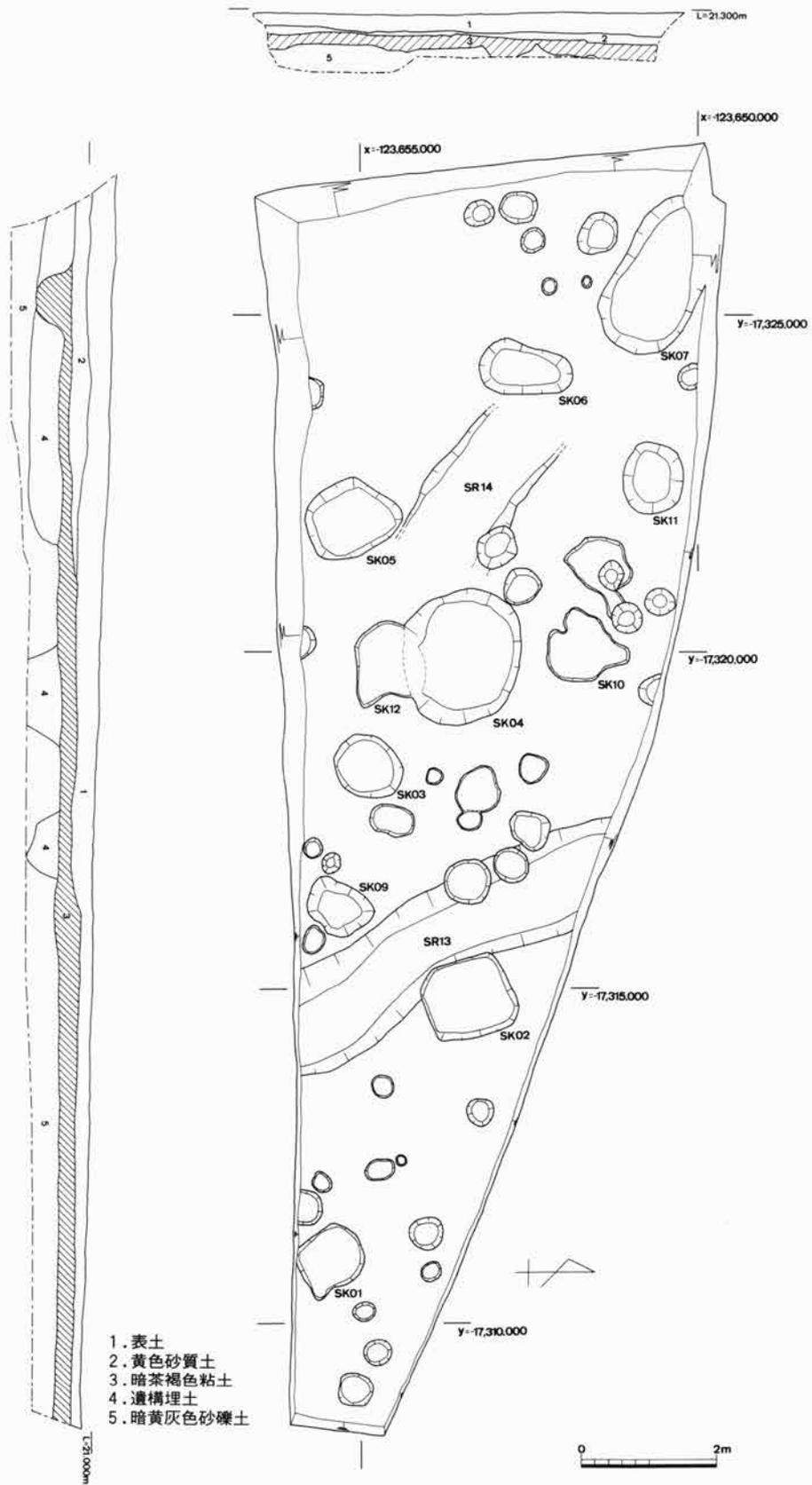
調査地の東端に位置する。約30m²を掘削した。塔ノ川旧流路に近接する場所である。整地層・自然堆積層が厚く堆積していた。第19図は柱状土層図である。層順は、上層から1：黄色砂礫土、2：黒灰色砂礫土、3：黄灰色砂礫土、4：暗灰色砂礫土、5：暗黄灰色砂、6：黒灰粘質土、7：暗灰色砂層上面である。7層上面で土坑、ピットなどを検出した。遺物を伴わないので時期は明らかでない。隣接する調査地区の土層との対応関係でみると、これらの遺構は弥生時代以前



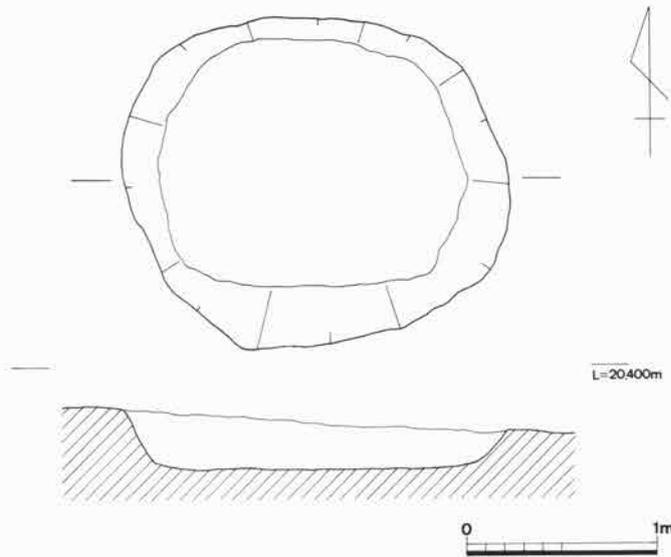
第14図 A地区検出遺構実測図



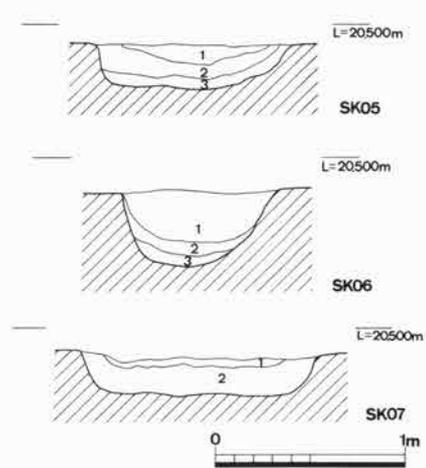
第15図 B地区検出遺構実測図



第16図 C地区検出遺構実測図



第17図 C地区SK04実測図

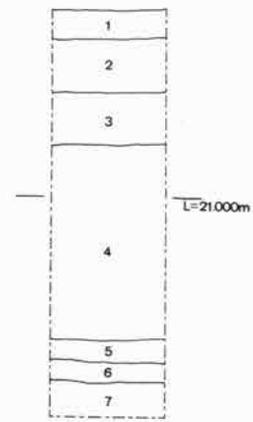


第18図 C地区各土坑断面図
1：黒褐色土 2：黄色砂質土
3：暗黄色砂質土

に属するものと推定される。地山である7層は北東方向に向かって傾斜していることを確認した。塔ノ川旧流路の南岸にあたる傾斜面と推定される。

(2) B地区(第15図)

約60㎡を掘削した。上層の攪乱が著しいが、表土下約50cmに厚さ20cm前後の包含層が遺存していた。包含層は暗茶褐色土を呈し、古墳時代以前の遺物を包含する。包含層を除去した段階で地山である暗黄灰色砂礫があらわれ、この上面で遺構を検出した。遺構は、土坑・ピット・自然流路などを検出した。遺構の中には、弥生時代後期・古墳時代後期の遺物を出土するものがみられるが、遺物を伴わないものが



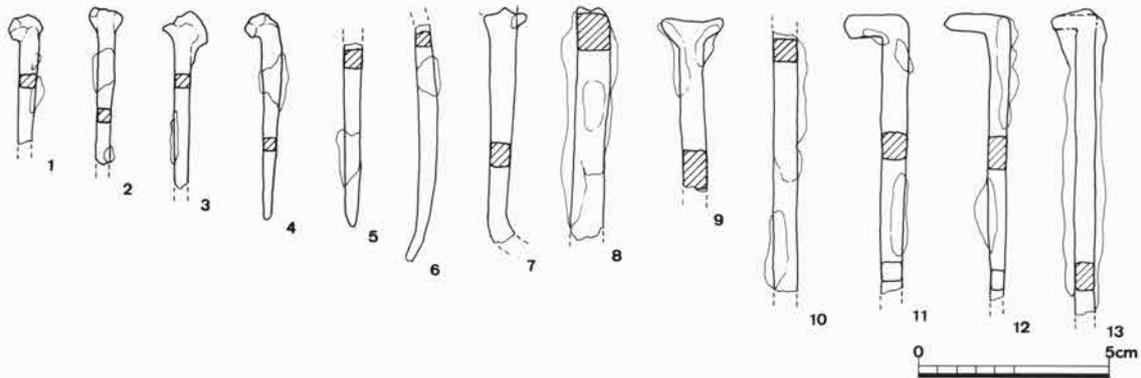
第19図 A地区土層堆積状況図

が多い。平安時代・鎌倉時代など、平等院に関する時期の明確な遺構は検出できなかった。層順は、上層から1：表土、2：暗黄灰色粘砂土、3：暗茶褐色粘砂土、4：暗黄灰色砂礫土である。4層上面で土坑・ピットなどを検出した。第3層が古墳時代を上限とする遺物包含層である。主な検出遺構は以下の通りである。

- SK01 長さ0.75m・幅0.70m・深さ0.40mで長楕円形の土坑である。
- SK02 長さ1.05m・幅0.85m・深さ0.10mで隅丸方形の土坑である。
- SK03 長さ1.10m・幅0.75m・深さ0.15mで隅丸方形の土坑である。
- SK04 長さ4.50m以上・幅1.20m・深さ0.12mの自然流路である。
- SK05 長さ1.105m以上・幅1.00m以上・深さ0.4mの長楕円形の土坑である。
- SK07 長さ0.90m以上・幅0.60m・深さ0.25mで長楕円形の土坑である。

いずれも暗茶褐色粘砂を埋土とする。

(3) C地区(第16図)



第20図 C地区SK04出土鉄釘実測図

鳳凰堂南方に位置する調査地区である。鳳凰堂の南、約100mに位置する。南東約50mの地点に経蔵跡が推定されるなど、平等院旧境内南部地域の重要な地点である。約80㎡を掘削した結果、上層遺構として平等院に関連する遺構、下層遺構として縄文時代・弥生時代の土坑、ピットなど多数の遺構・遺物を検出した。層順は、上層から1：表土、2：黄色砂質土、3：暗茶褐色粘砂土、4：黒色土(遺構埋土)、5：暗黄灰色砂礫土である。

SK01 長さ1.00m・幅0.85m・深さ0.05mで隅丸方形の土坑、灰色砂礫土を埋土とする。

SK02 長さ1.30m・幅1.20m・深さ0.20mで隅丸方形の土坑、灰色砂礫土を埋土とする。

SK03 長さ1.05m・幅0.90m・深さ0.40mで長楕円形の土坑、暗茶褐色粘砂を埋土とする。

SK04 検出遺構で最も重要な遺構である。この土坑は、径が約2m・深さ約1mの円形で、破損した多量の瓦が含まれていた。底部に炭・灰がみられ、火災あるいは修理などの際に不要になった瓦を廃棄・処理した土坑と考えられる。瓦は、平等院鳳凰堂に用いられているものと同じ河内系を主体とし、これまで知られていない形式の文様を有するものもある。平安時代末期から鎌倉時代初期頃に形成された遺構であり、この時期の瓦葺き建物が付近にあったことを示す遺構として重要なものである。

SK05 長さ1.35m・幅1.10m・深さ0.45mで隅丸方形の土坑、黒色土を埋土とする。縄文土器を含む。

SK06 長さ1.40m・幅0.70m・深さ0.70mで長楕円形の土坑、黒色土を埋土とする。縄文土器を含む。

SK07 長さ2.50m・幅1.25m・深さ0.25mで長楕円形の土坑、黒色土を埋土とする。縄文土器を含む。

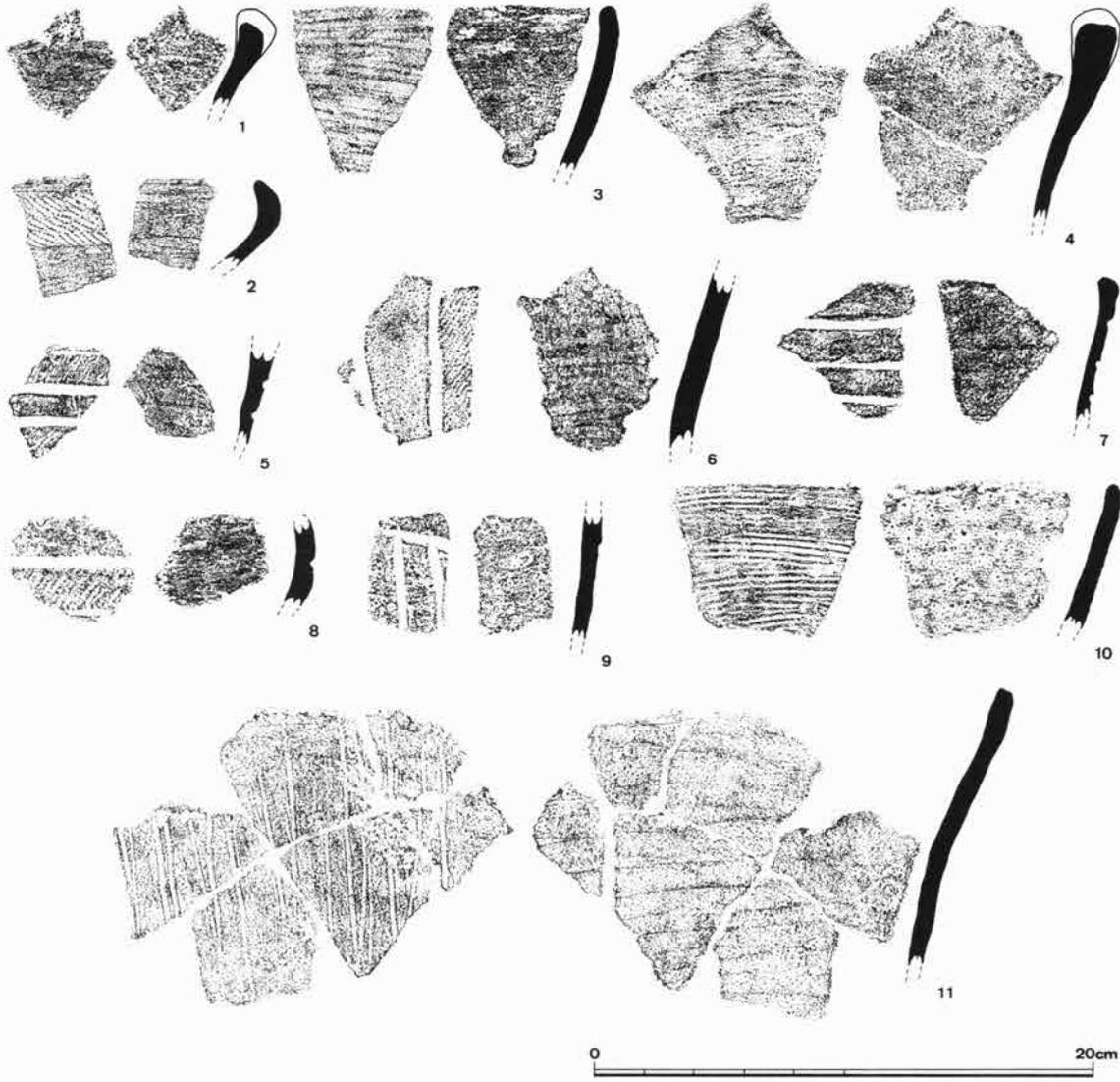
SK09 長さ0.95m・幅0.70m・深さ0.15mで長楕円形の土坑、暗茶褐色粘砂を埋土とする。

SK10 長さが東西に1.05m、幅が南北に0.90m以上、深さ0.07mで不整円形の土坑である。

SK11 長さ1.10m・幅0.90m・深さ0.20mで長楕円形の土坑である。黒色土を埋土とする。縄文土器を含む。

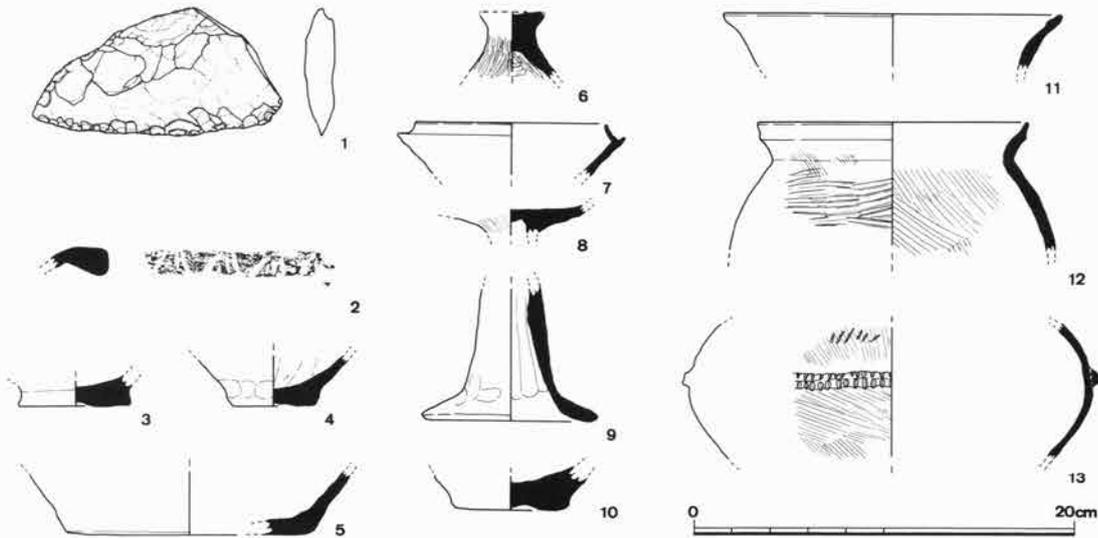
SK12 長さ1.10m・幅1.00m以上で隅丸方形の土坑、暗茶褐色粘砂を埋土とする。

SR13・14は自然流路である。B地区SR04と関連するものであろう。



第21図 C地区トレンチ出土縄文土器実測図

1・5: pit01 3: pit21 4: pit24 6・7: SK08 8: pit28 9: pit27 10: SK03 11: SK05



第22図 B・C地区出土遺物実測図

1～6: C地区包含層 2・4・10・11: B地区包含層 5: C地区pit28 7: C地区SD04
8: B地区SD04 9: B地区SK01 12: B地区SK12 13: B地区SK05

(4) D地区

地山である暗灰色砂層まで攪乱土層を除去して精査を繰り返したが、遺構を検出することはできなかった。

(山岡匠平・田代 弘)

C. 出土遺物

(1) 各地区出土遺物(第21図1～11、第22図1～13)

A・B・C各地区で、縄文時代から平安時代にかけて製作・使用された遺物が出土している。出土遺物は、後述するSK04以外はほとんどが細片化している。主なものを図示して説明する。

縄文時代の遺物 縄文時代に属するものは各地区からまばらに出土している。C地区土坑およびその周辺から出土した遺物を図示した。C地区出土遺物は、第21図1～11、第22図1・5である(第21図)。1～4・5～11は深鉢、2は浅鉢である。1・3・4・10が条痕文系、2・5～9が擦消縄文系に属するものである。後期に属するものであろう。第22図1は、横長剥片の一边を調整して刃部とした安山岩製の削器である。5は深鉢の底部である。

弥生時代の遺物 弥生土器は細片となったものが多い。各地区の暗茶褐色土層中において検出している(第22図)。2・4・6・10・12・13は弥生土器である。2は山形文を施した壺の口縁部である。4・10は中央にくぼみをもつ甕の底部である。6は蓋のつまみである。12は二重口縁の甕である。体部外面に叩き成形痕がある。13は最大腹径部に刻み目突帯を施す壺である。いずれも後期末に属するものである。

古墳時代の遺物 須恵器・土師器がある。須恵器には杯身・蓋、甕体部破片、土師器には甕、高杯がある。第22図7は須恵器杯身である。8・9は土師器高杯、11は土師器甕である。

奈良～平安時代の遺物 須恵器・土師器の細片がみられるが、時期の明確な遺物はあまりみられない。3は土師器碗の底部である。

(2) C地区SK04出土遺物(第20・23～29図)

①遺物出土状況

SK04は表土直下で検出した円形土坑である。上面が削平されていたが、遺物の遺存状況は良好であった。多量の瓦類と少量の鉄釘が出土した。

鉄釘(第20図) 土坑内から瓦破片に混在した状況で出土した。断面方形の鉄棒の一端を屈曲させて頭部としたもので、6cm前後の細く短いタイプ(1～5)、太めで長いタイプ(6～13)がある。瓦を固定するために用いられたものであろうか。

(田代 弘)

②瓦類(第23～29図)

多量の瓦類が出土したので、分類をして主なものを図示した。^(注8)

軒丸瓦1(第23図1)は、複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当上半部の破片であるが、径16cm・中房径5.7cmに復原される。花卉は互いに接し、子葉には圏線を付す。やや大ぶりの中房には、右巻きの二巴文を配す。周縁は幅広の平縁である。焼成はやや軟質で、表面が黒灰色、断面は暗

灰色を呈する。

軒丸瓦 2 (第23図 2) は、複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当部の約1/3を残し、径15.6cm・中房径5.8cmに復原される。文様構成は基本的に軒丸瓦 1 に共通するが、中房に左巻きの二巴文を配する点で異なる。焼成はやや軟質で、表面が黒灰色、断面は暗灰色を呈する。

軒丸瓦 3 (第23図 3) は、三巴文軒丸瓦である。左巻きの三巴文を主文とし、巴文の頭部は互いに離れ、尾部は長く伸び、互いに接して圏線状となる。外区には、幅広の圏線(幅約0.9cm)を配し、周縁(平縁)へと至る。瓦当下半、1/2程度の破片であるが、径13.8cm・中房径0.9cmに復原される。焼成は良好で、暗灰色を呈する。

軒丸瓦 4 (第23図 4) は、剣頭文状の花弁からなる単弁蓮華文軒丸瓦である。やや大ぶりの中房に左巻きの巴文を配し、その周囲に圏線(内側一重、外側二重)に囲まれた大粒の珠文帯を配す。周縁は幅広の平縁である。ここでは、中房部から花弁の一部を残す破片と、珠文帯から周縁を残す破片の2点を確認しているが、同一個体と判断し図示している。復原径15.6cmを測る。焼成はやや軟質で、表面が黒灰色、断面は暗灰色を呈する。

軒丸瓦 5 (第23・24図 5～9・11) は、複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径15.3cm・中房径5.1cmを測る。文様構成は基本的に軒丸瓦 1 に共通するが、花弁内の子葉に圏線を配さない点、中房がやや小ぶりとなり右巻きの三巴文を配す点で異なる。焼成はやや軟質で、表面が黒灰色、断面は暗灰色を呈する。

軒丸瓦 6 (第24図10) は、先端の窪んだ平坦な板状の花弁からなる単弁十二葉軒丸瓦である。中房には右巻きの三巴文を配す。文様構成は、明らかに先の軒丸瓦 1・2・4 の系譜上でとらえられるものと考えられるが、瓦当径がやや小ぶりとなり(13.5cm)、複弁が単弁となるとともに、表現に繊細さおよび起伏がなくなる。焼成はやや軟質で、表面が黒灰色、断面は暗灰色を呈する。

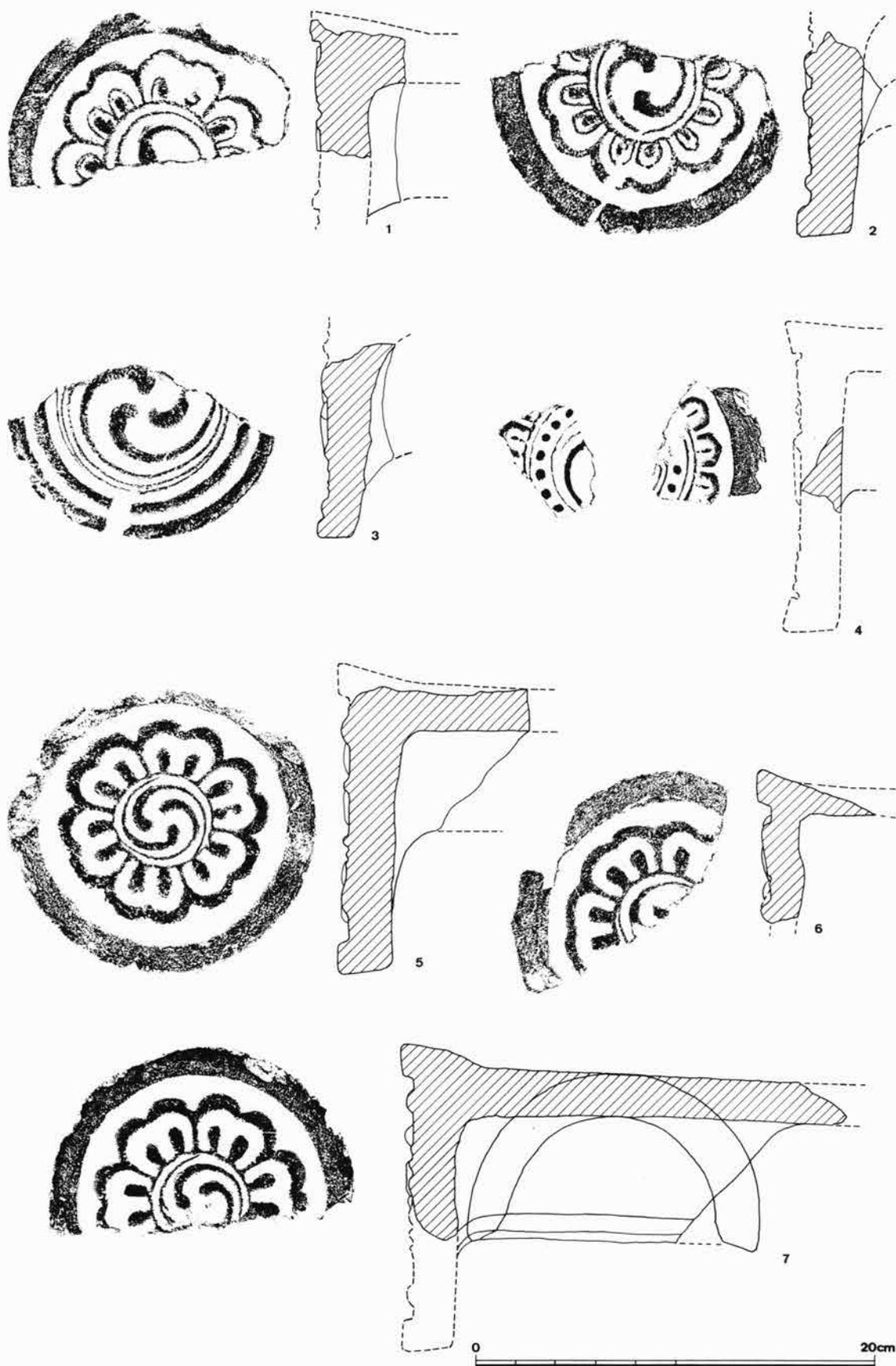
鬼瓦(第24図12)は、向かって右側下半(右脚部付近)を残す小片である。このため、全体の文様を復原するのは困難である。

軒平瓦 1 (第27図15) は、均整唐草文軒平瓦の瓦当中央付近の破片である。達磨様の花頭状中心飾りと左右にのびる蕨手文様の一部、上外区に列点文状に配された太い縦線が認められる。段顎で、凸・凹両面ともナデによって仕上げられる。焼成は良好で、暗灰色を呈する。

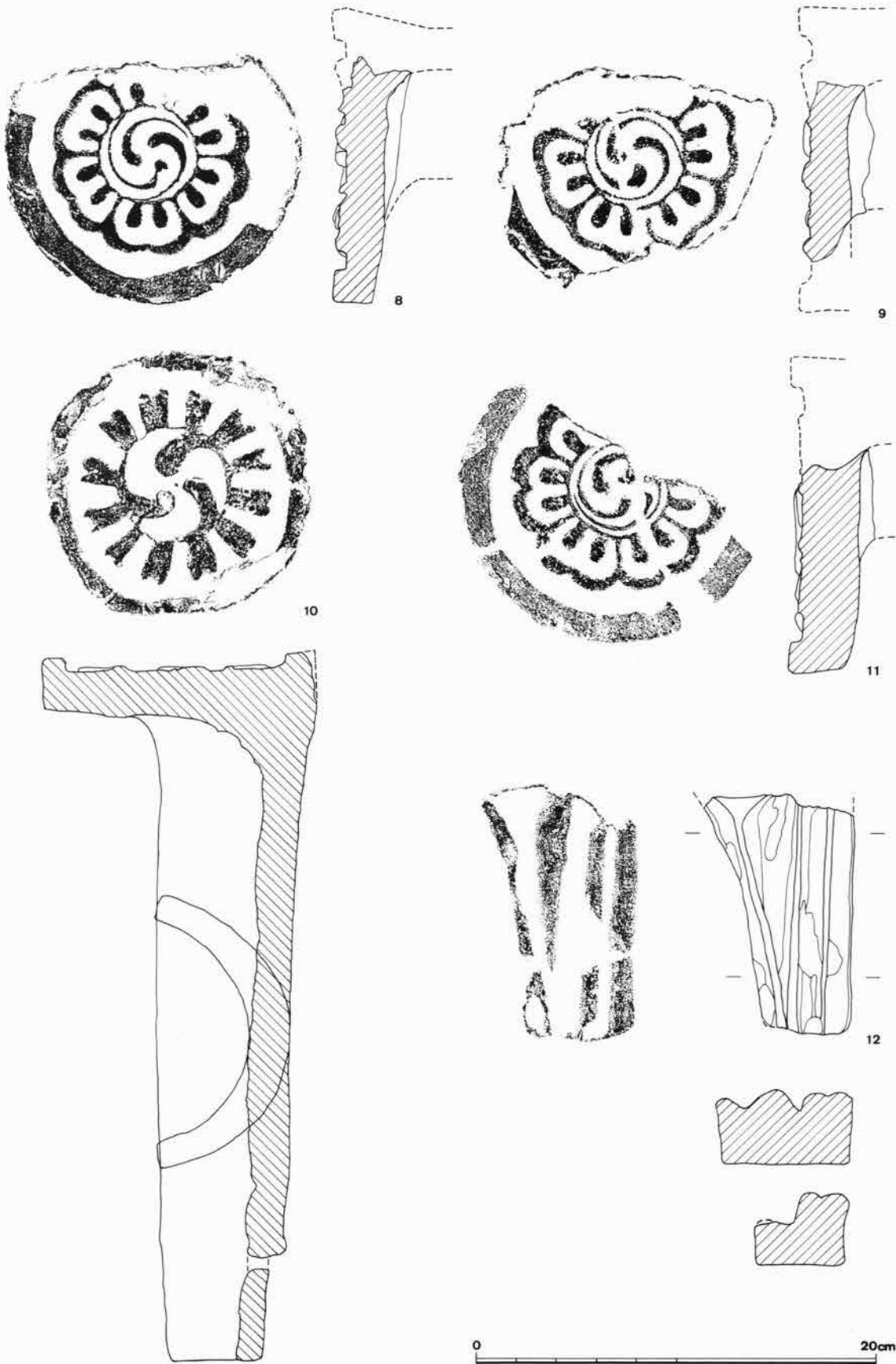
軒平瓦 2 (第27図16) は、均整唐草文軒平瓦で瓦当面の中央付近から左半分を残す。花頭状中心飾りから左側へ蕨手文様が上方から三反転するが、二転目が二葉となる。段顎で、凸面はナデによって仕上げられ、凹面には布目が観察される。焼成は良好で、暗灰色を呈する。顎の一部に塗朱の痕跡が認められる。

軒平瓦 3 (第26図14) は、巴文を主文とする。瓦当左端付近を欠くが、全体で巴文を七連配したのと考えられる。段顎で、平瓦部の凸面には縦位の縄叩き、凹面には布目が観察される。焼成は良好で、表面が黒灰色、断面は暗灰色を呈する。同種の軒平瓦小片がほかに3点出土している。

平瓦(第28・29図17～21)は、凸面に観察される叩き文様から、ここに図示した5種類が認められた。^(注9)18は有芯の粗い斜格子、19は細かい斜格子、20は複線による粗い斜格子、21は鋸歯文であ



第23図 C地区SK04出土瓦実測図(1)

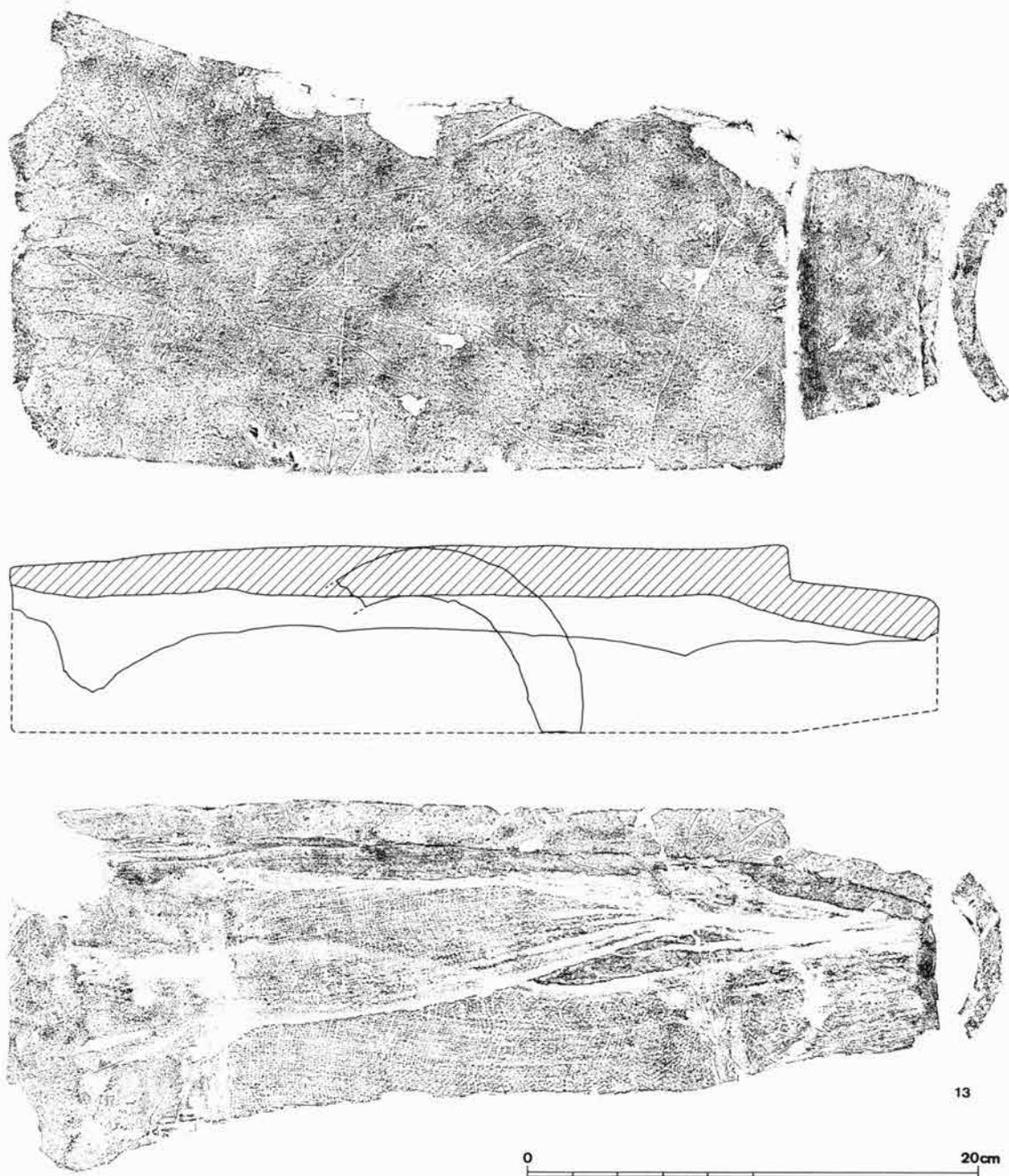


第24図 C地区SK04出土瓦実測図(2)

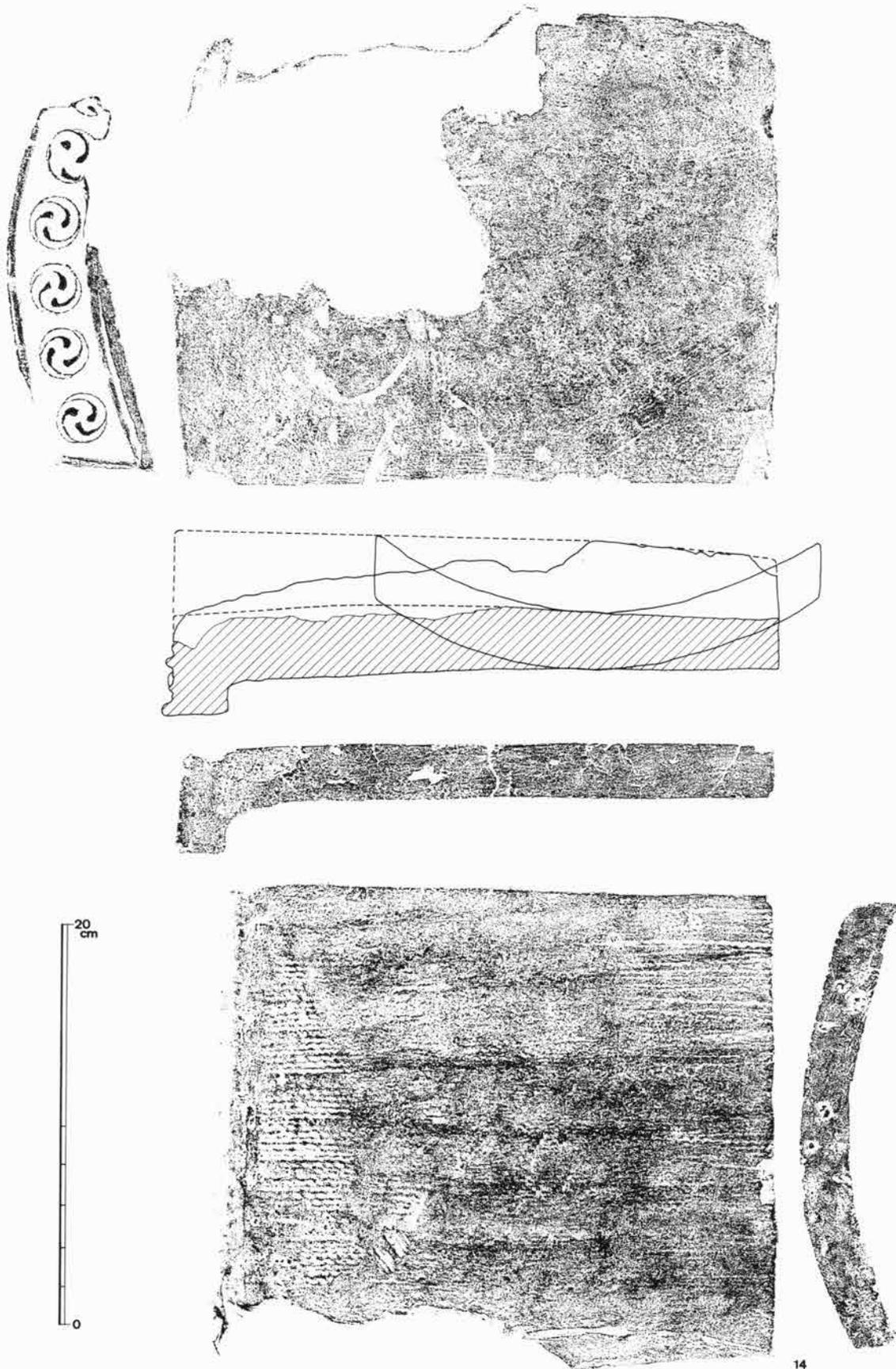
る。いずれも凹面には布目が認められる。中世期の平瓦である。17は、凸面に縦位の縄叩きが確認できるもので、ほぼ完形に復原できた。全長31.2cm、幅は広端面で25.2cm、狭端面で22.8cmを測る。凹面には布目および糸切り痕が観察される。平安後期のものである。

丸瓦(第25図13)は細片が多く、また凸面の叩きはナデもしくは削りによって消されているため細かな分類はできなかった。ここには完形近くに復原できたものを図示した。玉縁式の丸瓦で、凸面はナデによって仕上げられ、凹面には布目が確認される。全長41.4cmを測る。^(注10)

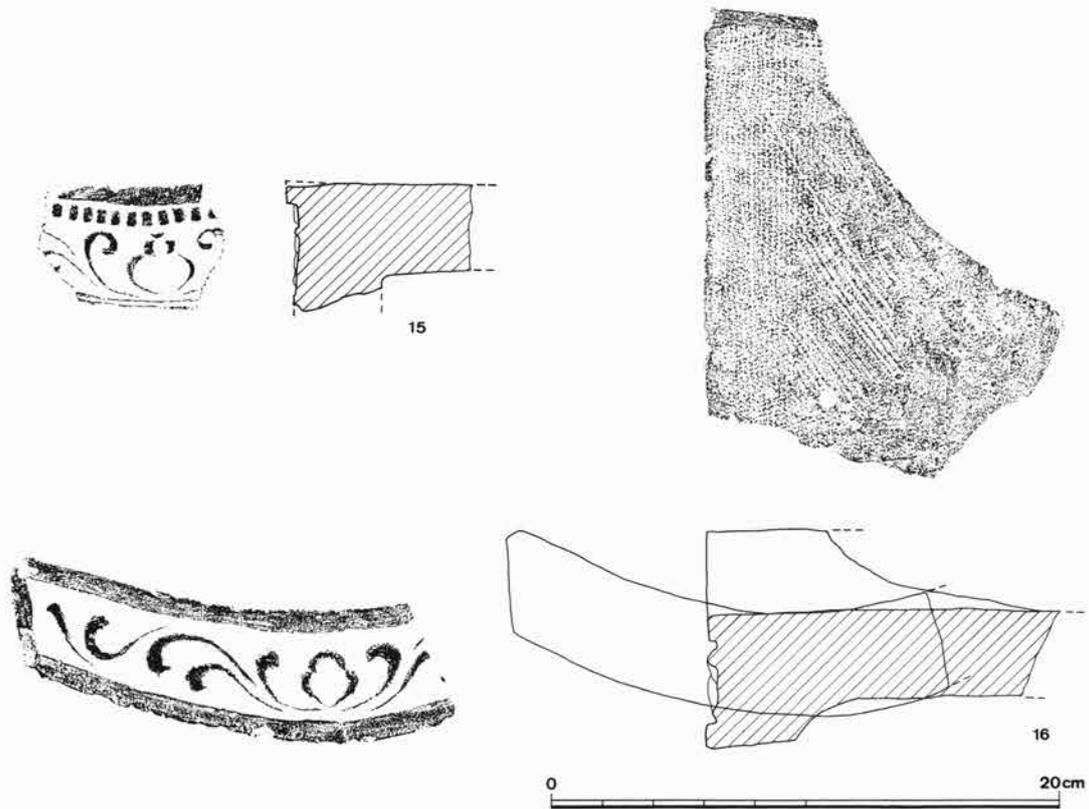
以上が出土瓦の概略である。このうち、軒丸瓦1・2・5および軒平瓦1・2は、従来から、河内産軒瓦と認識されているものである。こうした河内産軒瓦については、近年、宇治市教育委



第25図 C地区SK04出土瓦実測図(3)



第26図 C地区SK04出土瓦実測図(4)



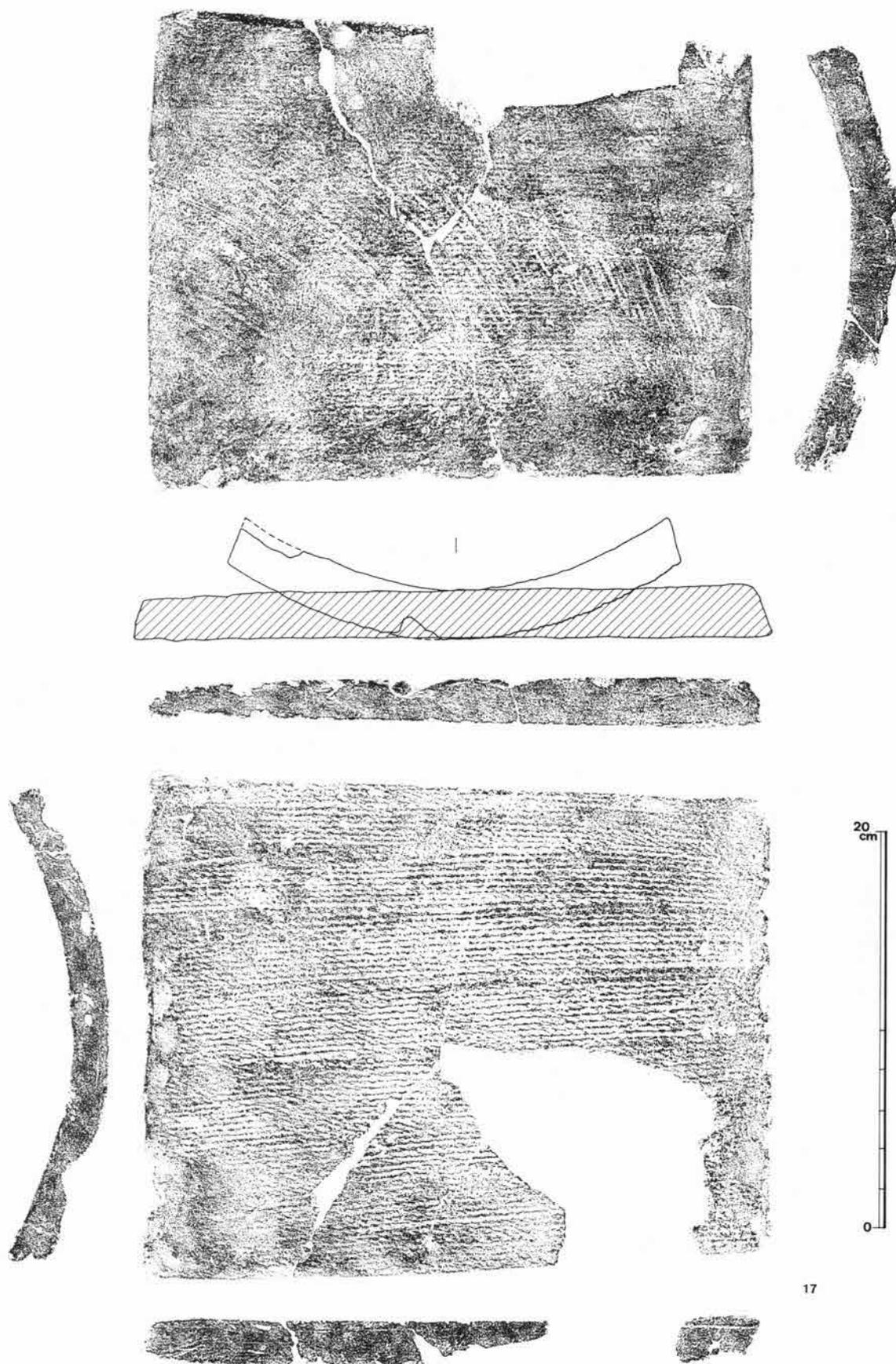
第27図 C地区S K04出土瓦実測図(5)

員会が進めている平等院境内地の調査成果に基づいて詳細な分析が行われている。これによれば、軒丸瓦1は、平等院所用の河内産軒瓦のなかでもっとも古く位置づけされ、11世紀後半に造営された小御所に使用された軒丸瓦の主体を占めるものである。軒丸瓦2も、文様構成からこれとほぼ同時期のものと考えられる。また5は、その後、12世紀初頭の大修理で瓦葺きとされた鳳凰堂の屋根に葺かれた軒瓦の主体をなすものである。^(注11)

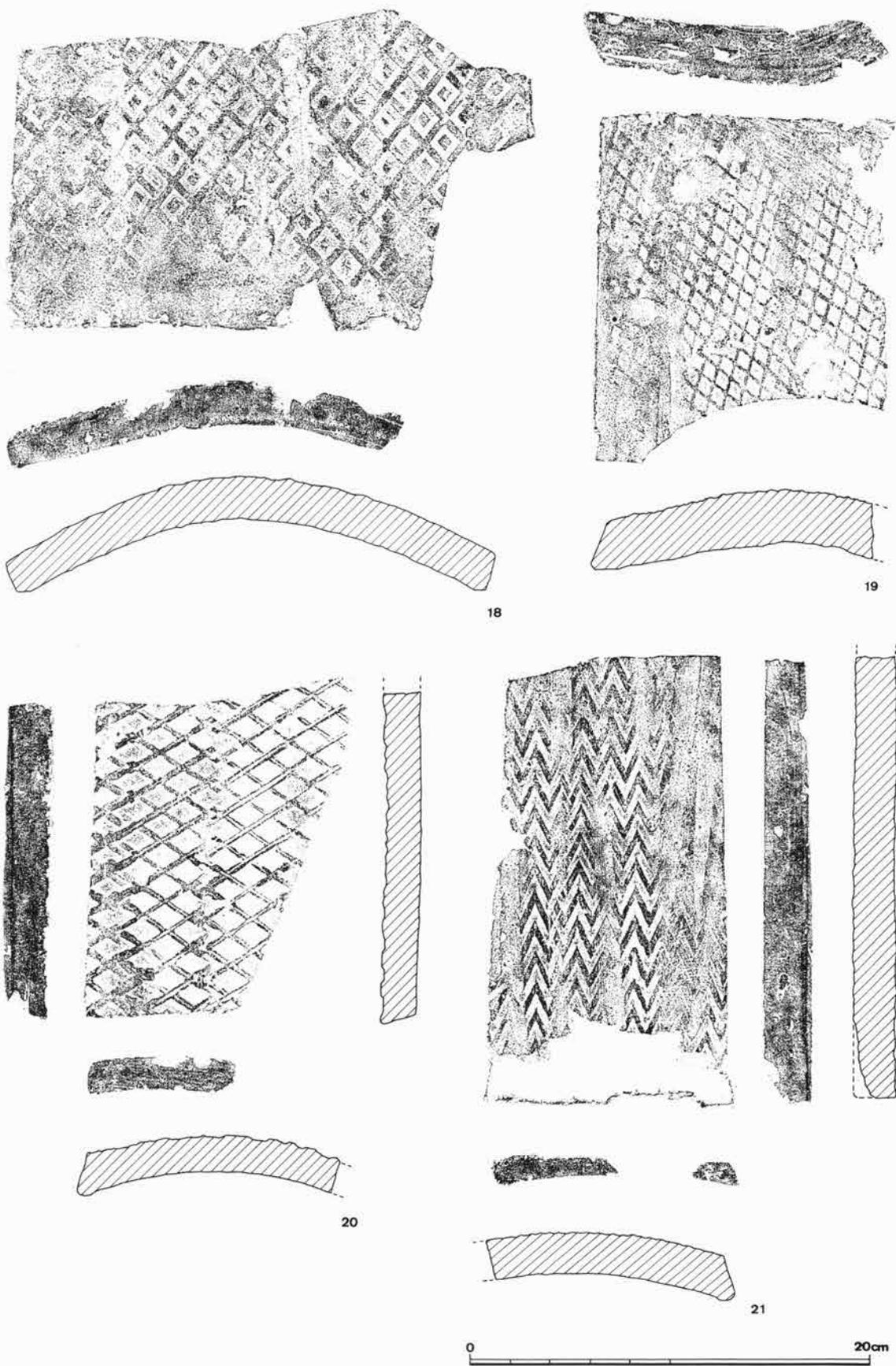
一方、ここでは軒丸瓦6など、過去の平等院旧境内の発掘調査で確認されていなかった新形式の軒丸瓦も認められた。製作技法等について詳細な検討は行えなかったが、文様的にはきわめて平坦な表現となったもので、一定の期間を経た後、補修用として旧来の主体的な軒丸瓦をまねて製作されたものと考えられる。詳細な時期的位置づけについては保留せざるをえないが、13世紀段階にも繰り返し行われた平等院の修理にもなって使用されたものと理解しておきたい。

さて、今回報告した瓦溜まり資料は、上記のように河内産軒瓦に加え、平安後期から中世にわたる時期の瓦類が混在している。従来から、宇治市教育委員会により指摘されているように、今回の調査地近隣には、江戸期に旧境内を構成するいくつかの堂宇の痕跡を示す土壇が遺存していたようである。瓦溜まりという性格上、細かな検討は行えないが、今回の資料がこうした旧境内を構成していた何らかの建物に伴う軒瓦の様相を示すものと考えている。

(森下 衛)



第28図 C地区S K04出土瓦実測図(6)



第29図 C地区S K04出土瓦実測図(7)

3. 成果と問題点

以上のように、府道の拡張工事予定地の4か所を対象として発掘調査を実施した。主な成果は次の3点である。

①平等院に関する遺構と遺物 C地区で検出した瓦集積土坑から出土した瓦は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての河内系を主体とするものであった。資料中には新出の瓦当紋様も含まれており、これまで知られていない新たな建物跡が、この付近に存在したことを強く示唆している。平等院旧境内南部地域においては経蔵跡が推定されてはいたが、瓦葺き建物があったことを裏付ける資料はこれまでは得られていなかった。平等院旧境内における建物配置を検討していく上でたいへん貴重な資料といえる。

②下層の遺構と遺物 B・C地区周辺では、平等院造成以前の遺構・包含層を確認した。B地区では約20cmの安定した包含層が認められた。両地区で、縄文時代後期・弥生時代後期・古墳時代後期の遺構・遺物をまばらに検出した。平等院境内の調査でも同様の成果が得られており、この付近は長期間にわたる複合遺跡であるといえる。

③塔ノ川について A地区では、旧塔ノ川南岸を構成すると推定される傾斜面を検出した。検出面は現地表下1.5～2mと深い。塔ノ川旧流路の規模や形状についてはあまり情報がないので、一定の成果として評価しうるであろう。塔ノ川は平等院旧境内南限付近を東流して、宇治川に注ぐ流路で、北岸の微高地では藤原寛子が造営した多宝塔、対岸の南岸では南泉坊の一面と推定される庭園跡などが確認されている。塔ノ川の流路の変遷を明らかにすることは、両施設および平等院旧境内周辺の当時の歴史的景観をより具体的にすることにつながると思われるのである。

(田代 弘・森下 衛)

注1 調査補助員：浅田忠芳・奥 浩和・山岡匠平 整理員：陸田初代・森川敦子・楢本順子

注2 杉山信三・赤井達郎「平等院と藤原の寺院」(『宇治市史』I 宇治市役所) 1973

注3 杉本 宏「宇治橋架橋位置変更と宇治市街の成立」(『平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報』宇治市教育委員会) 1994

注4 宇治市教育委員会 「平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報—京都府立宇治公園都市公園施設整備に伴う発掘調査—」(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第24集) 宇治市教育委員会 1994

注5 宇治市教育委員会 「平等院旧境内遺跡発掘調査概報」(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第43集) 宇治市教育委員会 1999

注6 宇治市教育委員会 「平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報—京都府立宇治公園都市公園施設整備に伴う発掘調査—」 宇治市教育委員会 1994

注7 杉本 宏 「宇治橋架橋位置変更と宇治街区の成立」(『平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報—京都府立宇治公園都市公園施設整備に伴う発掘調査—』 宇治市教育委員会) 1994

注8 これまで、平等院出土の軒瓦に関する報告によれば、各文様構成などに関する説明において、報告者毎に多少の表現の差異が認められる。ここでは、混乱をさけるため、近年、調査を継続実施している宇治市教育委員会の報告文に極力従うこととする。宇治市教育委員会 『平等院旧境内遺跡発

掘調査概報」(宇治市埋蔵文化財調査概報 第22集 宇治市教育委員会) 1993

注9 前掲注8文献によれば18-B d、19-B b、20-B f、21-B a、17-A aに対応。

注10 前掲注8文献によれば丸瓦Bに対応

注11 前掲注8文献

3. 国道1号京都南道路関係遺跡 発掘調査概要

はじめに

当調査研究センターでは、建設省と日本道路公団が進める国道1号京都南道路および第二京阪自動車道路建設に伴い、路線計画地内に存在する市田斉当坊遺跡・佐山遺跡・佐山尼垣外遺跡の発掘調査を実施してきている。このうち市田斉当坊遺跡と佐山尼垣外遺跡は、平成9年度に路線帯内で行った試掘調査によって、新たに確認されたものである^(注1)。平成10年度には市田斉当坊遺跡の発掘調査を開始し、調査の結果、弥生時代の大規模集落跡・古墳周濠・中世条里型地割りの検出等、多くの成果を得るに至った。

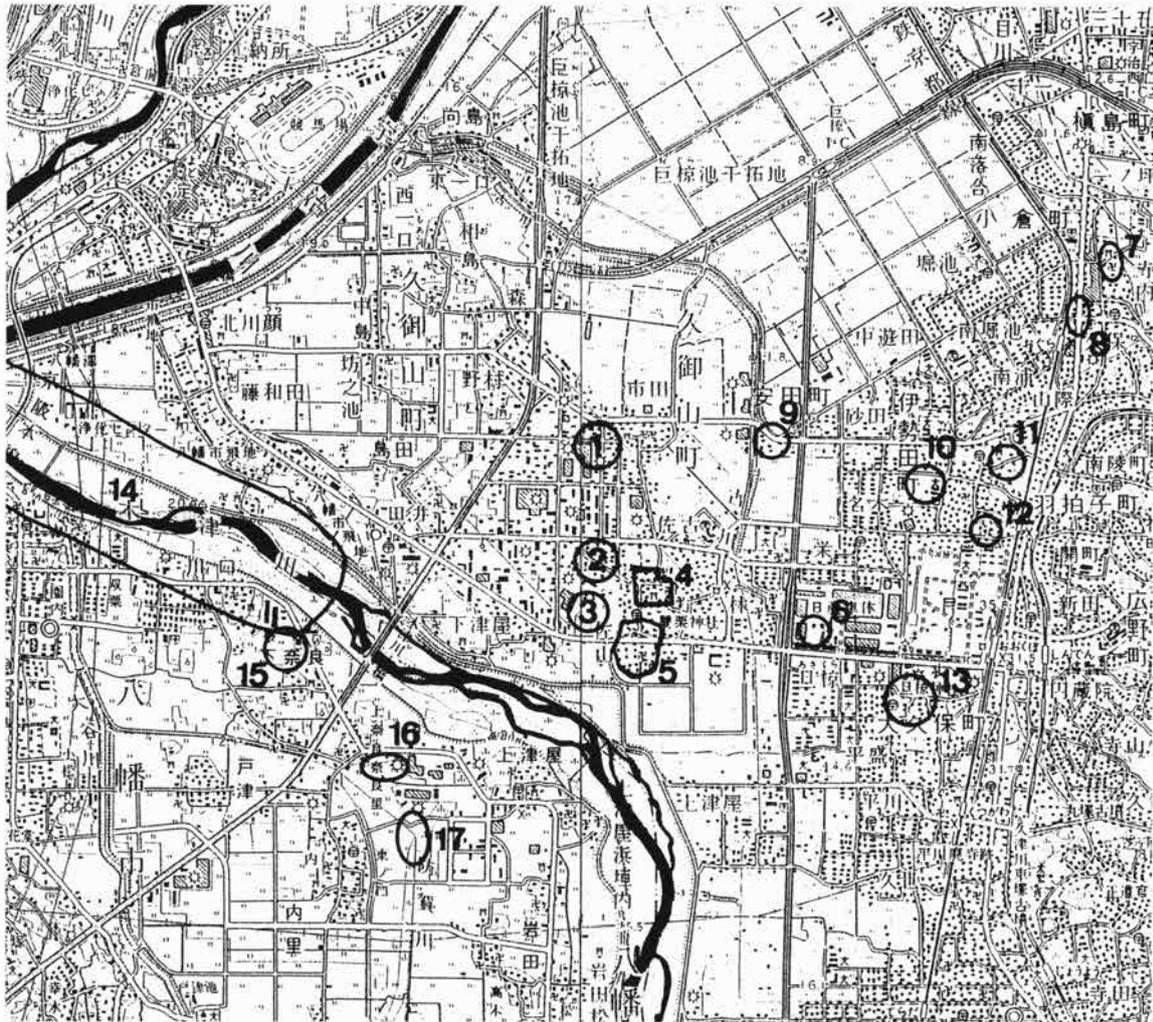
久御山町は、桂川・宇治川・木津川の三河川合流部の東側、木津川の右岸沖積地が町域となる。昭和初期まで、町域の北部には、干拓によって消滅したが、宇治川遊水池の機能を果たしていた巨椋池が存在していた。当地域は山城盆地中央部の最低所に位置し、旧巨椋池など地勢的な要因から、多くの遺跡が存在することはこれまであまり考えられていなかった。また、調査を実施した3遺跡周辺は、第2次大戦前の京都飛行場建設および、戦後の工業団地造成に伴う厚い盛土が広範囲に及んでおり、遺跡の存在が容易に判明しない地域であった。

周辺での遺跡分布状況にみる弥生時代～古墳時代集落として、隣接する宇治市域では巨椋池東遺跡・神楽田遺跡・井尻遺跡・若林遺跡等が存在する。また、八幡市域では木津川河床遺跡・下奈良遺跡・上奈良遺跡・内里八丁遺跡等が認められる。中世以降では、中世の防御的集落である環濠集落が随所に認められる。環濠集落は応仁の乱以降、住人が自衛のため共同体集落の周囲を環濠や土塁で囲み、動乱時の防御・軍事の拠点となった集落である。特に代表的な環濠集落としては、佐山・佐古・市田・安田・大久保等が挙げられる。

平成11年度は、継続調査の市田斉当坊遺跡C-2・D地区と、新たに佐山遺跡A-1地区・佐

第1表 国道1号京都南道路関係遺跡調査一覧表

| 遺跡名称 | 地区 | 面積 | 調査期間 | 調査担当者 |
|---------|-------|----------------------|----------------------|-------------------------------|
| 市田斉当坊遺跡 | C-2地区 | 約1,800m ² | 平成11年5月14日～10月14日 | 辻本和美 岩松 保 森島康雄 野々口陽子 |
| | D地区 | 約1,700m ² | 平成11年12月8日～平成12年3月3日 | |
| 佐山遺跡 | A-1地区 | 約3,500m ² | 平成11年9月8日～平成12年1月14日 | 辻本和美 竹原一彦 森島康雄 野々口陽子 |
| 佐山尼垣外遺跡 | A・B地区 | 約5,000m ² | 平成11年6月21日～平成12年3月3日 | 辻本和美 竹原一彦 中村周平 柴 暁彦 |



第30図 主要遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 市田齊当坊遺跡 | 2. 佐山遺跡 | 3. 佐山尼垣外遺跡 | 4. 佐古環濠集落 | 5. 佐山環濠集落 |
| 6. 林寺跡 | 7. 小椋神社東遺跡 | 8. 神楽田遺跡 | 9. 安田環濠集落 | 10. 井尻遺跡 |
| 11. 若林遺跡 | 12. 中山遺跡 | 13. 大久保環濠集落 | 14. 木津川河床遺跡 | 15. 下奈良遺跡 |
| 16. 上奈良遺跡 | 17. 内里八丁遺跡 | | | |

山尼垣外遺跡で発掘調査を実施した。調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。現地調査は、調査第2課第3係長辻本和美、同主任調査員竹原一彦・岩松保、同調査員森島康雄・中村周平・柴 暁彦・野々口陽子が分担し担当した。調査に係る費用は、全額、建設省近畿地方建設局が負担した。調査には、京都府教育庁指導部文化財保護課・久御山町教育委員会・久御山町国道対策室・地元自治会の協力を得た。また、現地調査および出土遺物整理には多くの方々のご協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。^(注3)

(竹原一彦)

(1)市田齊当坊遺跡

1. はじめに

市田齊当坊遺跡の発掘調査は、平成10年度から実施している。平成10年度の市田齊当坊遺跡の調査はA～C地区で行い、全域で、主として弥生時代中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓・溝が稠密に分布する状況を確認した。北端のA地区は調査面積が少なく詳細は不明であるが、竪穴式住居跡・方形周溝墓と考えられる焼土や溝を確認した。B地区の北半部では、竪穴式住居跡や土坑・溝などの遺構が稠密に分布していた。南半分は地震による噴砂や曲隆の影響で遺構の残りはよくなかったが、本来は北半部の様相と同じく稠密に遺構が分布していたと判断される状況であった。C地区では、竪穴式住居跡や方形周溝墓・溝を検出したが、北半には主として竪穴式住居跡、南半には方形周溝墓と大溝が分布している。この大溝は、ある時期の集落の縁辺をめぐる環濠と判断される。遺物は、多量の土器・石器・玉作り関連の遺物が出土した。特に、石剣が45点以上が出土したこと、また、玉作りを実際に跡づけうる資料が出土している点が特筆される。これらの様相から、市田齊当坊の弥生集落は、南山城地域最大級の集落跡と言えるものであった。^(註4)

弥生時代以外の時期の遺構では、B・C地区では条里型地割りにのる平安時代末頃の道路跡と小溝群を、C地区では古墳周濠と判断される溝を検出した。この古墳周濠は、久御山町内ではじめて確認された古墳となった。今年度は、C地区南半(C-2地区)とD地区の調査を実施し、主として、条里型地割りにのる平安時代末頃の道路跡と、弥生時代中期の方形周溝墓群や大溝、中期前葉に遡る井戸2基を検出した。井戸はともに木枠を有しており、木枠を有する井戸としては日本国内でも最古級のものと考えられる。

2. 調査経過

C-2地区は、昨年度調査を実施したC-1地区の南側および西辺に沿った部分で、平面形「L」字形を呈している。昨年度の調査結果より、条里型地割りにのる中世道路遺構、古墳周濠、弥生時代大溝・方形周溝墓等が検出されることが期待された。平成9年度の試掘調査では、C地区以南は遺構が分布していないと考えられた。しかし、C-2地区の調査では、方形周溝墓群が調査地の南側にも広がっていく様相を確認した。このため、京都府教育庁指導部文化財保護課・建設省・当調査研究センターが協議し、C地区の南を画する現道の南側をD地区として試掘調査を実施し、遺構の拡がりとその性格を確認することとなった。

試掘調査は、道路建設予定地の中央に幅10m・長さ60mのトレンチを南北に設定した。その結果、調査区のほぼ全域で中世と弥生時代の遺構を検出した。北半で検出した遺構は、その形状と遺物およびC-2地区の様相などから方形周溝墓の一部と判断され、市田齊当坊遺跡の墓域がD地区の北半にまで分布していることが判明した。それに対して、調査区の南端部で検出した溝状遺構は、トレンチ幅が狭いためその性格を確定できなかったが、本調査の結果、これらの溝も方

形周溝墓の一部であると判断された。以上の試掘結果を踏まえ、京都府教育庁指導部文化財保護課と建設省、当調査研究センターとが協議し、D地区の遺構が稠密に分布していると想定される範囲、北半部の約1,700m²の本調査を実施することとなった。調査次数は、C-2トレンチの調査を第2次調査、Dトレンチの調査を第3次調査として行った。

(岩松 保)

3. 調査概要

(1) C-2地区の調査

C地区では、昨年度の調査地の南側をC-2地区として調査した。この地区では大きく、平安～鎌倉時代と弥生～古墳時代の2時期の遺構を検出した。

a. 平安～鎌倉時代

平安～鎌倉時代の遺構には、南北および東西坪境道およびその側溝・井戸・小溝がある。

南北坪境道(図版第22-2) 昨年度に調査したC-1地区で検出されていた道の続きである。昨年度の調査では、地表面に残る水田の地割りよりもやや西方を南北に続くのを確認していたが、今回は調査地の途中で西方にさらに振れて、そのズレが大きくなっている。調査地南辺の東西坪境道の北側では現地表で観察される地割りより約8m西側にズレる。道幅は1.5～1.8mを測る。

東西坪境道(図版第22-3) 南北坪境道と直角に交わるもので、2対の道路側溝を検出した。

道幅は側溝心々で3.5～4mを測り、それぞれの溝の重複関係から、北から南に造り替えられていることが判明した。側溝から出土した瓦器椀から、側溝が使用されていた時期は、平安時代後期頃と判断される。昨年度のB地区の南辺部分でも、東西方向の坪境道が検出されており、今回検出の坪境道との距離は105～110mを測る。南北坪境道との交差点付近の側溝内から、馬骨が出土した。

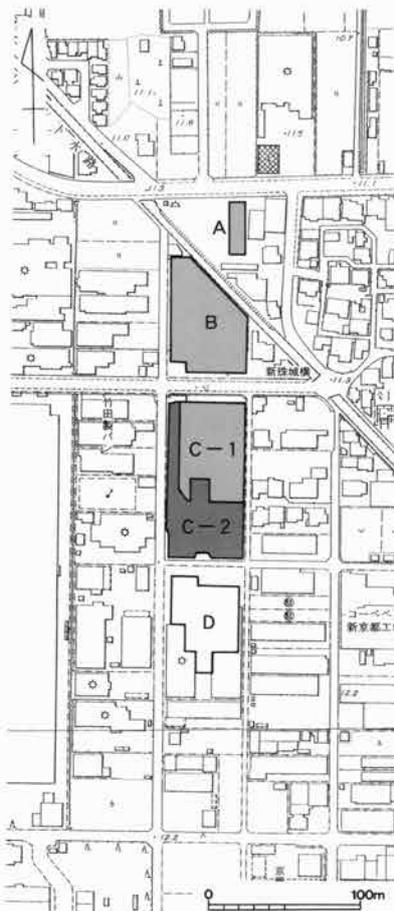
小溝群 調査区の西南部および東南部で検出した。それぞれの群で溝の方向がそろっており、田畑の区画と判断する溝とは規模を異にした耕作に伴う溝と考えられる。

b. 弥生～古墳時代

古墳時代の遺構には方墳・溝・井戸、弥生時代の遺構には竪穴式住居跡・土坑・井戸・方形周溝墓や環濠と判断される溝がある。以下、主要な遺構を概述したい。

① 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡は調査区全域に分布している。竪穴式住居跡SH479や570・572など、多くの竪穴式住居跡は調査地北西部に集中し、重複して検出されており、長期間にわたって1か

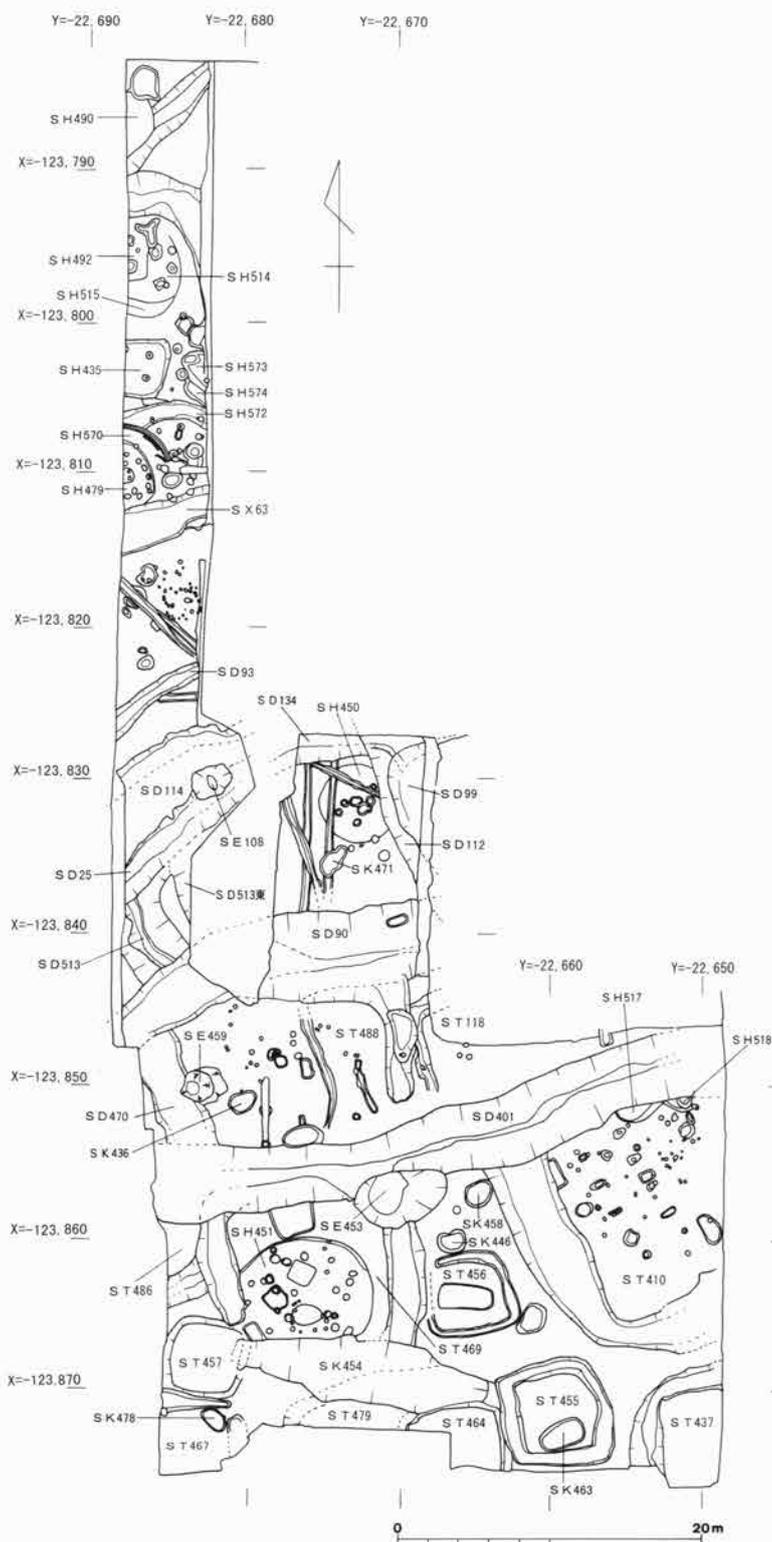


第31図 市田齊当坊遺跡調査区配置図 所に居住した様相を呈している。それに対して、調査地中央

部北端の竪穴式住居跡SH450と南辺付近の竪穴式住居跡SH451は、それぞれ単独で検出したもので、竪穴式住居跡の重複が認められない。SH451は方形周溝墓ST469と、竪穴式住居跡SH450は溝SD99(方形周溝墓の周溝と判断される)と重複しており、その重複関係から、竪穴式住居跡は方形周溝墓築造以前に造られている。竪穴式住居跡どうしの重複関係の有無に関わらず、これらの住居跡の埋土を洗浄すると量の多寡はあるが、石器や玉を作った際の剥片類が混じっている。多くの住居跡で、何らかの形で石器や玉の生産に関連する作業が行われていたと考えられる。

竪穴式住居跡SH479・570・572 調査区の北西部で検出した竪穴式住居跡群で、3基以上の住居跡が重複している。周囲にはさらに数基の住居跡が分布しており、これらとも調査区外重複関係を有している可能性がある。すべて平面形は円形である。これらの住居跡群の南側は、古墳周濠SX63の掘削によって削平を受けている。最も残りの良いもので、検出した深さは最大で約0.4mである。竪穴式住居跡SH572-SH570-SH479の順に新しくなる。竪穴式住居跡SH479の埋土から器台(第36図9)が出土し、弥生時代中期後葉と判断される。

竪穴式住居跡SH451(図版第24-1) 調査区南側



第32図 市田齊当坊遺跡C-2地区遺構平面図

中央部やや西で検出した円形の竪穴式住居跡である。方形周溝墓S T 469の西周溝、および土坑S K 454によって一部を削平される。長軸は、残存長約8.3m、短軸は残存長約6.6m・深さ約0.2mを測る。床面中央で、約1.9m×1.4m・深さ約0.4mの楕円形の土坑を検出した。支柱穴は、周壁に沿って配され、9基以上を確認した。床面からは、碧玉製の管玉未製品をはじめ、碧玉剥片、結晶片岩製石鋸、サヌカイト製石針、砂岩製筋砥石などの多数の玉作り関連遺物が出土し、また、床面の埋土を土納袋約800袋分に採取し、洗浄作業を行った結果、碧玉やサヌカイトの微細なチップ類や、200点以上のサヌカイト製磨製石針(折損した石針を含む)が出土していることから、主に碧玉製管玉作りを行った住居であることが判明した。住居の時期は、床面から出土した土器片から、おおよそ弥生時代中期前葉～中葉頃と推定される。

竪穴式住居跡S H 450 調査区中央部北側で確認した円形の竪穴式住居跡である。径約4.9m・深さ約0.2mを測る。床面中央で、楕円形の土坑を検出し、土坑長軸ライン上の両側で、それぞれ柱穴を確認した。床面では、他に4基以上の柱穴を検出した。出土遺物は、床面から若干の碧玉剥片を検出している。時期は、出土した土器片から弥生時代中期前葉頃と推定される。

②方形周溝墓

方形周溝墓には、方形周溝墓S T 469・486・488・410などの大形のものと、方形周溝墓S T 455～457など一辺5m程度の小形のものがある。これらの周溝墓の周溝内からは、弥生時代中期前葉の土器が出土している。

方形周溝墓S T 410(図版第23-1) 今回の調査で検出した方形周溝墓のうち、ほぼ全容のわかる大形の周溝墓で、溝幅4m・深さ1.1m、溝によって画された台状部は12m以上を測る。台状部には2m×1.1mをはじめとした土坑と、径20～30cm程度の柱穴状の土坑を検出している。これらの遺構が埋葬主体部であるのかどうかは確定できない。周溝の南西部コーナーは掘り残されてやや浅くなり、陸橋をなしている。

方形周溝墓S T 437(図版第23-3) 調査区の東南隅で検出した幅0.5～1m・深さ0.5m程度の溝で区画されている。その形状と検出状況から、方形周溝墓と判断される。コーナー部分は陸橋状を呈していない。西辺溝からは、弥生時代中期前葉の土器(第36図3)が出土している。

方形周溝墓S T 488 調査地のほぼ中央で検出した方形周溝墓で、北辺溝は溝S D 90と重なっており、溝S D 90が後出する。南辺溝は確認できておらず、溝S D 401の掘削のために消失したものであると思われる。西辺溝は溝S D 470がそれと判断される。台状部の東西幅は約12mである。東辺溝からは長頸壺(第36図2・図版第38a)が出土している。

③井戸

井戸には、弥生時代中期前葉のS E 453と古墳時代初頭のS E 108がある。奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に年輪年代法による伐採年代の測定をお願いしたところ、S E 453が424 B. C. を遡らない年代、井戸S E 108が132+ α A. D. の年代を得た。

井戸S E 453(第33・34図・図版第25) C-2地区南側中央部で検出した井戸である。北側は溝S D 401、南側は方形周溝墓S T 469の東辺溝によって上層の一部を削平されている。方形周溝

墓S T 469の東辺溝は北に向かって徐々に浅くなって終わっているため、第33図の土層図には現れていない。井戸は、平面が楕円形の大きなすり鉢状の掘形をなし、その最下部に井戸枠が構築される。検出面での規模は、長軸5.4m・短軸4.1mを測る。断面形は漏斗状をなし、井戸底までの深さは約2.4mを測る。掘形の西寄りの位置で、検出面から約1.4m掘り下げたところで、方形に組まれた井戸枠材を検出した。井戸枠は、縦板をほぼ正方形に立て並べたもので、一辺約0.8mを測る。井戸枠の掘形は、一辺約1.7mを測る。縦板を縦に並べて内側から横材材で固定した、いわゆる縦板組横材^(注5)留めの構造であるが、縦板材の外側にも横材材が組まれている。縦板材には、長さ約0.7~0.8mの板状の材のほか、断面方形や三角形の杭状の材が用いられる。これらの材の多くは上端部が腐食しているが、一部に材の小口を残していると推定され、本来の長さも現存長と大きく相違はないものとみられる。また、井戸枠内側下部の横材材には、鑿状の工具痕を残す厚さ約4cmの板材が用いられ、杓結合によって組み合わせ固定している。板材の樹種は現在分析中であるが、井戸枠の外側に組まれた横材材には、主に杉などの針葉樹が用いられている。内側に組み合わせられた横材材および縦板材の一部には、広葉樹が用いられているようである。

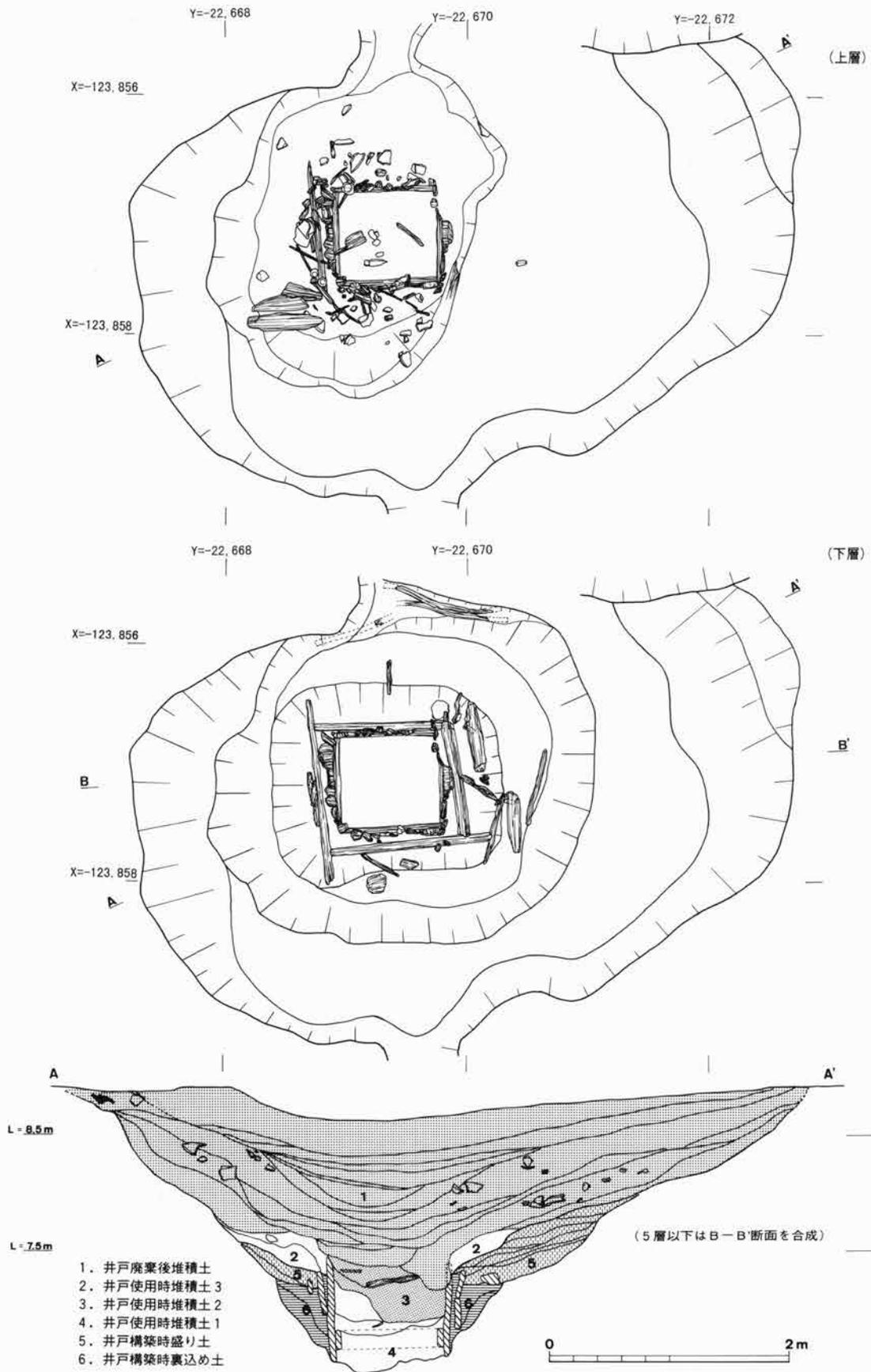
井戸断面の土層観察では、井戸枠材の上端部外周に水成堆積と判断されるシルト層を確認しており、これが井戸使用時の堆積層とみられることから、井戸枠材よりも上部は、使用時にも大きくすり鉢状に開いていたことは明らかである。井戸枠の東側には、堅く締まった盛土でテラスが造り出されている。井戸枠が井戸掘形の西寄りに位置し、東側に大きく空間を設けてこの部分にのみ盛土を行っていることから、水を汲み上げる際にはテラスまで人が降り、井戸枠の東側から汲むように構築されたと推定される。テラス部分の盛土の最下層には板材が埋め込まれていた。水汲み場の足場を堅固にしたものであろう。

井戸枠内のシルト土層を取り除いたところ、地下水が湧き出し、現在の平常水位で井戸枠の1/2ほどの高さまで滞水した。出土遺物は、井戸枠内上層および井戸枠上端部周辺から、弥生土器片や玉作り関連遺物である若干の碧玉材・筋砥石1点が出土した。また、井戸枠内上層の腐植土層から、炭化米や桃核、ウリ科植物の種子等の植物遺体を採取しており、現在分析中である。井戸の廃絶時期は、井戸枠内上層から出土した土器より、弥生時代中期前葉と推定される。

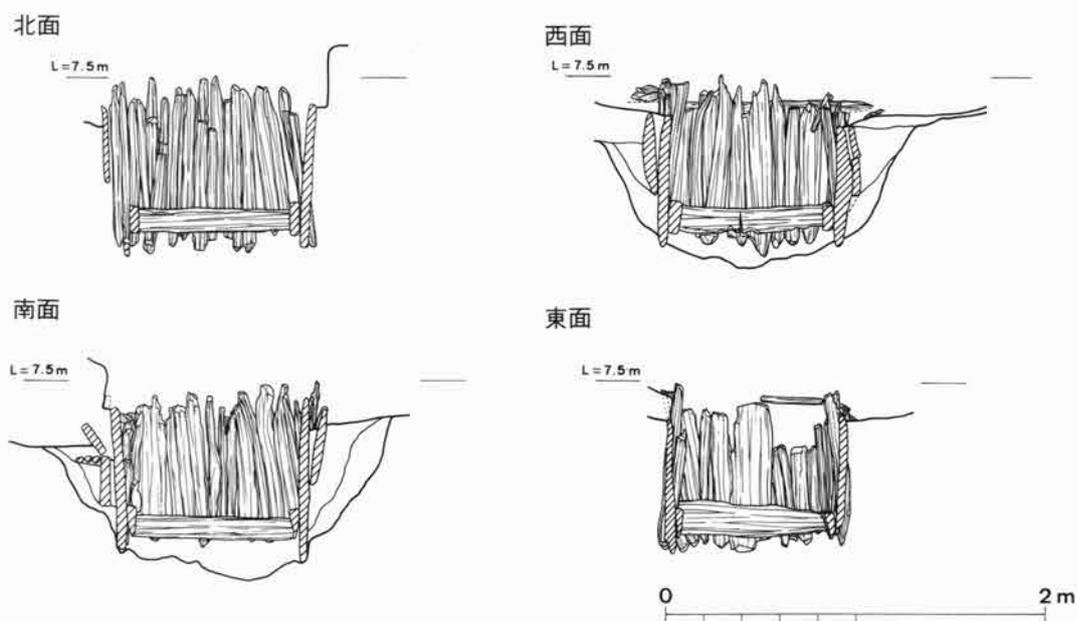
井戸S E 108(図版第24-3) 古墳時代初頭の井戸で、溝S D 025(下層)や溝S D 114の埋土の上から構築されている。井戸の掘形は2段に掘られ、上段は現存が一辺3.4m、下段が2.2×2.6mの方形で、井戸枠は検出面から1.8m下に構築している。この井戸枠は、径1.3~1.4mの丸太を削り抜き、それを縦に4分割したうちの2個を縦に据えて、その側面と側面とを合わせて縦に組んでいる。類例として、寝屋川市讚良郡条里遺跡^(注6)で類例があり、同様の構造をした井戸が見つかっている。同例では、杓穴などがあることから丸木舟を転用したものと推定されている。市田齊当坊遺跡の北には旧巨椋池が広がり、本例も板材断面が船底状を呈することから、こうした例と同様に丸木舟を転用した可能性がある。

④溝

溝には、古墳周濠と環濠、方形周溝墓の溝がある。古墳周濠は溝S D 67、環濠と判断される溝



第33図 井戸 S E 453実測図



第34図 井戸 S E 453 立面図

には、溝 S D 401・25・114・90がある。これらの溝は、この溝群より北で竪穴式住居跡が分布し、南側では方形周溝墓が主として分布していることや、その規模から見て、集落の周囲をめぐる環濠と判断されるが、現在までのところ集落の北側で環濠状の溝は確認できていない。方形周溝墓の周溝と判断される溝には、溝 S D 470・513・99・112・134等がある。

古墳周濠 S D 67 昨年度に検出していた古墳の周濠の続きで、調査区の北西部で検出した。今回は、周濠の北東コーナーと北辺の一部を新たに確認し、この古墳は一辺38～40mの方墳であることが判明した。南辺の周濠内から、埴輪片が底から浮いた状態で出土した。この古墳に伴う墳丘や主体部は全く残っていなかった。

溝 S D 401(図版第24-2) 幅4～5m・深さ1.25mで、総長約40mを検出した。断面は傾斜がややゆるい「V」字形を呈しており、底面は幅約30cm・深さ約10cmの箱形をなしている。土層は大きく7層に分かれるが、遺物はわずかに整理用コンテナ・バットに1～2箱程度が出土しただけである。時期は弥生時代中期後葉である。この溝は、方形周溝墓 S T 410・469・486の北辺溝と S T 489・118等の南辺溝の位置にあり、それらの方形周溝墓に後出するものである。その掘削位置はそれらの周溝を一続きに再掘削したものであり、この状況は溝 S D 90や114でも認められる。周溝墓の溝は、おそらく長期間にわたって地表からそれと認めうるような窪んだ状況にあり、これらの溝は周溝の痕跡をつないで大溝が掘削されたのであろう。

溝 S D 134 調査地中央部北辺で検出した溝で、その大半は昨年度の調査区内にある。溝 S D 112・99(周溝)に後出するものである。周溝墓の周溝と判断する。

溝 S D 513 周溝墓の周溝と判断される溝で、南側は溝 S D 90、北側は溝 S D 25・114によって消失している。総長わずか6mの検出長であるが、北側で東に振れて、平面「L」字形を呈している。市田齊当坊遺跡の墓域は、東西方向に掘削された大溝と大溝の間に、それらに直交する方

向でそれ以前の周溝墓が検出されるというパターンが認められるため、この溝も周溝墓の一部と判断される。検出した深さは最大で約70cmである。有段口縁を有する大形の壺(第36図5)が出土しており、弥生時代中期中葉のものと判断される。

⑤土坑・土壙

土坑・土壙には埋葬施設と判断されるものと、それ以外のものがある。埋葬施設には、方形周溝墓の方台部にあり、周溝墓の主体部と判断される土壙S K 463・478・436、方形周溝墓の方台部外で検出した土壙S K 458・446などがある。これらの土壙は、いわゆる舟底形を呈している。埋葬施設以外の土坑にはS K 454などがある。

土壙 S K 463 方形周溝墓 S T 455の台状部の南寄りに位置しており、方形周溝墓の主体部と判断される土壙で、3.0m×1.4m・深さ0.25mである。内部には2.3m×0.9m・深さ最大0.1m程度の土壙があり、木棺を納めたものと判断される。方形周溝墓 S T 455南辺溝と一部重複しており、この土壙が後出する。

土壙 S K 478 方形周溝墓 S T 467の台状部内に位置しており、東北コーナーを掘り残した陸橋に直交し、主体部の一つと判断できる。規模は1.6m×1.1m・深さ0.5mである。

土坑 S K 454 調査区の南辺付近で検出した土坑で、長さ16m・幅が最大で5mの溝状を呈している。土坑底は舟底状を呈しており、中央部が最も深く、最大で0.9mである。方形周溝墓 S T 464・S T 479の北辺溝と方形周溝墓 S T 469の南辺溝を“再掘削”した位置にあたる。方形周溝墓 S T 457の東辺溝を破壊する。

土坑 S P 478 竪穴式住居跡 S H 570の埋土上面で検出した柱穴状の土坑である。規模は0.7m×0.95m・深さ0.15m程度である。内部から土器細片(第36図7・8・10)が出土している。

⑥地震跡

昨年度の調査でも確認していたが、地震による曲隆や噴砂がC-2地区の北西部で認められた。地震による影響は、特に、B地区とC地区の間で顕著であり、C地区の中央部以南ではほとんどその影響は認められない。噴砂は、地震の際に水分を含んだ地下の砂層が液状化し、地表面に吹き出たものであり、液状化した砂層が上位の層を引き破れずに、盛り上がった状態になって留まるのが曲隆である。市田齊当坊遺跡では、曲隆のために地層が盛り上がったために遺構が広範囲に消失したり、小規模な曲隆のために竪穴式住居跡の床面が歪んでいたりと、液状化のためにベースの砂層と遺構の埋土の境界が乱れているものもある。古墳時代の遺構は曲隆や液状化の影響を受けているのに対し、平安時代末頃の道路側溝はその影響を受けていない。このことから、地震の起こった年代は、古墳時代～平安時代末に求められる。この時期の地震には、文治元(1185)年の地震がある。この地震では、岡崎の法勝寺九重塔が大破し、宇治橋が落ちたという被害が記録されている。ただ、文禄5(1596)年の地震は京阪神に多大な被害を及ぼし、近くでは伏見城が大破している。このため、市田齊当坊遺跡周辺でも全く影響を受けていないとは考えにくく、現時点では、文治の地震と文禄の地震の両方の影響を受けていると考えたい。

(岩松 保・森島康雄・野々口陽子)

(2) D地区の調査

調査は、地表下約3.5mまでを重機で掘削し、遺構直上から人力掘削に切り替えた。遺構を調査したのは、黄褐色砂上面で、海拔8.7～8.8mである。調査区東壁で観察すると、調査面より上位約0.35mから溝SD18が掘り込まれているのに対して、調査区西壁では調査面直上まで、中世の土器片を包含する土層で覆われていた。溝SD18の調査面からの深さは、調査区東壁では約0.75m、西壁では約1.1mであるので、この溝がほぼ同じ深度で掘削されていたとするならば、当時の地形は東が西に比べて約30cm程度高い、緩傾斜面をなしていたこととなる。

検出した遺構には、大きく、中世段階のものと、弥生時代中期の2時期のものがあり、わずかながら、古墳時代初頭の土器を包含する遺構を確認した。

a. 平安～鎌倉時代

平安～鎌倉時代の遺構としては、条里型地割りにのる道路状遺構と耕作に伴う小溝群、土坑を検出した。B・C地区では、南北方向の坪境道を検出しているが、その南側延長部分で坪境道の残欠と判断される南北溝を検出した。さらに、調査区の北端部で東西方向の2対の溝(溝間約6.8m)を検出した。これは条里型地割り(106～109mの方形区画)の内部を区画する道路と判断される。小溝群は北で東に約5～6°振れている。

b. 弥生～古墳時代

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓14基以上、埋葬主体10基を中心に、竪穴式住居跡4基・環濠・井戸を検出した。時期は弥生時代中期前葉～後葉のものが中心である。方形周溝墓は、時期の確認できたものは弥生時代中期前葉のものであるが、一部、弥生時代終末から古墳時代初頭と判断される土器が周溝内上位から出土している。竪穴式住居跡から出土した土器は、方形周溝墓から出土した土器とほぼ同じ時期のものであるが、重複関係にあるものは、すべて、竪穴式住居跡が方形周溝墓に先行するものである。

①竪穴式住居跡

竪穴式住居跡は4基を検出したが、その分布は調査地の北半に偏っている。これらの住居跡は、すべて、方形周溝墓・土坑等に先行し、時期的には弥生時代中期前葉～中葉の範疇に収まる。

竪穴式住居跡SH39 方形周溝墓ST44・42、溝SD37と重複し、それらの遺構に先行する。北半の2分の1が残存しており、復原径は約5m、検出した深さは約15mである。中央やや西寄りに中央土坑を設けている。

竪穴式住居跡SH23 調査区の北西部で検出した円形竪穴式住居跡で、ほぼ全形を確認した。平面形は3m×2.5mの隅丸形状の楕円形で、検出した深さは約0.1mである。床面中央に、0.35m×0.55m・深さ約0.25mの楕円形を呈した中央土坑がある。その周囲には、直径1m程度で弧状にめぐる溝(幅6～9cm)を検出したが、その性格は不明である。埋土中には多くの土器片とともに、碧玉原石・筋砥石などが出土したことから埋土をすべて洗浄した。1mmメッシュの網でこしたところ、玉作り関連遺物と共に、多数のサヌカイト製石針・同未製品・剥片が出土した。

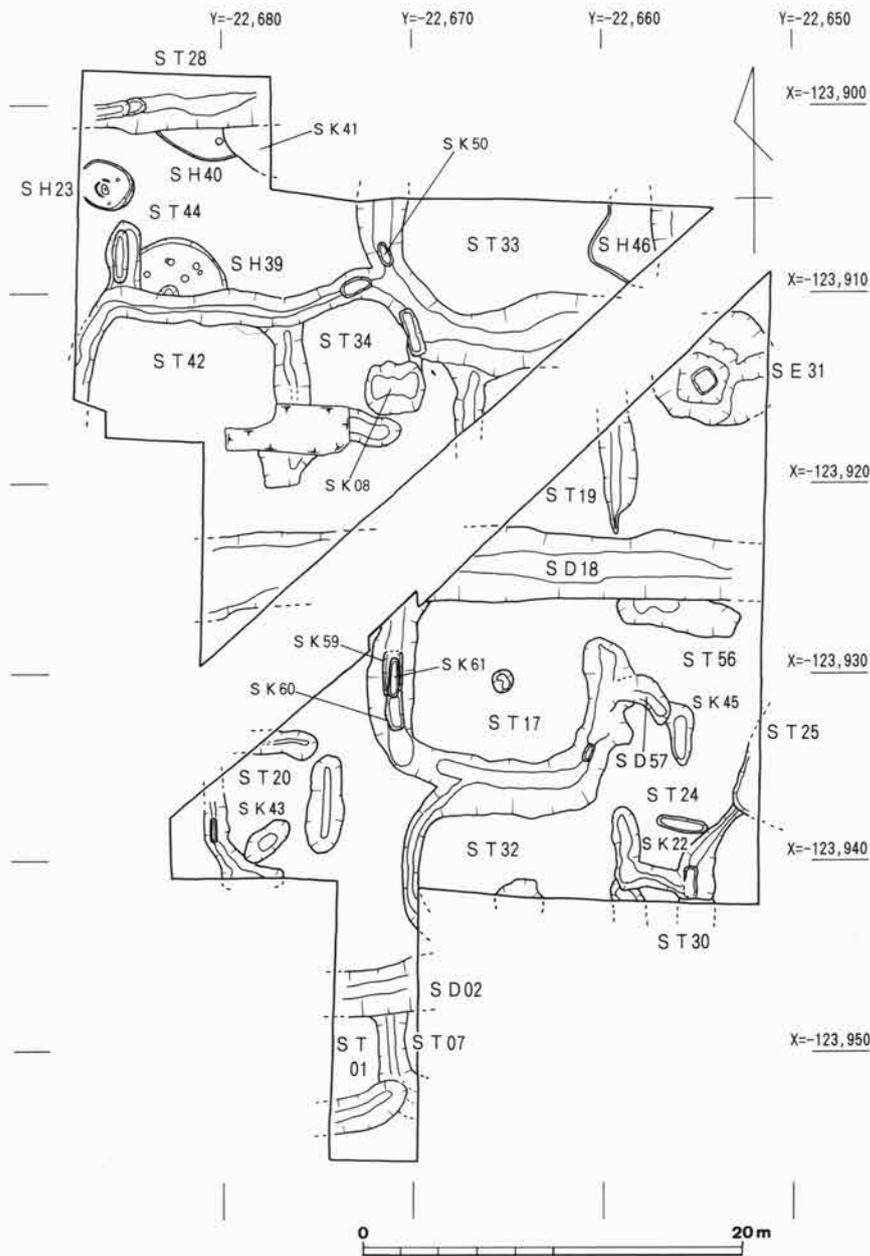
②方形周溝墓

方形周溝墓は、14基を確認している。いずれも弥生時代中期の方形周溝墓である。市田齊当坊遺跡の墓域では、隣り合う周溝墓と周溝墓の間も周溝墓として利用している例があり、調査地内では空閑地にしか見えないが、調査地外に周溝があり周溝墓である場合が想定され、数例増える可能性がある。

方形周溝墓 S T 33 東西約13mを測る周溝墓で、S T 34の東北部と重複しており、方形周溝墓 S T 34に後出するものである。南辺溝は、南側の方形周溝墓 S T 19と共有しているが、断面の観察では先後関係は確認できなかった。先行する周溝墓の一边を利用して新たな周溝墓を構築した際に、先行する周溝墓の溝も“再掘削”し、周溝として利用するために、土層断面では先後関係が

確認できないのであろう。東辺溝は、竪穴式住居跡 S H 46を一部壊している。西辺溝の底面で、溝中埋葬と判断される土層 S K 50を検出した。

方形周溝墓 S T 01 試掘トレンチの南端で検出した東西溝である。この溝は幅1.9mで、検出長4.5m、端部は丸くなって、底が急激に立ち上がって終わる。当初、土色と土質のわずかな違いを認めて遺構と判断したが、遺物はほとんど出土せず、周溝墓であるかどうかについては試掘段階で確証が得られなかった。しかし、D



第35図 D地区遺構配置図

地区全域で方形周溝墓が検出されたことから、方形周溝墓S T07とともに方形周溝墓であると判断した。東側の方形周溝墓S T07と重複関係を有し、方形周溝墓S T01が後出する。

方形周溝墓S T19 方形周溝墓S T33と重複関係を有するが、土層観察では先後関係は判らなかった。方形周溝墓S T33の南辺溝と同時に開いており、同時に埋没している。南辺溝は、溝S D18の位置に当たる。東辺溝は南に向けて、徐々に浅くなる。東辺溝内から、弥生時代中期前葉～中葉の壺を検出している。台状部の規模は約9.0m×8.5m以上である。

③井戸

井戸S E31(図版第27) 一辺6mの方形で、深さ約1mのすり鉢状を呈した土坑の底面に、一辺2.5m・深さ1.2mの方形の土坑を穿ち、土坑の内側に縦板を並べて井戸枠を作っている。井戸枠は、一辺約0.9mで、最も残りのよい縦板は、高さ約0.55mである。明瞭には残っていないが、縦板の内側には横棧を組み、井戸枠の崩壊を押さえたと推定される。出土遺物から弥生時代中期前葉～中葉にかけてのもので、C-2地区に次いで本遺跡2例目の弥生時代の井戸である。

④溝

検出した溝には、方形周溝墓の一部と判断されるもの(溝S D57)と、環濠と判断される溝(S D18)、方形周溝墓の溝を再掘削したと判断されるもの(溝S D37・02)がある。

溝S D57 方形周溝墓S T17の東辺溝から東側に「し」字形に検出した溝で、その西・南端の様相は確認できない。一部分だけ重複関係を確認でき、S T17の東辺溝が埋まった段階で掘削されていた。方形周溝墓S T56の主体部と判断する土壙S K45の西北部を一部破壊している。弥生時代終末の手焙形土器(第37図3)がこの溝と方形周溝墓S T17東溝との合流部付近で出土した。

溝S D18(図版第26-2・3) 調査区のはほぼ中央で、東西方向に検出した溝で、幅が最大で4m、確認できる深さは最大で1.1m、断面「V」字形の大溝である。総長約29mにわたって確認した。一応、環濠と判断しておく。市田斉当坊遺跡で検出している大溝はすべて、方形周溝墓の周溝を“再掘削”し、つなげて“一本の大溝に仕立てて”いるようで、溝S D18も方形周溝墓群に後出し、方形周溝墓S T17北辺溝や方形周溝墓S T19南辺溝を再掘削している。埋土中からの土器の出土は少なく、時期の決め手になる土器は皆無であるが、C地区の様相から推測すると弥生時代中期後葉のものだと判断される。

溝S D37 方形周溝墓S T42・34の北辺溝と方形周溝墓S T44・42の西辺溝が埋まった段階に、再掘削した溝で、平面的には「T」字形に検出した。東端はS T34の北辺溝の中央付近で終わるが、厳密には確認できない。何か所かの断面観察により、2回にわたって掘削されていることが判明した。

⑤土坑・土壙

土坑・土壙には、方形周溝墓の台状部にあつて方形周溝墓の主体部と判断されるもの、方形周溝墓の周溝内で検出した溝中埋葬と判断されるものなどがある。主体部と判断されるものには、土壙S K45・22・43がある。溝中埋葬と判断される土壙は、周溝の底面で検出したものが大半である。ただ、方形周溝墓S T17の西溝中央部では、土層断面図の観察により、溝の中層で3基の埋

葬土壌を確認し、一部を平面的にも検出した。その他、土坑S K41・08はその性格が不明である。

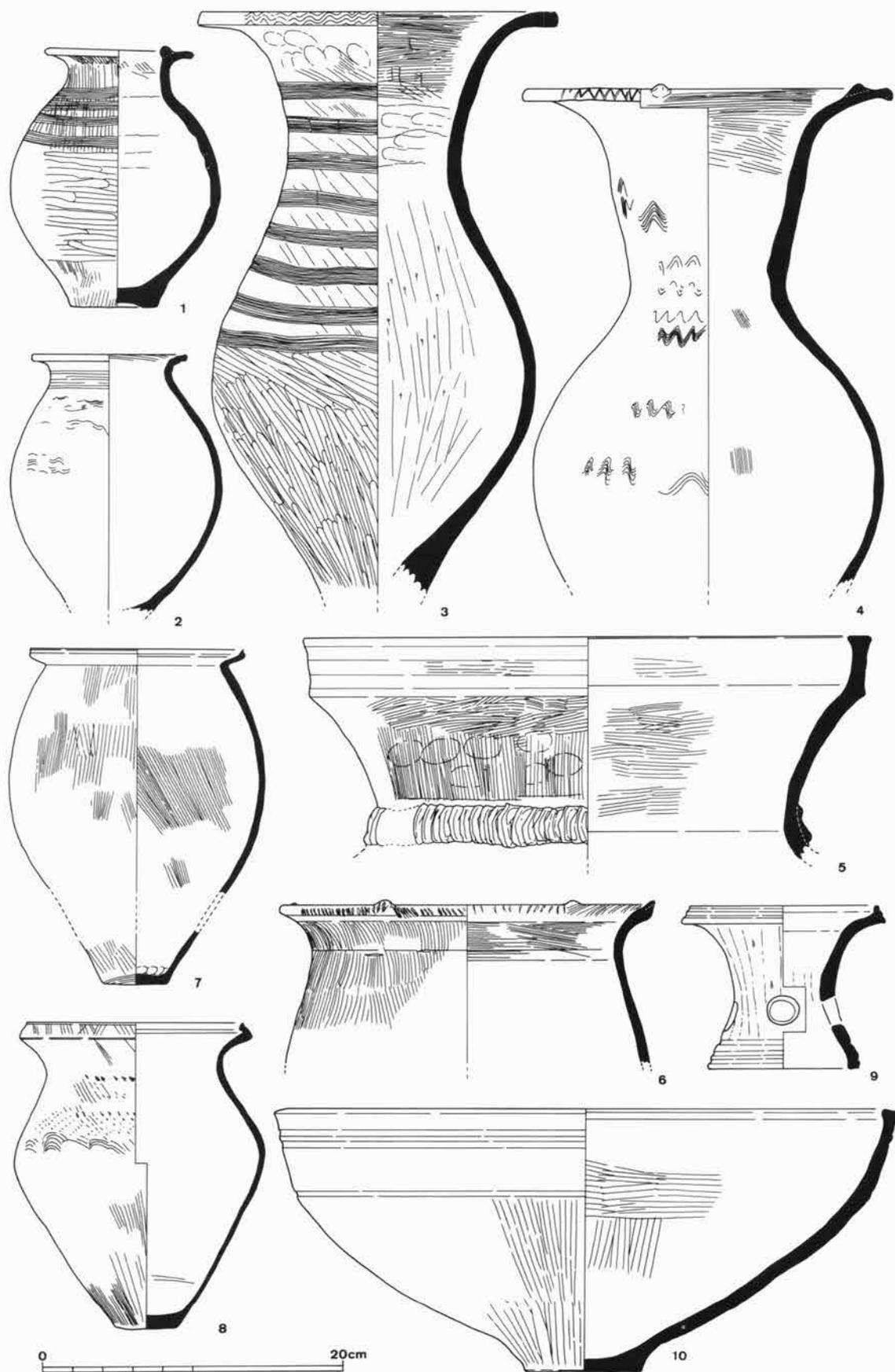
(岩松 保)

3. 出土遺物

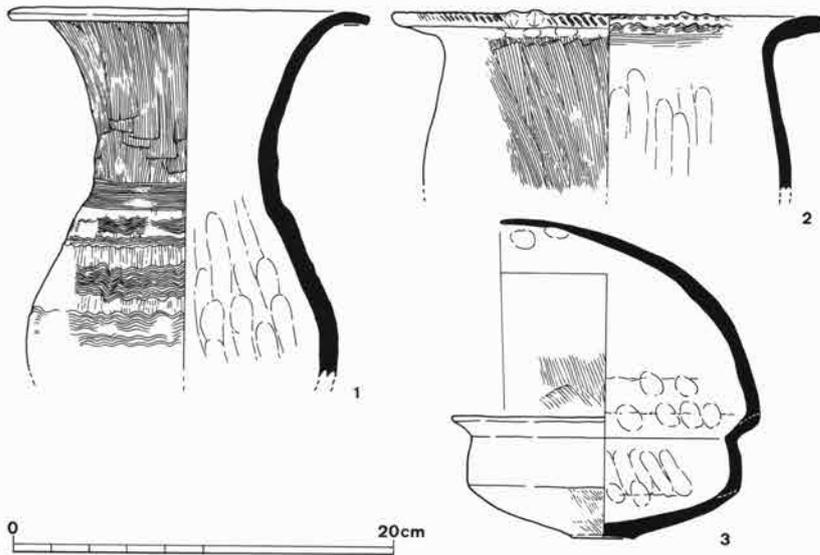
遺物は、弥生時代中期を中心とする土器が大半で、その他、石包丁・石斧・石鎌などの石器がある。玉作り関連遺物は、住居跡内埋土を洗浄した際に出土した碧玉・サヌカイトの石核や微細な剥片、各種未製品がある。

第36図1・2(図版第38)は小形の広口壺で、卵形の体部に短く直立する頸部を有し、口縁部は短く外反する。口縁部端はともに単純に終わり、端部の肥厚や上下への拡張は認められない。頸部に櫛描直線文が施文されている。1は溝S D134から出土した。頸部から体部にかけて4帯の櫛描直線文を施文する。口縁部内面には2個一対の瘤状の突起が口縁対角線上に2対ある。口径10.0cm・器高17.5cm。ほぼ完形。2は方形周溝墓S T488東辺溝から出土した。底部を欠くもののほぼ完存している。口径(復原)10.1cm・器高17.2cm(現存)である。ともに弥生時代中期前葉に収まるものと判断する。3は方形周溝墓S T437西辺溝から出土した広口長頸壺で、底部は打ち欠かれているがほぼ完存するものである。口縁部端面はわずかに肥厚気味であるが、上下の拡張はなされていない。口縁部端には波状文が施されており、頸部～体部上半には8帯の櫛描直線文が飾られ、頸部と体部との境界が不明瞭である。口径23.4cm、器高は現存で39.2cmである。弥生時代中期前葉。4は細頸長頸壺で、溝S D513東から出土した。現状では内面に瘤状の突起が2個あり、口縁を図上で復原し割り付けると、3個の突起があったものと復原できる。頸部と体部の境界は比較的明瞭である。外面は磨滅のため一部しか判明しないが、頸部～体部上半にかけて波状文が施されている。口縁部端は斜め下方に拡張されて、鋸歯文が施されている。復原で口径は24.0cmである。弥生時代中期前葉。5は有段口縁の壺で、溝S D513から出土した。口縁外面に強い横ナデを施し、曲折部の段は明瞭に作られている。口縁部は直立して立ち上がり、口縁部端面は内側に拡張している。口径37.8cm。中期中葉。6は井戸S E453から出土した近江型甕で、口縁端部に面を有して刻み目を施し、内面には簾状文状の列点文を施している。1/2程度残存している口縁部に、2か所のつまみ上げが見られ、全周では4か所の突起があったものと推定する。口径は復原で24.6cmである。7・8・10はS P478から出土している。7の甕は、上方へつまみ上げてヨコナデを施したはね上げ口縁を有する。復原口径14.2cm・復原高22.4cm。8は近江型の甕で、全体に磨滅が著しいため、施文は部分的にしか観察できない。内湾する受け口状の口縁部外面には斜格子文が施され、頸部から体部にかけては数帯の列点文と波状文が施されている。復原口径14.4cm・器高20.7cm。10は大形の鉢で、口縁部近くと体部下半には凹線文が施されている。弥生時代中期中葉。9は竪穴式住居跡S H479から出土した器台で、口縁端面は上方に拡張されて、凹線文が施されている。完形で、口径12.5cm・器高10.9cm。

第37図1は細頸長頸壺で、方形周溝墓S T20の東溝内から出土した。口縁部は端面が単純に終わり、ゆるやかに外反する。頸部と体部の境界には、櫛描直線文が施され、体部には波状文が施



第36図 出土土器実測図(1)(C-2地区)



第37図 出土土器実測図(2)(D地区)

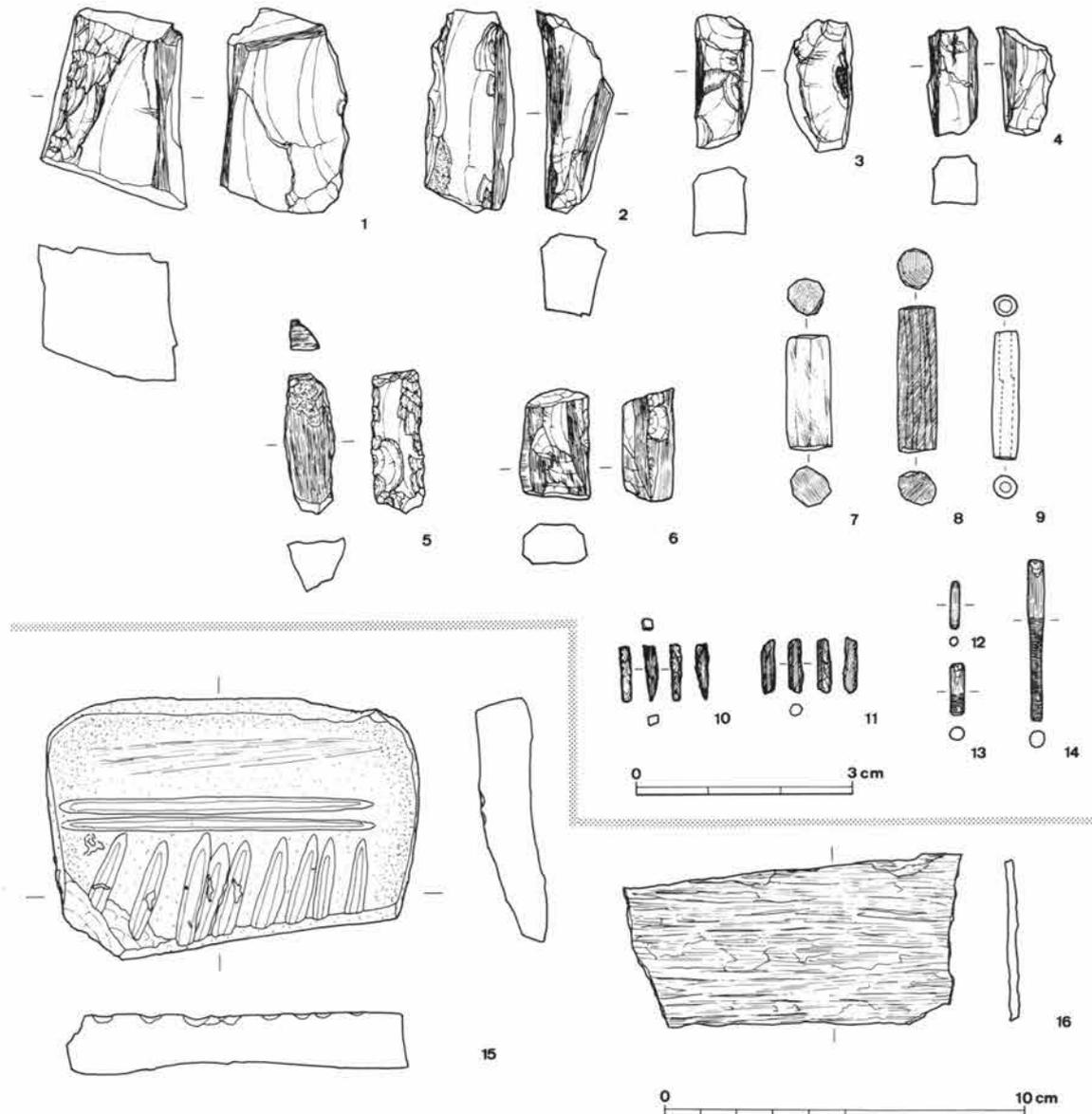
されている。復原口径19.0cm。弥生時代中期前葉。2は竪穴式住居跡SH23埋土内から出土した、いわゆる大和形甕である。口縁部端外面には刻み目を有し、2個一対のヘラ状工具による押圧がある。体部外面はタテハケで調整され、口縁部内面には波状文と横

方向のハケメが施される。口径(復原)23.0cm。弥生時代中期前葉と判断する。3は溝SD57と方形周溝墓ST17東溝合流付近の最上層で出土した手焙形土器である。器高は16.8cm、鉢部の口径は16.2cmである。

図版第38aはC-2地区方形周溝墓ST488の東辺溝内から出土した細頸長頸壺で、口頸部を欠くが、体部はほぼ完存している。頸部との境界付近には櫛描直線文、体部上半には波状文を施し、第37図1に近似する。bは壺体部で、竪穴式住居跡SH572から出土した。全面にヨコナデをていねいに施している。最大腹径30.5cmである。

(岩松 保)

第38図1~16は、C-2地区竪穴式住居跡SH451から出土した玉作り関連遺物である。1は、碧玉の石核である。施溝痕が直交して認められ、一部に調整剥離が施される。長さ26.85mm・厚さ17.55mmを測る。2・4は、碧玉製の角柱体である。いずれも、2条の施溝痕が、並行に施される。2は長さ29.25mm・厚さ9.95mm、4は長さ14.95mm・厚さ7.35mmを測る。5は、碧玉製の角柱体で、部分的に調整剥離が施される。一部に原礫面を残すが、研磨により、平坦に仕上げられる。また、小口の一方にも、研磨痕が認められる。長さ19.3mm・厚さ7.1mm。6は碧玉製のやや扁平な角柱体である。各面に研磨が施され、一部に調整剥離が認められる。7・8は、いずれも碧玉製の多角柱体であり、各面にていねいな研磨痕が認められる。7は長さ16.2mm・厚さ6.35mm。8は長さ20.5mm・厚さ5.5mm。9は、碧玉製管玉である。両面穿孔により、穿孔されている。長さ18.3mm・厚さ3.65mm、孔径は、約1.2~1.95mmを測る。10・11は、サヌカイト製石針の未製品と推定される。10は断面が方形、11は断面が六角形をなす。いずれも長側面に研磨痕が認められ、一部に調整剥離が認められる。10は長さ15.85mm・厚さ3.25mm、11は長さ14.9mm・厚さ3.65mmを測る。12~14は、サヌカイト製磨製石針である。12は長さ6.6mm・厚さ1.35mm、13は長さ7.1mm・



第38図 C-2地区竪穴式住居跡SH451玉作り関連遺物

厚さ2.2mmを測る。12は両端に、13は下端に使用痕とみられる回転研磨痕が認められる。14は、出土した石針のなかでも最も長く、長さ22.35mm・厚さ2.2mmを測る。両端面が使用されており、特に下端の使用痕は著しい回転痕が長さ約14.45mmにわたって認められる。ともに横方向の回転研磨痕が認められる。15は、緑泥岩製の筋砥石である。表・裏ともに砥石として使用されているが、表側には13条からなる断面「U」字形の溝状の研磨痕があり、玉砥石として使用されたことが明らかである。長さ10.4mm・幅6.8mm・厚さ1.5mmを測る。16は、結晶片岩製石鋸で、長さ9.5mm・幅4.3mm・厚さ0.33mmを測る。

(野々口陽子)

4. ま と め

市田齊当坊遺跡の調査は、今年度で2年目であり、都合3次にわたる調査を実施した。今年度

は、昨年度の調査をも上回る成果を得た。

まず注目されるのは、弥生時代の木枠を有する井戸である。井戸 S E 453 と井戸 S E 31 があり、これらは、木組みの井戸としては国内でも最古級の井戸であり、完成された構造をもつものとして注目される。木組み井戸の最古の例としては、弥生時代中期初頭～前葉の佐賀市鍋島本村遺跡の例が知られるが、これは、縦板を横棧となる丸太材で固定した簡素な構造をもつものである^(注7)。今回の調査で特に残りの良かった井戸 S E 453 は、加工した板材を密に並べている点や、井戸枠外側に板材を組み合わせ、内側には縦板の崩壊を防ぐため、杓結合による横棧を設けている点、汲み場としての足場を堅固に構築している点など、技術的にさらに進んだものといえる。こうした構造的に完成された井戸は、同時期の国内には類例がないものの^(注8)、紀元前 5 世紀後半～4 世紀前半頃とされる大韓民国忠清南道論山市麻田里の遺跡で、同様の形態をもつ井戸が調査されている^(注9)。市田齊当坊遺跡の井戸は、その起源を朝鮮半島にたどれる可能性が高く、弥生文化の系譜を考えるうえで重要な知見となろう。

また、市田齊当坊遺跡は玉作りを行っていた集落として昨年度の調査以降、注目されてきたが、今回、C-2 地区 堅穴式住居跡 S H 451 でまとまった資料を得ることができた。堅穴式住居跡 S H 451 の出土資料は、現在、選別作業等を進めている段階であるが、素材石核となる碧玉材は少なく、豊富に原材料を得ていた状況ではないようである。また、管玉の製作は、角柱体の作出に関して施溝分割が多用されており、広義のいわゆる大中の湖技法^(注10)に属するとみられるが、調整剥離も形割および研磨工程の個体の多くに認められ、技法上の検討課題を残している。注目されるのは、多量のサヌカイト製石針や、その未製品が出土したことであり、管玉の製作と同時に、石針の製作が行われていたと推定される。石針の未製品や石核となるサヌカイトの剥片類には、施溝痕が認められず、これらの製作技法は施溝分割を多用する管玉製作技法とは別系統のものであり、今後、技法的な検討を行っていきたい。今回の調査では、集落の周囲をめぐる弥生時代中期後葉の環濠が、さらに南側に 2 条掘削されていることを確認できた。これら 4 ないし 5 条の溝が環濠であるのか、そして同時に環濠として機能していたのかどうかは、今後の検討課題である。問題点としては、集落の北をめぐる溝が未確認であること、溝は直線的に掘られていて集落をめぐるような湾曲を示さないこと、これらの溝は周溝墓の溝をつなぐように掘削されていることが挙げられる。前 2 者は、調査範囲が狭いためであり、今後の周辺調査の進展で明らかになることである。ところが、最後の点は、少なくとも方形周溝墓の溝が開いている状態の中で、大溝を掘削しているということであり、これらが環濠であるかどうかによって、その意味づけが異なる。

また、集落構造とその変遷もより詳しく分かってきた。B 地区および C 地区北半では堅穴式住居跡が 10 基前後重なって検出されるのに対して、集落南半の C・D 地区は全く違った様相を呈している。集落南半の特色は、堅穴式住居跡の廃絶後に方形周溝墓が構築されて墓域として利用されていること、堅穴式住居跡の分布密度が低く、しかも住居跡同志の切り合い関係が認められないこと、これらの堅穴式住居跡は他の遺構との重複関係から市田齊当坊弥生集落が成立した段階のものという点が挙げられる。これらの特色は、集落北部である A 地区でも同様の傾向を示して

いる。これらのことから、集落の北と南—A地区およびC地区の南半以南は、集落形成後直ちに居住域から墓域へと転用されたもので、その後は墓域として利用されていたと判断される。

以上の知見から、当遺跡の弥生集落を具体的に振り返ると、次のようになる。中期前葉に、集落の全域に竪穴式住居が造られ、集落の南端に近い位置に縦板を組んだ井戸2基が作られて、集落が形成される。この時は、竪穴式住居が集落全域に散在していたという特色を持つ。次いで、同じく中期前葉の段階、住居跡に重複が認められないので、最初の竪穴式住居が建て替えを必要としない程度の時間経過後、集落南側・北側に位置していた竪穴式住居や井戸が廃棄されて、方形周溝墓を主とした墓域となり、集落の中心地である居住域は、その間に挟まれた格好となる。竪穴式住居跡の分布密度から、B地区およびC地区の北半とその西側に居住域が広がっているものと想定される。この現象は、集落の空間利用にあたって、墓域と居住域を厳然と区別したためと考えられ、いわば、集落成立時ではなくて、やや期間があつての後に集落デザインが企図されたと推測される。その後、集落の北半の居住域では、竪穴式住居跡10基前後が重なっており、これがある家族が建て替えをした結果と考え、中期後葉に至るまで、長期間にわたって安定的に集落が営まれたと言えよう。中期後葉には、方形周溝墓の溝を連結するかのよう“環濠”が4ないし5条掘削されるが、その理由については現時点では不明である。

密集して累々と検出された竪穴式住居、集落の南辺に数条掘削されている環濠状の大溝、中期前葉からの玉作り、石剣45点以上・石庖丁130点以上という多量の石器、国内最古級の井戸枠を有する井戸、そして低地で見つかった古墳など、多様な事実が市田斉当坊遺跡を特色づけることが分かった。市田斉当坊遺跡は南山城地域最大級の弥生集落であり、この遺跡の適切な位置づけがこの地域の弥生社会を明らかにする上で必要不可欠であることは間違いない。

(岩松 保・野々口陽子)

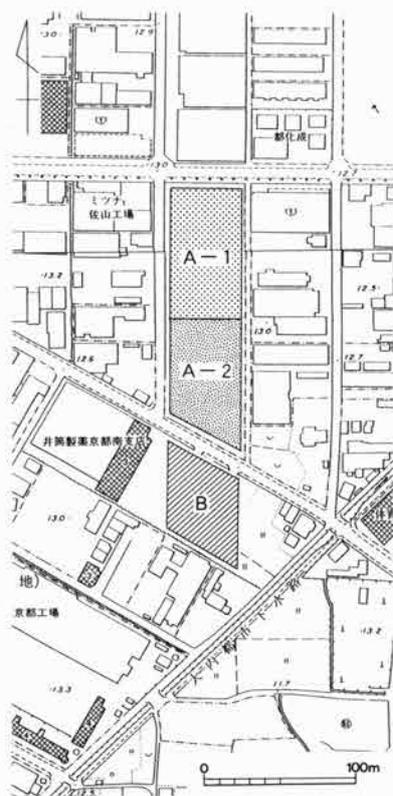
(2) 佐山遺跡

1. 調査経過

佐山遺跡は、久世郡久御山町佐古小字外屋敷、佐山小字新開地にあり、『京都府遺跡地図』に掲載されている周知の遺跡である^(注11)。平成9年度の試掘成果によって、弥生時代後期～中世の集落遺跡であることが明らかとなった。調査対象地は、町立佐山小学校の西約100mに位置する。試掘調査結果から、路線帯内では南北約250mが遺跡範囲と推定された。遺跡の東西方向の範囲に関しては不明であるが、遺構の分布状況は広範囲におよぶ可能性を示している。調査では、調査対象地が町道で分断されるので、便宜上、道路の北側をA地区、南側をB地区とした。さらにA地区は複数年度で調査を行うため、北半部をA-1地区、南半部をA-2地区と細分した。本稿では、第1次調査としてA-1地区での調査を終えた古代末～中世遺構面について報告を行う。

2. 検出遺構

平安時代中頃に遡る、条里型地割に関連する遺構を検出した。検出遺構には道路跡・溝・島畠・水田と土坑等がある。地割関連遺構として、調査区南部から里境となる東西道路(S F 125)と同側溝(S D 14・18・54)を検出した。また、調査区東部から東西道路S F 125に直交する坪境の南北道路(S F 126)と、同側溝(S D 63・67・05)を検出をしている。道路に伴う側溝は、ほぼ同一場所で多数条存在する。調査区北壁面の観察では、道路S F 126に関連する土饅頭様の土砂の盛り上げ状況(図版第29-3)が確認された。道路S F 126は昭和初期までほぼ同一場所に存在し、長期間にわたって条里型地割が整備され続けた状況がうかがえる。



第39図 佐山遺跡調査区配置図

溝S D 14 道路S F 125の北側溝である。調査区西端から東に約25m地点でほぼ直角に北に折れ、南北溝(S D 63)に接続する。溝は幅0.6~1.0m・深さ約0.3mを測る。横断面は深い「U」字形を呈し、溝底はゆるやかに東側に下がる。

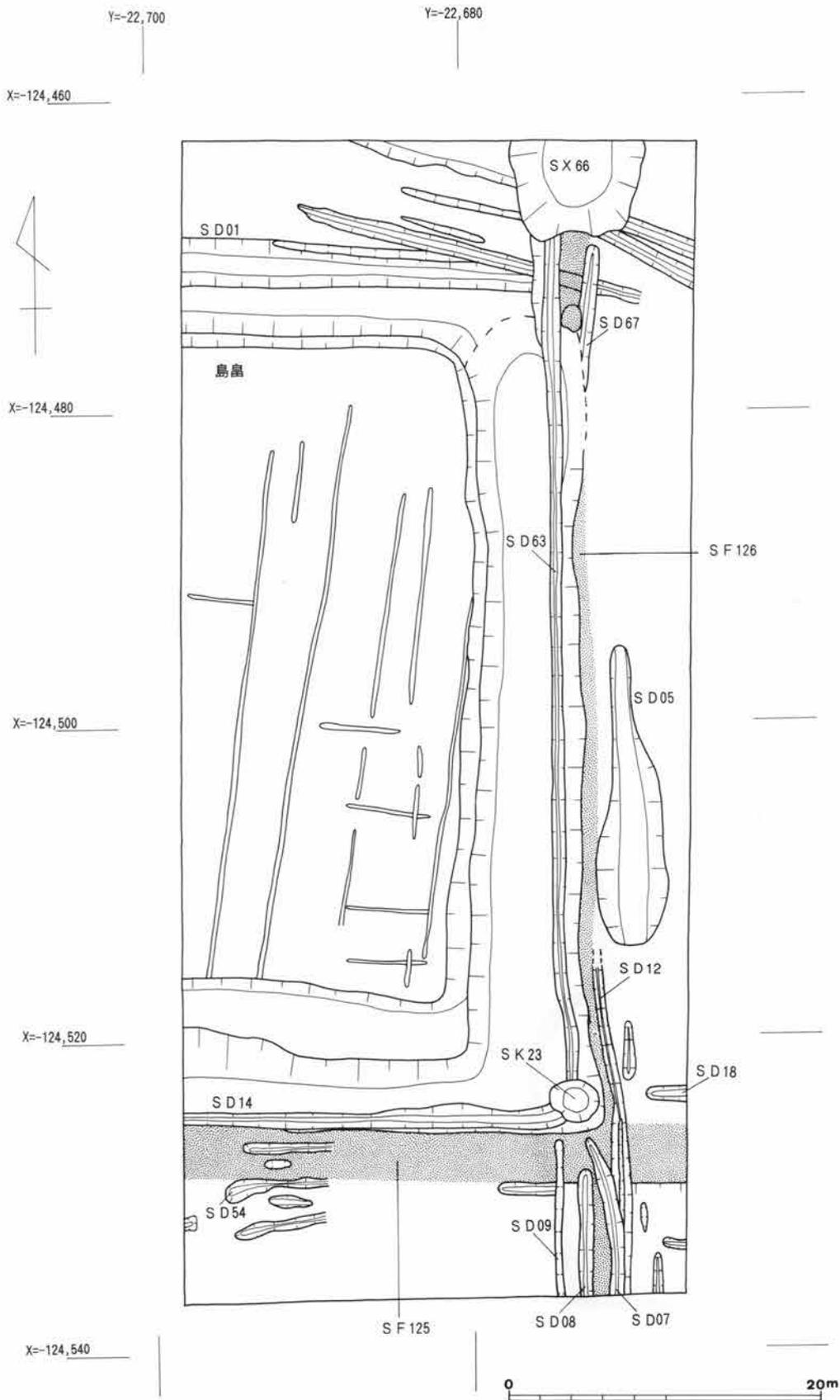
溝S D 54 道路S F 125の南側溝である。溝S D 14の南側を併走する。後世の耕作で激しく削平を受け、各所で寸断状況にある。溝S D 54の溝底はS D 14に比べ0.3~0.4m上位にあり、溝の深い部分が遺構として検出できた。溝は幅0.8~0.9m、深さは最大でも0.1mである。

溝S D 18 溝S D 14の東延長上で検出した東西溝である。溝S D 14に対して北側に約0.6m偏在するが、道路S F 125の北側溝である可能性が高い。溝の横断面は溝S D 14と同様に深い「U」字形を呈している。溝は幅約1.3m・深さ約0.3mを測る。多くの溝の埋土が細砂であったが、S D 18は5mm前後の小石を多く含む粗砂が堆積していた。溝S D 18の西端からS D 14の東端屈曲部までの距離は4.4mを測る。

道路S F 125 溝S D 14と溝S D 54の間を道路と認識する。北側溝とみるS D 18に対応する南側溝は検出できないが、溝S D 54の東延長部で南に向けて一段下がる傾斜が確認された。この傾斜面は南側溝の肩部であった可能性が高い。本来の路面幅は不明であるが、溝S D 14と溝S D 54の心々距離は約4.5mを測る。また、溝S D 18と南側の傾斜面上端とは約6.0mの間隔を測る。

溝S D 63 調査地東部を南北に走る溝であり、南端部では西に屈曲し溝S D 14となる。坪境道S F 126の西側溝と判断する。溝幅は約1m、深さは検出面から約0.3mを測る。調査区中央部において、溝底と道路S F 126検出面との比高差は約1.0mを測る。溝埋土中から瓦器・土師器・白磁等の破片が出土している。

溝S D 67 調査地北部で検出した、溝S D 63の東側を併走する溝であり、道路S F 126の東側溝と判断する。溝幅は約1.0m、深さは検出面から約0.25mを測る。溝の南部は後世の水田耕作



第40図 A-1地区中世遺構面平面図

で削平を受け、その痕跡をとどめない。

溝 S D 05 溝 S D 67の南側延長上に位置する、幅広で浅い溝状遺構である。溝 S D 54と同様、後世の削平で深い部分が遺構として遺存したものと判断した。溝 S D 67と同じく道路 S F 126の東側溝とみているが、同一遺構とは認識しがたく、後世の坪境道東側溝と現時点では判断する。

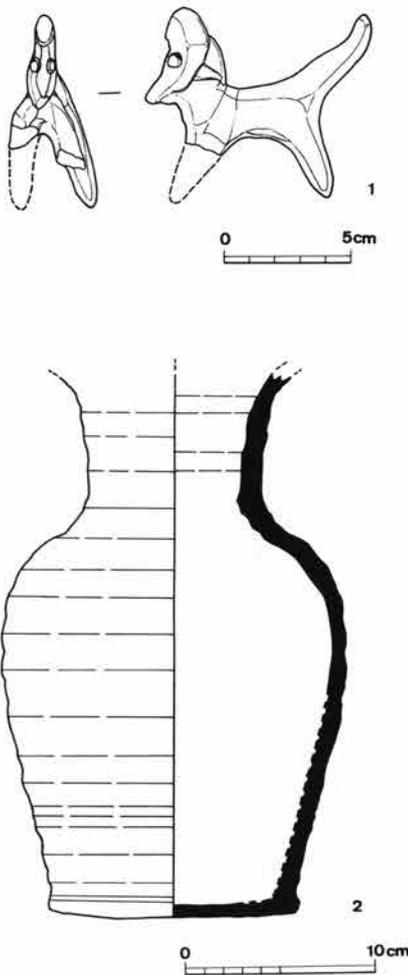
道路 S F 126 溝 S D 63・67間を道路と認識する。溝 S D 63と溝 S D 67の心々距離は約2.4～2.7mを測る。溝 S D 67の南延長部は削平により失われ、初期の道路に関しては不明な点が多い。道路 S F 125以南では、溝 S D 07～09・S D 12が道路側溝であり、このうち溝 S D 09・12、溝 S D 07・08が各1対の側溝と判断する。また、溝 S D 09・12が溝 S D 63・67に対応すると考える。

土坑 S K 23 道路 S F 125と S F 126の交点から検出した円形土坑である。直径約2.7～3.2m・深さ約0.85mを測る。道路側溝である溝 S D 14と溝 S D 63が土坑を切る状況にあり、検出遺構の中

でも初期に属する遺構と判断する。土坑内から、完形に近い平安時代の須恵器壺(第41図2)と、少量の獣骨(馬か)が出土している。

土坑 S X 66 調査区北端、道路 S F 126の下部で検出した大型の窪地状遺構である。平面形は楕円を呈するとみられるが、北半部分が調査地外に延びている。短軸とみる東西方向は約8mの規模を測る。底部は凹凸面が著しく、最深部で検出面から約0.9mを測る。埋土は粗砂と粘性の強い細砂や泥砂が堆積し、土器片に混じって獣骨(馬か)も出土している。

島畠 溝 S D 01・14・63に囲まれた範囲で島畠を検出した。島畠は周囲の土砂を掘り下げることによって形成される。島畠を取り巻く低地は灰色系泥質砂の堆積から水田と判断される。水田は7m前後の範囲で帯状に島畠を取り巻く。溝 S D 14と溝 S D 01の心々距離は約54mを測る。島畠全容は不明であるが、島畠上面で南北約40mを測る。島畠上には斜行する数条の耕作溝を検出した。



第41図 出土遺物実測図
1. 土馬(S D 01) 2. 須恵器壺(S K 23)

3. 出土遺物(第41図)

水田土壌を中心に中世～近世に属する土師器・須恵質土器・瓦器・陶磁器が出土してい

る。また、水田部分の調査中に小柄と判断する小刀1点が出土した。主要な遺物として、水田土壌の最下層および道路側溝内から、11世紀後半～13世紀の瓦器椀片の出土をみている。また、溝S D01から土馬、土坑S K23から須恵器壺など平安時代の遺物が出土している。

4. ま と め

今回の調査地は、久世郡条里^(注12)復原によれば、八条八里三十三の坪・同三十四の坪と八条九里三の坪・同四の坪にあたる。今回検出した道路S F125は八里と九里を分ける里境道路、道路S F126は先述の三の坪・四の坪を分ける坪境道路に合致する。調査区西部で検出した島畠は八条九里四の坪にあり、地割溝とみるS D01の検出によって半折型の坪内地割を確認した。なお、道路S F126はその位置関係において、市田齊当坊遺跡B・C地区検出の南北坪境道と直線的に結ばれた道路である。市田齊当坊遺跡C-2地区調査で検出した、竪穴式住居跡S H134の東部を切って南北に縦走する2本の溝は、坪境道の側溝であり、この坪境道の南延長線上に道路S F126が存在する。なお、市田齊当坊遺跡A・B地区は久世郡条里の八条十里九の坪・同十の坪、C地区は八条十里三の坪と同四の坪に位置する。市田齊当坊遺跡C-2地区検出の東西里境道南側溝(S D425)と佐山遺跡道路S F125北側溝(S D54)の距離は約660mを測る。同距離は一里に等しく、1本の里境道(道路S F125)・5本の坪境道を含んでいる。道路を含めて単純に坪数で割ると、一坪の1辺は110mの数値が得られる。一坪を108mとした場合、道路S F125(約4.5m)を差し引くと残りは12mであり、1つの坪境道は1.5mの数値が得られる。現段階では後者の数値による地割が、調査で検出した成果に程良く合致する。

検出した条里関連の地割は、道路側溝・水田土壌下層出土遺物から、およそ11世紀中頃には実施されていたことは確実である。条里関連道路の交差点で検出した土坑S K23は祭祀色が強い土坑である。特に道路地割の交差点と半坪単位付近には獣骨(馬)を伴う土坑・大型の窪地(S X66)が検出された。同種の遺構は市田齊当坊遺跡・佐山尼垣外遺跡でも検出されており、条里交差点もしくは条里地割内の耕作に関連した祭祀色が強い遺構と判断している。土坑S K23では、平安時代の年代観を示す須恵器壺が出土している。土坑S K23が条里型区画交差点での祭祀関連遺構とみるならば、条里型地割の施行が平安時代に遡る可能性が示唆される。

今後、調査はA-1地区下層で集落遺構(弥生時代後期～古墳時代)の調査、A-2地区・B地区調査へ順次移行する。条里型地割についてさらなる調査の成果に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

(3)佐山尼垣外遺跡

1. 調査経過

佐山尼垣外遺跡は、久世郡久御山町佐山小字尼垣外にあり、木津川右岸の自然堤防上の微高地に立地する。本遺跡は平成9年度の試掘調査により、新たにその存在が確認されたものである。

調査面積は約5,000m²であるが、調査の便宜上これを東西に2分し、西側をA地区(約3,300m²)東側をB地区(約1,700m²)とし、A地区の調査終了後、引き続きB地区の調査を実施した。

調査は現地表下1.9~2.2mまでを重機により掘削し、鎌倉時代と弥生時代の遺物包含層を確認した。その後、人力による掘削に切り替え、遺構検出につとめた。その結果、上層から平安・鎌倉時代の条里関連遺構に伴う坪境道や溝々・池状遺構、平安時代の条里型地割施行以前の溝跡などを検出した。また下層から、弥生時代の方形周溝墓や竪穴式住居跡、縄文時代の溝跡等を検出した。

2. 調査概要

本調査区で検出した遺構は、鎌倉時代や平安時代を中心とするもの、弥生時代を中心とするもの、縄文時代のものとおおむね3時期に大別できる。これらの遺構は、ほぼ同一遺構面において検出しており、弥生時代の遺構の多くは、中世以降の削平の影響を強く受けている。以下、各時期ごとに主要な遺構を中心に概観していきたい。

(1)平安~鎌倉時代の遺構(第43図)

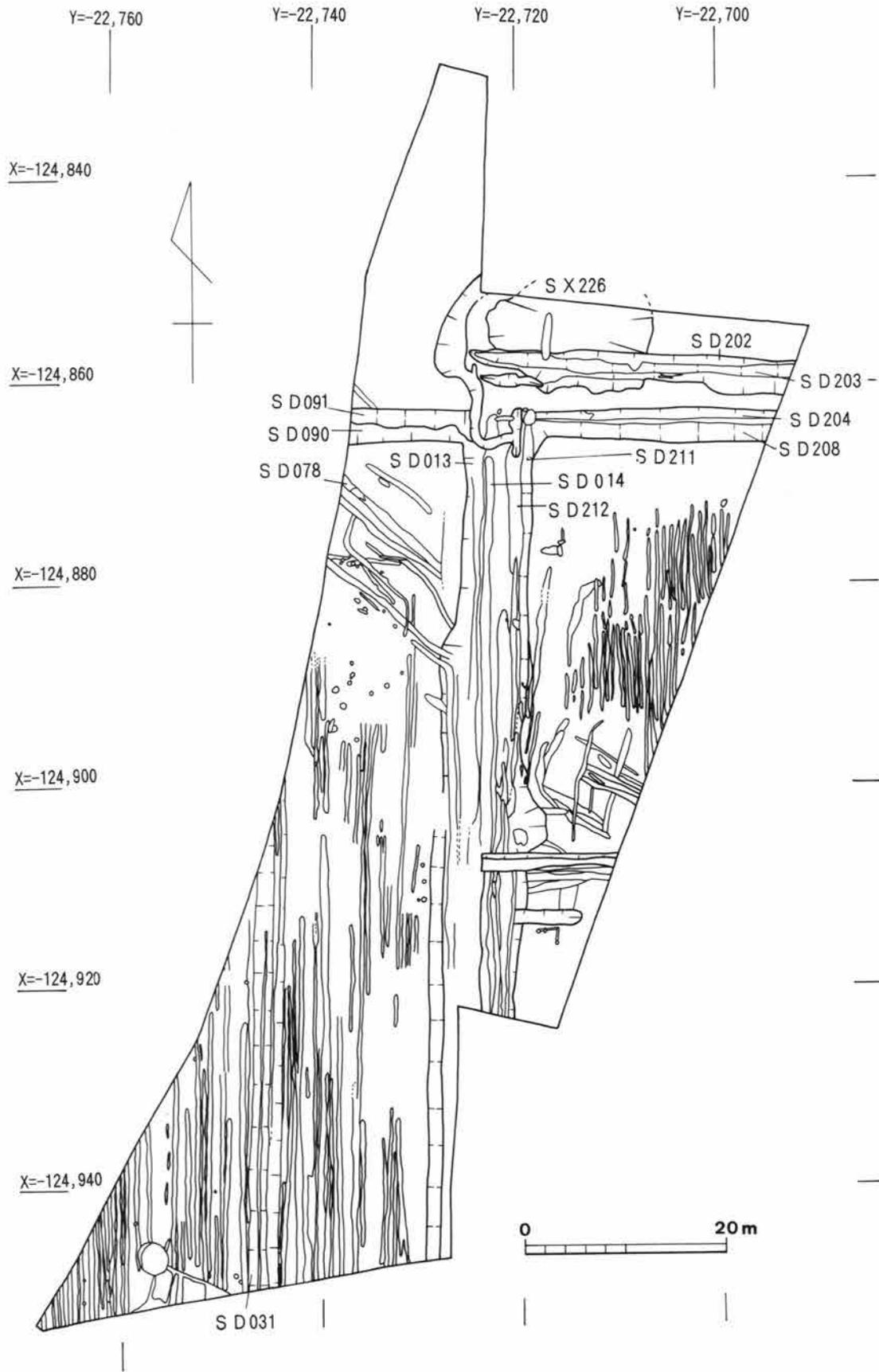
①素掘り溝跡群(畝溝)

調査区の南部、西部を中心に南北に縦走する多数の素掘り溝跡群を検出した。これらの溝跡は、ほぼ真北に方位を揃えており、久世郡条里型地割に伴う耕作溝と考えられる。溝の多くは幅0.1~0.5m・深さ0.1~0.2mを測り、溝の間隔はきわめて狭い。これらの溝の中には溝同士が切り合いつつ、南北に縦走するものもあり、同一方向で時期を違えて連綿と畑作が営まれた様相がうかがえる。

溝SD031 調査区南部で検出した南北の溝跡である。幅1.4m・深さ0.35m・長さ22mを測り、断面は「U」字形を呈する。溝の北辺と南辺はそれぞれ調査地外へと延伸する。この溝は他の溝と比べて規模も大きく、この溝の東約18m付近にも同様な溝が存在することから、坪内を6分割した区画溝と考えられるものである。溝の埋土からは瓦器碗や土師皿



第42図 佐山尼垣外遺跡調査区配置図



第43図 調査区遺構平面図(平安～鎌倉時代)

②条里地割関連遺構

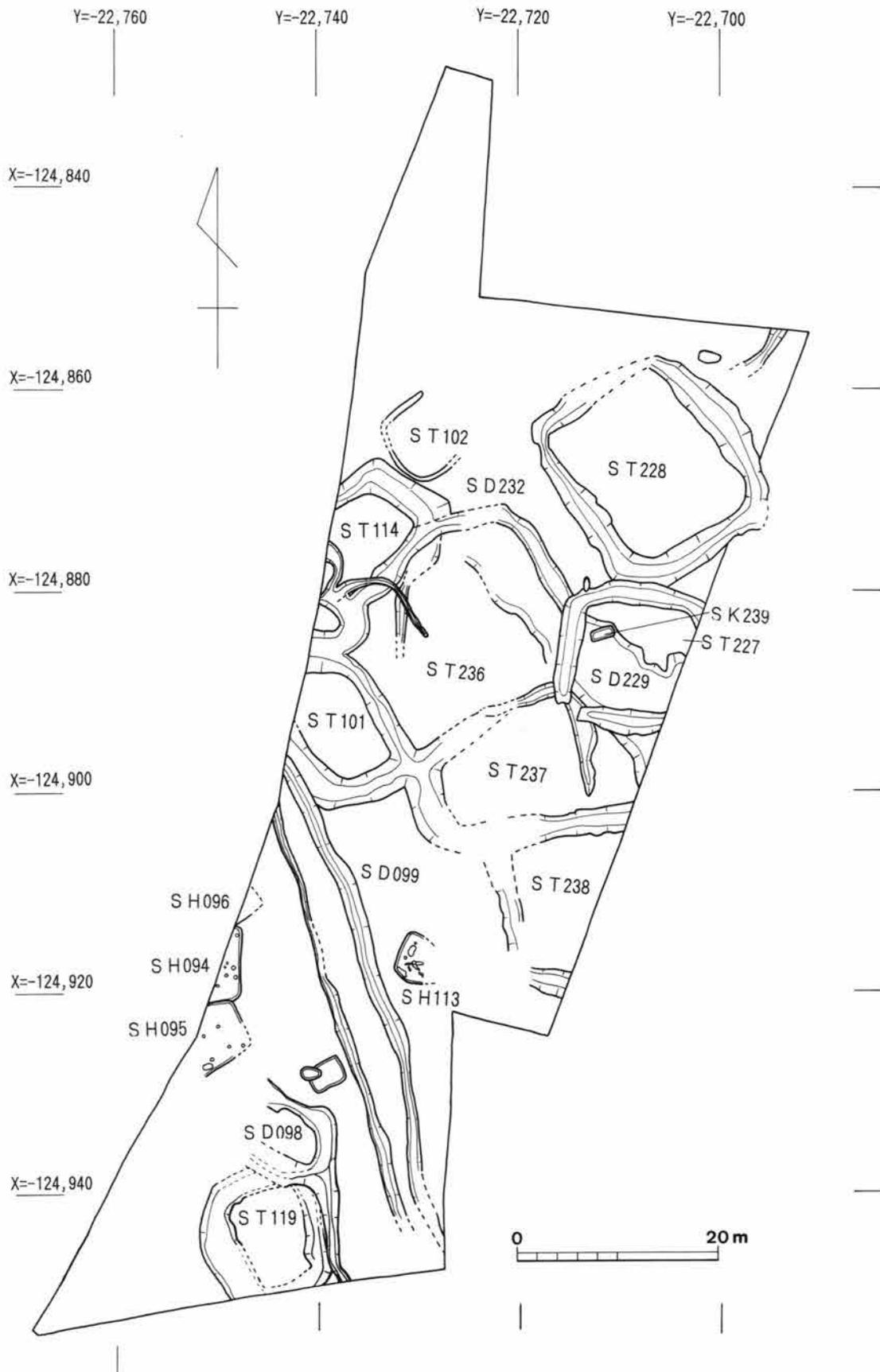
東西溝跡群(S D90・91・202～204・208) 調査区北部で検出した東西溝跡群である。これらの溝は、ほぼ東西に方向を揃えており、うち溝S D202・203と溝S D204・208は溝心々距離で約6mの間隔を保って併走し、調査区北域中央付近に至る。溝は幅約1.2～3m、深さは深いもので0.4m、浅いもので0.15m程度を測り、暗灰色の粘質土や粘細砂などを主な埋土とする。検出した長さは溝S D90・91が約12m、溝S D202・203で約30m、溝S D204・208で約22mを測り、溝断面はゆるやかな「U」字形を呈する。これらの溝からは瓦器や軒丸瓦・銭貨・植物種子などが出土した。なお溝が併走する位置は、久世郡条里復原によると、ほぼ坪境と推定される場所に相当し、調査区の西壁面には、近年に至るまで幾度となく掘削が繰り返されたと推定される坪境道と側溝の痕跡が認められる。溝S D202・203と溝S D90・91・204・208については、北に位置する佐山遺跡の里境道S F125から南にほぼ三坪の位置にあたることから、それぞれ坪境道を構成する北側溝と南側溝と判断する。このうち、溝S D203と204、溝S D202とS D208はセット関係にあり、溝S D203とS D204が先行する。

南北溝跡群(S D013・014・211・212) 調査区中央部で検出した南北の溝跡群である。溝S D013は、幅約2m・深さ約0.4m・長さ約38m、溝S D211は幅1.5～2.5m・深さ約0.3mを測る。両溝は心々距離が約6mの間隔を保ち、併走する。溝S D211は幾重にも南北溝に切られながら総延長約55m分を検出した。これらの溝跡は、断面「U」字形を呈し、埋土中から平安末から鎌倉時代にかけての土師器・瓦器・獣骨などが出土した溝S D013・211の北端は東西方向の坪境道南側溝に取り付く状況を示す。池状遺構S X226の検出面での精査では、坪境道以北に延びる状況が認められなかった。これらの溝群は、市田斉当坊遺跡や佐山遺跡検出の道路S F126にみる、南北に延びる一連の坪境道の延長線から西に約半坪の距離を測る。

池状遺構S X226 調査区北端で検出した里道に先行する池状遺構で、北端は調査区外へ延びる。検出部分の平面は不整形な楕円を呈し、東西約16m・南北約8mを測る。また断面形はすり鉢状を呈し、肩はゆるやかな勾配を描いて最深部へと傾斜しており、検出面からの最深部は約1.8mを測る。埋土は主に暗灰色、および暗緑灰色の粘質土、粘砂質土、粘細砂などが堆積し、溝底部付近の暗緑灰色粘質土層からは馬・犬などの獣骨が多量に出土した。これら獣骨は馬が主体であり、中でも下顎骨、大腿骨が多く、下顎骨だけで見れば3頭分に相当する。なおこの獣骨出土層からは、13世紀前半の瓦器椀が相伴しており、この池状遺構はほぼ当該期に埋没したものと考えられる。なお、この遺構の底は地山層下部の粗砂層に達しており、当初は地下水が滞水していた可能性がある。^(注13)地下水を利用した灌漑などを目的とした、溜め井の可能性も想定しておきたい。

(2)条里型地割以前の遺構

溝跡S D078 調査区北部を北西～南東方向に斜行する溝跡で、A地区で幅約1m・深さ約0.15m・長さ約30mを検出した。暗青灰色粘質土を主な埋土とし、断面は「U」字形を呈する。溝底付近からは、9世紀初頭の須恵器の壺・杯などが出土した。このように斜行する溝は、この



第44図 調査区遺構平面図(縄文・弥生・古墳時代)

遺構周辺や、B地区南東部においても検出しており、条里型地割が施行される以前の古段階の耕作溝もしくは道路側溝と推定される。斜交する溝群から遺物が出土したのは、このS D 078のみであるが、他の溝についてもほぼ同時期のものと推定しておきたい。

(3) 弥生時代の遺構(第61図)

本調査区において検出した弥生時代の遺構は、方形周溝墓8基・竪穴式住居跡4基・溝跡・土坑などである。

a. 方形周溝墓群(S T 101・119・114・236~238)

調査区中央部と南部で検出した6基の方形周溝墓は、北西~南東方向に主軸を振り、周溝を共有するものもあり、多くは同時期に掘削されたと考えられる。うち、S T 101・S T 119の周溝内からは残存状況の良い壺・甕・高杯などがまとまって出土しており、供献土器と考えられる。これら土器の多くが弥生時代中期の特徴を持つことから、方形周溝墓は中期を中心に造営されたものと考えられる。なお、これら方形周溝墓の埋葬主体部は、後世の削平により失われており、ほとんど検出できなかった。

方形周溝墓 S T 101 調査区中央部で検出したN32°Wに方位を振る方形周溝墓である。長辺約13m・短辺約8.5mを測り、やや歪んだ長方形を呈する。周溝は残りの良いところで幅約2.5m・深さ約0.6mを測り、断面は「U」字形を呈している。また、埋土は淡灰褐色・淡黄灰褐色・黄灰褐色の粘質土がレンズ状に堆積している。北東辺周溝内の中央部の溝底付近から、弥生中期後葉の広口壺・甕・高杯などがほぼ完形の状態でまとまって出土した。

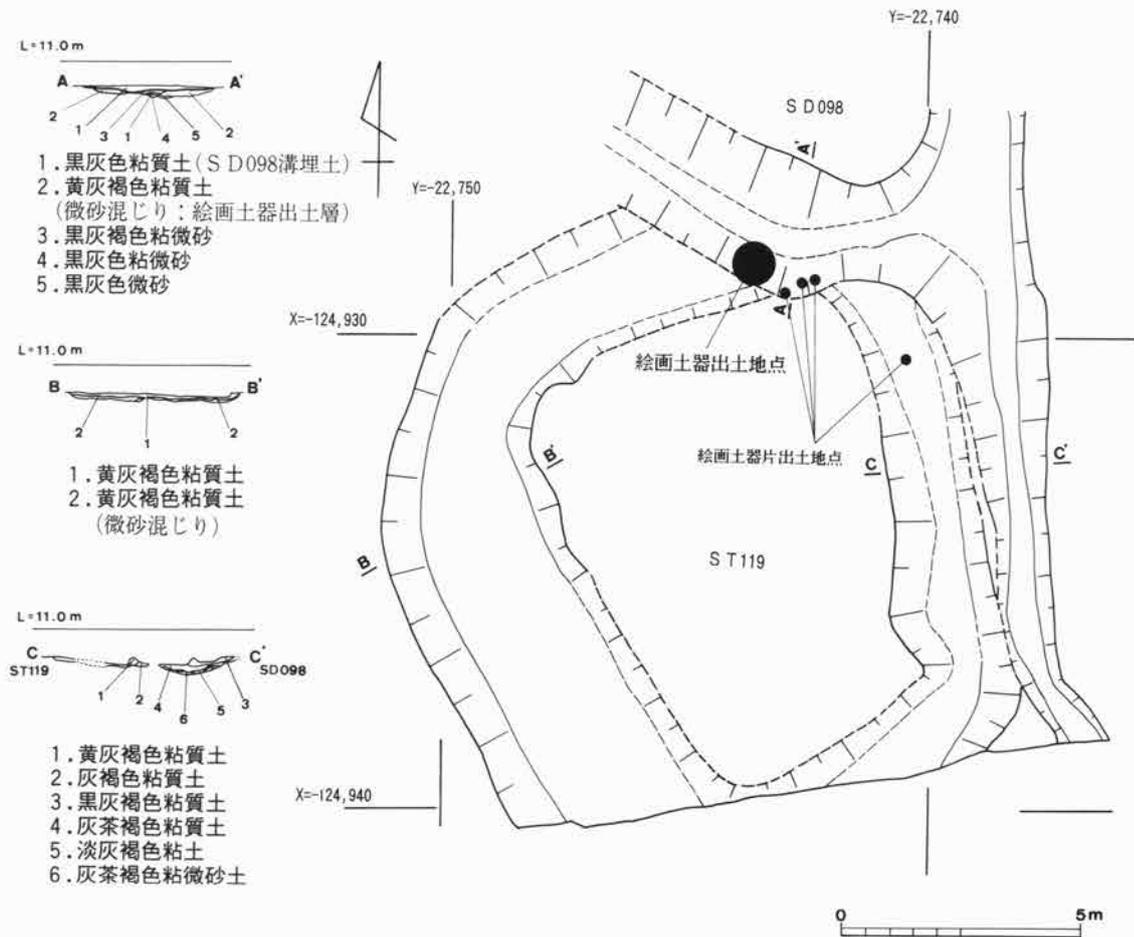
方形周溝墓 S T 228 調査区北東部で検出したN40°Wに方位を振る方形周溝墓である。台状部は一辺約16m×19mで長方形を呈し、周溝は残りの良いところで幅約4m・深さ約0.6mを測る。北辺と東辺の一部は、鎌倉期の坪境道両側溝や池状遺構S X 226に切られ、南辺は弥生時代後期の方形周溝墓S T 227に切られる。断面はゆるやかな「U」字形を呈し、緑灰褐色の粘微砂土・粘土・粘質土がレンズ状に堆積している。この周溝墓は検出した周溝墓中、最大規模を測る。

方形周溝墓 S T 119(第45図) 調査区南部で検出した方形周溝墓である。中央部を鎌倉期の南北溝S D 031、他の部分も同時期の南北溝により間断なく寸断され、残存状況はきわめて悪い。周溝墓の検出部分は南西部と東部、北部の一部に過ぎないが、ややいびつな方形を呈するものである。台状部は推定平面プランで一辺約10m×12m、周溝の幅は約3mの規模を測る。主軸はN14°Wに方位を振る。周溝の深さは約0.15mを測り、埋土は主に黄灰褐色粘質土である。

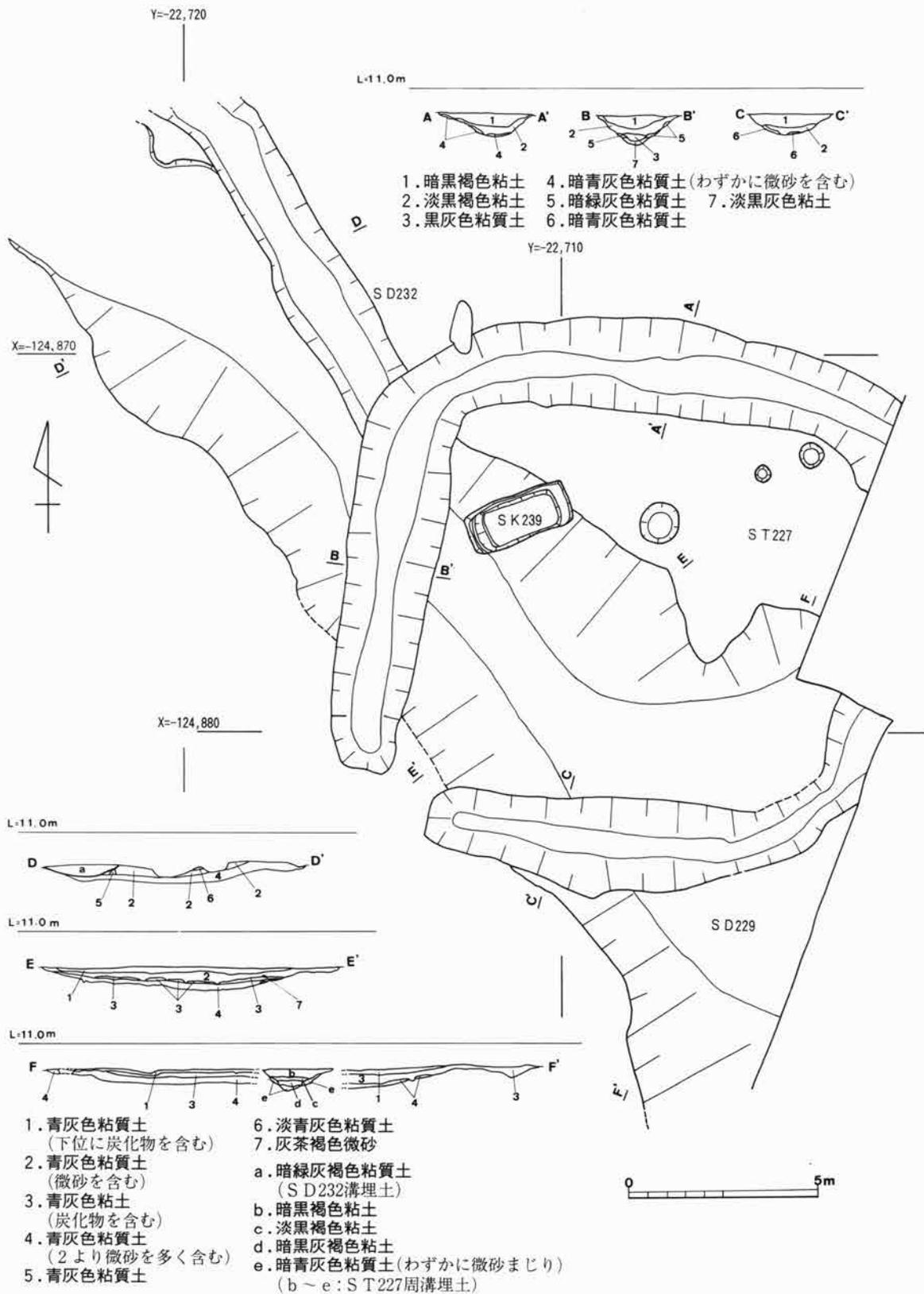
周溝内から出土した土器は、三頭のシカを線刻した広口壺(第47図、図版40-1・2)・細頸壺など約10点を数える。これらの土器は周溝の東辺から北辺に、また南西辺から西辺にかけて出土している。いずれも溝底付近からの出土である。絵画土器は、北辺周溝底部付近から折り重なるように潰れた状態で出土した。破片の一部は南東に約2m離れた周溝内からも、他の土器に混じって出土している。絵画土器は全体の7割程度が残存する。また、細頸壺は、西辺周溝底部付近から完形で横位の状態で出土した。細頸壺など、周溝内から出土した土器は、畿内第IV様式に属する時期と判断しているが、絵画土器については時期が遡る可能性が指摘^(註13)されており、周溝墓の

時期に関しては今後検討を必要とする。

なお、この方形周溝墓の北東部分から東辺部には、後世の溝S D098によって切られている。溝S D098の主な埋土は灰褐色・灰茶褐色粘質土・黒灰褐色粘質土である。この溝については当初、方形周溝墓の周溝と考えたが、平面の形状がいびつなことから方形プランを想定し得ず、別種の溝と考えるに至った。絵画土器はこの溝跡と周溝墓S T119が重複する部分から出土したが、出土付近の土層断面はやや複雑な様相を呈し、出土した土器や地層が両遺構のいずれに帰するか、当初検討を要するところであった。土層断面からみる出土地点付近の埋土の堆積状況(第45図A-A')は、上層が黒灰褐色粘質土、下層は微砂混じりの黄灰褐色粘質土であり、埋土の厚みは約0.2mであった。絵画土器は主にこの黄灰褐色粘質土層からの出土である。周辺の周溝や溝の埋土の堆積状況、周溝内の絵画土器片や他の土器の出土状況、各遺構の平面プランなどを検討した結果、絵画土器の出土層である黄灰褐色粘質土は、周溝墓S T119に伴う周溝の埋土と判断した。また、その直上の黒灰褐色粘質土については、溝S D098の埋土と判断した。ただ、溝S D098の埋土の堆積状況は、この付近と北部・南部付近では様相が異なっていた。溝の北部と南部



第45図 方形周溝墓S T119・溝S D098実測図



第46図 方形周溝墓 S T 227・溝跡 S D 229遺構平面図

では、黒灰褐色粘質土層下に灰褐色・灰茶褐色粘質土が堆積する。おそらくこの溝については、灰褐色・灰茶褐色粘質土を埋土として南北走する時期が先行し、黒灰褐色粘質土を埋土とする分岐した原形状を呈する時期の2時期があると考えられる。

方形周溝墓 S T 102 調査区北部で検出した、N40°Wに主軸を振る方形区画の溝跡である。溝の南西辺と北東辺の一部は中世の溝によって切られているが、推定平面プランで一辺約7mの方形を呈するものである。溝は残りの良いところで、幅約0.6m・深さ約0.2mを測り、断面は逆台形を呈し、暗青灰褐色粘質土を主な埋土とする。溝内から滑石製紡錘車が出土したが、時期は確定できない。この区画溝については、既述の周溝墓と同様、北西～南東方向に方位を振っており、方形周溝墓群に隣接するので、方形周溝墓と考えておきたい。ただ、他の周溝墓と比べ、規模がひとまわり小さく、造営された時期が異なる可能性が考えられる。主体部は検出されなかった。

方形周溝墓 S T 227(第46図) 調査区東部で検出した、N17°Eに主軸を振る方形周溝墓である。上述の方形周溝墓群とは主軸の向きが異なるもので、この差異は造営された時期差を反映するものとする。北東部一角は調査地外のため未検出であるが、一辺約13mの方形を呈すると判断する。南西コーナー周辺部では周溝がいったん中断しており、この部分が陸橋に相当すると考える。周溝の幅は1.7～2.5m、深さは0.5～0.8mを測り、断面はおおむねゆるやかな「U」字形を呈する。埋土は主に上層が暗黒褐色粘土、中層が淡黒褐色粘土、下層が微砂混じりの暗青灰色粘質土である。土器は主に下層から潰れた状態で出土したが、残存状況は良好である。出土土器には壺・鉢などがあり、約10点を数える。北辺周溝から出土した広口壺は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土を用いている。これらの土器はいずれも弥生時代後期の様相を呈している。なお、主体部は検出されなかった。

b. 竪穴式住居跡(S H 094～096・113)

調査区の南東部で3基、中央部南側で1基の竪穴式住居跡を検出した。いずれも、後世の削平が著しく、遺構の残りの良いものでも壁高が10～15m程度を測るに過ぎない。調査区内には他に、削平を受けて、消滅した住居跡が存在した可能性もある。

竪穴式住居跡 S H 094 調査区の南東部で検出した竪穴式住居跡である。住居跡は南西部と北西部のコーナーを含む、東半部の一画を検出した。壁高の残存は数cm程度と悪いが、床面から周壁溝を検出した。床面直上付近から壺形土器などがまとまって出土した。

竪穴式住居跡 S H 095 調査区の南東部で検出した竪穴式住居跡である。一辺約6mの方形を呈し、N34°Wに主軸を振る。深さは約0.1mを測り、暗灰色粘質土・灰褐色粘砂質土を主な埋土とする。床面からは柱穴や周壁溝の一部を検出した。時期については、外面にタタキ調整の施される甕の底部片が出土していることから、弥生時代後期と考える。

c. その他の弥生時代の遺構

溝 S D 099 調査区南部を北々西～南々東方向に斜行する溝跡である。溝の南端は、一部鎌倉期の溝に切られ、北端は、一部弥生時代中期の周溝墓 S T 101を切る。溝は残りの良いところで幅約1.9m・深さ約0.7m・検出長約50mを測り、断面はゆるやかな「V」字形を呈する。埋土は、

上層は暗灰色粘質土・粘砂質土、中層は灰色粘質土・粘砂質土、下層は暗灰色粘質土・粘砂質土からなり、中層から下層にかけては炭化物の混入が認められた。埋土上層付近から、体部外面に粗いタタキ調整を施す甕がほぼ完形で出土した。溝の時期については確定できないが、庄内式併行期を下らないと考える。

土壙 S K 239(第46図) 調査区東部、方形周溝墓 S T 227の台状部で検出した土壙である。長径約2.8m・短径約1.2mを測る隅丸長方形を呈し、深さ約0.4mを測る。方位はN70°Wに主軸を振り、土壙掘形は二段掘形である。この土壙の中央部上層付近から、弥生時代中期の壺が、ほぼ完形でつぶれた状態で出土した。埋土の土層断面観察から木棺痕跡と判断する土色変化が確認された。また、土器直下の暗青灰褐色粘質土層が、ほぼ中央部で土器とともに下方に落ち込む状況が認められた。この土坑については、弥生時代中期の埋葬主体部の可能性が高いと判断する。

(4) 縄文時代の遺構

溝 S D 229(第46図) 調査区中央部～東部で検出した北西～南東方向に斜行する溝跡である。溝は総検出長約30m、幅の広い南東端で約13m、幅の狭い北西端で約4.5mを測り、南東に進むに従い、裾広がり形状を呈する。溝の北西部は後世の削平により、南東部は調査区外のため、それぞれ検出できなかったが、溝跡はさらに南東方向に延びる状況にある。溝の南東半は方形周溝墓 S T 227と土壙 S K 239、北西半は北東肩部が溝跡 S D 232、北西端付近は鎌倉期の南北溝によりそれぞれ切られている。検出面から最深部までの深さは、中央部と南東部で約0.55m、北西部で約0.45mを測る。溝底部は南東から北西に向けて上り傾斜が強くなり、また幅と深さも減少する。溝の掘形はゆるやかなカーブをもつ逆台形である。溝の埋土は主に上層が青灰色粘質土、中層が炭化物混じりか微砂混じりの青灰色粘質土、下層は微砂が中層より多く混じる青灰色粘質土である。掘形斜面部を除き、土層はほぼ水平に堆積している。

出土した土器は、主に縄文時代晩期中葉の様相を呈する深鉢形土器や浅鉢形土器などである。土器の大半は溝の南東肩部付近から出土した。また、その出土状況は、溝の掘形ラインに沿ってカーブを描くように肩部から最深部にかけて、炭化物を伴って出土しており、短期間に廃棄された可能性も考えられる。この溝については、その形状や埋土の様相から、自然流路の可能性が考えられる。なお、この遺構からの出土ではないが、溝埋土からは土偶も出土しており、この時期の遺構が周辺に広がっている可能性をさらに補強する。

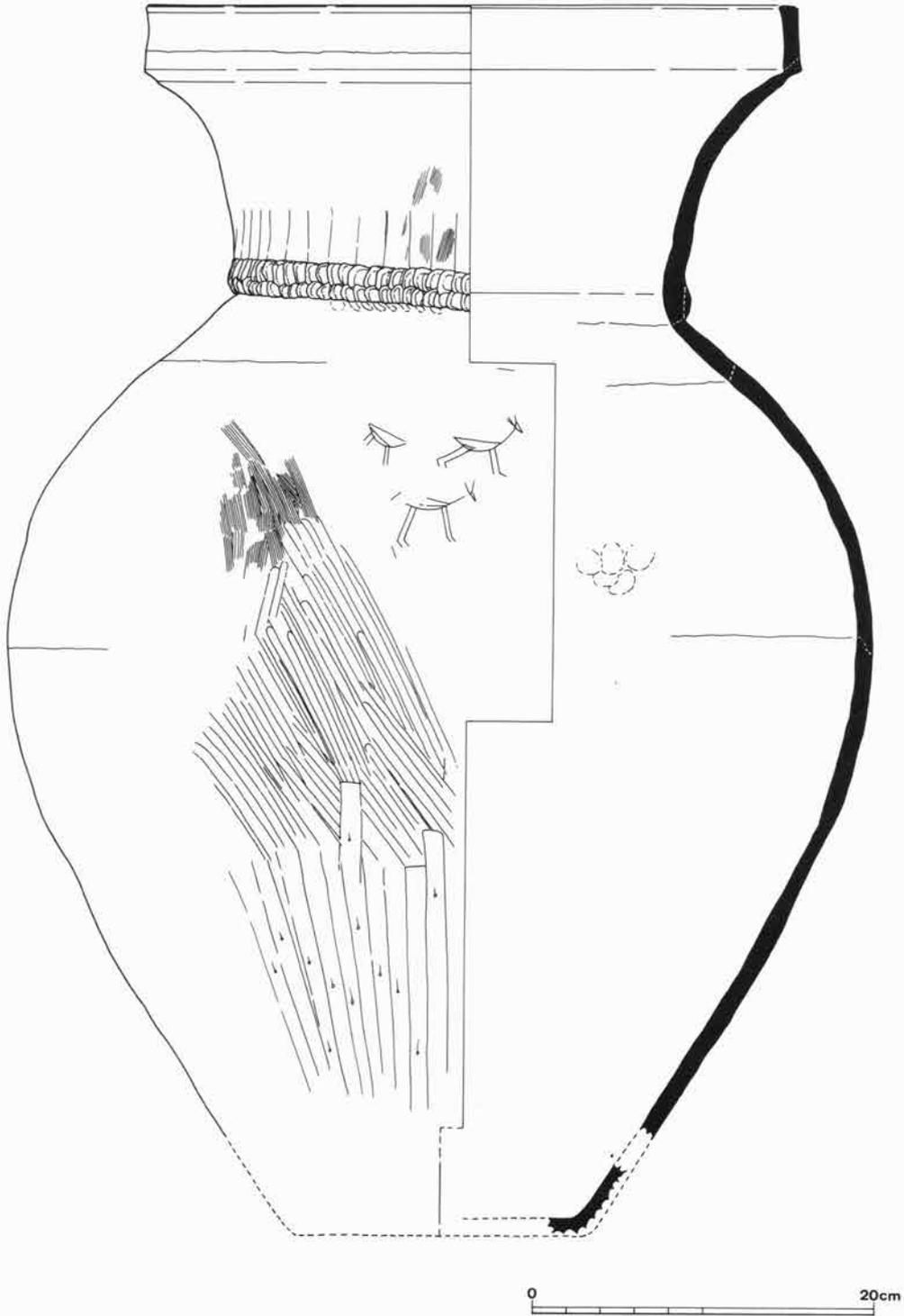
3. 出土遺物

現在、出土遺物については整理中であり、今回は特に方形周溝墓 S T 119出土の絵画土器壺と溝跡 S D 229から出土した縄文時代晩期の土器群について簡単に触れておきたい。

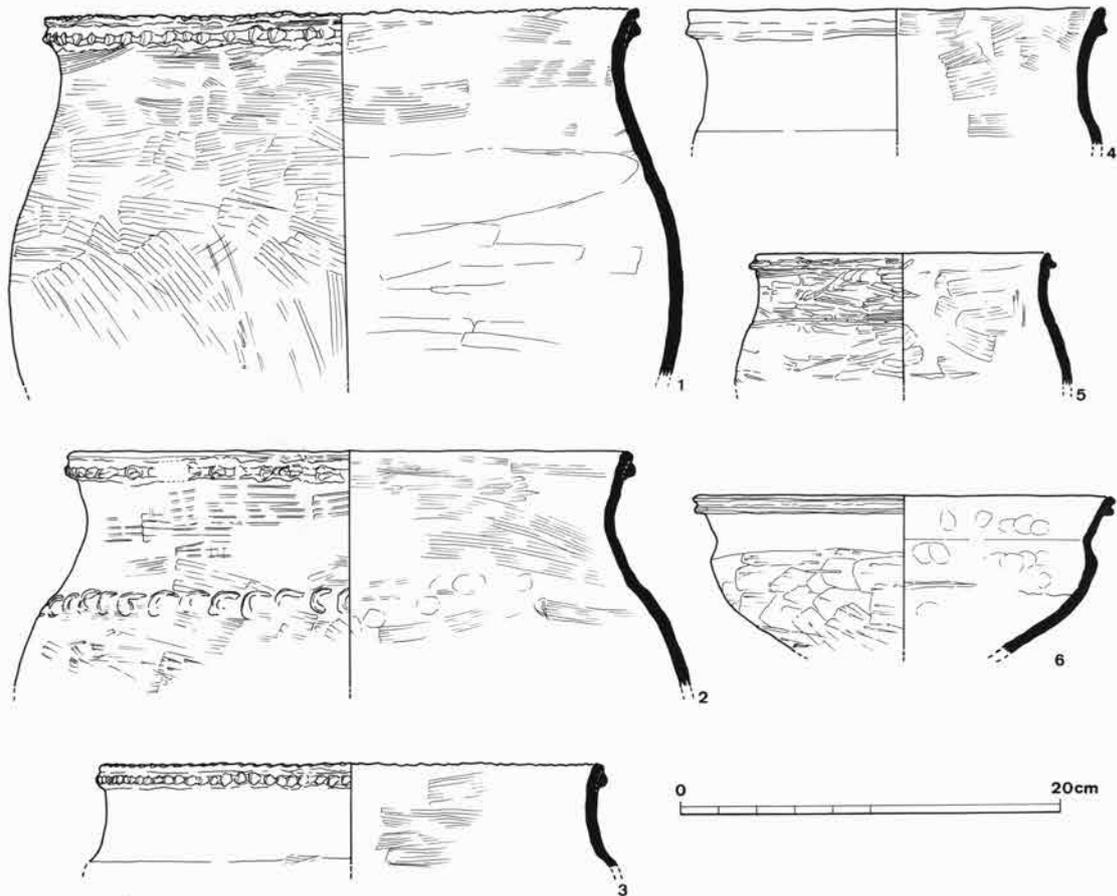
絵画土器壺(第47図、図版第40-1・2)は、体部最大径約50cm・推定器高70cmを測る大型の受け口状口縁をもつ広口壺である。底部付近をやや欠損するも、ゆるやかな曲線を描く体部の最大径は中央のやや上部にある。頸部はゆるやかに外反し、直立する口縁部へとつながる。頸部下端部に貼り付けの刻みを持つ複凸帯が施される。体部外面の下半はヘラケズリ、中央部はヘラミガ

キ、肩部外面はハケメ調整する。肩部外面に細い線刻による「シカ」3頭が描かれている。「シカ」は上部に2頭、下部に1頭を逆三角形に配置し、右方向に疾走する情景がみてとれる。線刻画のある壺肩部は全体の半分程度の破片しか出土せず、3頭の「シカ」以外にさらに線刻画が存在したかどうかは不明である。

(中村周平)



第47図 方形周溝墓S T119出土絵画土器壺実測図



第48図 溝跡S D09出土縄文土器実測図

縄文時代の土器は、深鉢4点および浅鉢1点の計6点を図示(第48図)した。溝S D229の出土遺物の総量はコンテナバットで6箱、図示可能なものは計百数十点ある。1～3は貼り付け刻み目突帯の深鉢である。突帯は口縁端部からやや頸部に下がった位置に着く。刻みは半截竹管状工具による「D」字文である。これらの深鉢には口唇部を不規則に刻むものと刻まないものの2種類が存在する。全体の器形は胴部下半部にケズリを施すが、頸部と胴部の間に明確な稜を持たず、「S」字状にゆるやかに屈曲するものと、「く」字状に屈曲するものがある。外面の調整は頸部を二枚貝による条痕状のヨコナデあるいはナデ、胴部にケズリを施すものが多い。2は半截竹管状工具の先端刺突による横位の連続する「C」字文が施される。

突帯には4・5のように刻みを持たないものもかなりの確率で存在する。5は外面に横方向を主体としたミガキを施し、頸部と胴部の境には沈線を施している。6は平口縁の浅鉢であり、口縁端部に貼り付け突帯が施されている。胴部下半はケズリである。

今回、図示はしていないが、深鉢に伴う底部は砲弾形の丸底底部とやや尖底気味の乳頭状底部から角度を持って外反するものがわずかに見られる。また、平底および上げ底気味の古い様相を示すものが1点ずつある。

これらの土器の大まかな時期は、貼り付け突帯文土器出現前後の晩期中葉前半、篠原式新段階から口酒井遺跡古段階に該当するもので、南山城地域では、初出の^(注15)一括資料である。なお、資料

提示できなかつたが、土偶体部の可能性^(注16)がある土製品1点が遺構検出作業によって出土した。

(柴 暁彦)

4. ま と め

今回の調査では、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物を検出した。以下、その成果を要約してみる。

平安～鎌倉時代においては、調査地周辺は、久世郡の条里型地割に関連する多数の溝跡や里道が形成され、耕作地として利用されていたことを明らかにし得た。同様の溝跡や坪境道は市田齊当坊遺跡・佐山遺跡においても検出されており、当該期において付近一帯は、畑作または水田耕作地帯として開発が進められていたことが判明した。また、坪境道の検出は、上記2遺跡の調査成果と併せて、今後の久世郡条里の検証や、周辺の景観復原を行う上で貴重な資料を提供することとなろう。久世郡の条里復原では、本調査区は八条八里十六の坪・同二十一の坪にあたる。道路側溝SD203と204に伴う道路遺構は、位置関係から十六の坪と二十一の坪を隔てる坪境道にはほぼ合致するものである。溝SD013・221などの南北溝群は十六の坪を東西に2分する位置にあたることから、この坪は半切型の地割であったとみられる。南北溝群は道路に伴う側溝の可能性が高く、後世において坪内地割りが道路に変わったと判断される。弥生時代中期においては、調査区周辺には竪穴式住居跡や方形周溝墓が築かれ、集落や墓域が形成されていたことが判明した。また、後期に属する方形周溝墓の検出によって、墓域が継続していたことを明らかにすることができた。縄文時代においては、溝跡の検出や土器の出土などにより、久御山町域の人々の生活の歴史が、当該期にまで遡ること、あわせて、調査区周辺に当該期の遺構が存在する可能性も明らかにし得た。溝SD229の土器の出土状況から、同時期の遺構はその南方に広がっている可能性も指摘できるだろう。検出した遺構のうち、縄文時代の溝は久御山町域において初検出となった。南山城地域でも数少ない遺構であり、その検出の意義は大きい。また、出土した遺物中、特に弥生時代中期の絵画土器、縄文晩期の土器や土偶などは、京都府内においても数少ない資料である。絵画土器や土偶は当該期の人々の精神生活などを考える上で、また、縄文土器は当該期の土器の変遷を追究する上で良好な資料となり得るだろう。

(中村周平)

注1 岩松 保ほか「佐山遺跡試掘調査―第二京阪自動車道関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第84冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注2 条里制は、7世紀後半の律令政権による班田収授の法にあわせ、農村水田に対して行われた土地区画の制度である。調査で検出した地割遺構としては、佐山遺跡検出の土坑SK23が9世紀中頃であることから、この時期には施行されていたことがうかがえる。先の条里制との混同を避けることから、ここでは条里型地割の名称を使用する。

注3 調査参加者(敬称略・順不同)

調査補助員 福嶋美保・川嶋聰子・永田優子・庄司友明・木下 亮・殿井 恵・佐伯光祥・村山和

幸・近藤奈央・澤井亮佑・馬場順平・南部 勝・田中由美・谷口 梢・汐碓 誠・洪田和昌・遠山昭登・李 義之・鈴木香織・安達華孝・伊豆元みずえ・岡井宏文・堀 大介・横井宏行

整理員 中島恵美子・西村香代子・松下道子・栃木道代・山中道代・与十田節子・福田玲子・森田千代子・奥平廣子・辻井和子・井上 聡・川嶋聰子・山崎美智子・西島真由美・小西ひとみ・服部喜代子・竹内和子・梅本真理子・繁田真理・長井謙治・田中由美・盛本照代・江口美由紀・尾崎嘉美

調査協力者 宇野隆夫・石野博信・広瀬和雄・松井 潔・中澤圭二・藤田三郎・川端和弘・杉原和雄・安藤信策・光谷拓実・秋山浩三・森岡秀人・富山正明・赤澤徳明・國分政子・伊庭 功・濱野俊一・濱田延充・深澤芳樹・塚本敏夫・小野映介・河角龍典

注4 竹原一彦ほか「国道1号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

竹原一彦「市田齊当坊遺跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第72号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注5 宇野隆夫「井戸考」(『史林』第65巻第5号 史学研究会) 1982

注6 『都市計画道路国守・黒原線建設工事に伴う讚良郡条里遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1991

注7 「鍋島本村南遺跡-1・2区の調査」(『佐賀市文化財調査報告書』第35集 佐賀市教育委員会) 1991

注8 国内外の井戸の類例と構造については、堀 大介氏(同志社大学大学院)にご教示を得た。

注9 高麗大学の李 弘鍾先生ご教示による。国立博物館『博物館新聞』第340号(1999年12月)にその調査内容が報告されている。

注10 佐藤宗男「大中湖遺跡における玉作について」(『古代文化』22-1 古代学協会) 1970

注11 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1985

注12 久世郡条里は、条は数詞で数え、里は数詞ではなく固有名詞と呼ばれていたようである。このことは「山城国禪定寺田畠流記帳」に二条古家里十五坪などの記述が残る。条里の呼称については、条は東から西に、里は固有名詞が特定できないことからここでは便宜上数詞に置き換え、通例に従い南から北に数えることとする。

谷岡武雄『平野の開発』古今書院 1964、『久御山町史』第1巻 久御山町 1986

注13 立命館大学河角龍典氏のご教示による。

注14 深澤芳樹氏・田代 弘から、絵画土器についてはその特徴から、畿内第Ⅲ様式古段階に遡る可能性があるとのことご教示を得た。

注15 以前の縄文時代晩期の編年によると、滋賀里ⅢからⅣ式に併行する段階である。同時期の資料には大阪府恩智遺跡・森ノ宮遺跡などがある。資料については立命館大学家根祥多氏のご教示を得た。

松尾信裕ほか『森ノ宮遺跡』Ⅱ 中央労働総合庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書 (財)大阪市文化財協会 1996

嶋村友子ほか『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告Ⅰ-恩智遺跡の調査-』 八尾市文化財調査報告14 昭和61年度国庫補助事業 八尾市教育委員会 1987

注14 兵庫県伊丹市口酒井遺跡に類例がある。

『口酒井遺跡第11次発掘調査報告書』 伊丹市教育委員会・古代学協会 1988

主要参考文献

乾 幸次『南山城の歴史的景観』古今書院 1988

家根祥多「篠原式の提唱」『縄文晩期前葉-中葉の広域編年』 文部省科学研究費(総合A)研究成果報告書 1994

4. 木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、住宅・都市整備公団の解散に伴い新設、事業移管された都市基盤整備公団による関西文化学術研究都市建設予定地内における発掘調査である。調査は、昭和59年度から継続して行っている。本年度は、昨年度までの調査で、顕著な遺構・遺物を確認し、その立地条件などから典型的な弥生時代の高地性集落と評価された木津城山遺跡と、その北に所在する古墳時代・奈良時代の遺物の散布が知られる内田山遺跡と内田山B 1号墳について、範囲確認を主眼とした試掘調査を行った。木津城山遺跡は、相楽郡木津町木津小字片山に所在し、木津川左岸の平野部を西方眼下に見下ろす、標高約80～100mを測る丘陵上に営まれた弥生時代後期の高地性集落である。^(注1) 標高105mの山頂には、木津城(山城)が築城されており、同遺跡は保存が確定しているため、その南北2地区において調査を行った(北地区・南地区)。調査期間は、北地区で平成11年4月12日～9月20日までと、南地区で平成11年11月17日～12年2月28日までの2期に分けて実施し、総調査面積は約2,300m²を測る。内田山遺跡・内田山B 1号墳については、同町木津小字内田山に所在するが、この遺跡内を通る道路建設の計画が立ち上がり、遺跡が影響を受けることとなったため、これら両遺跡の性格や範囲を明らかにすることを目的とした調査を実施した。調査期間は、平成11年9月1日～12月22日に実施し、調査面積は、約700m²を測った。

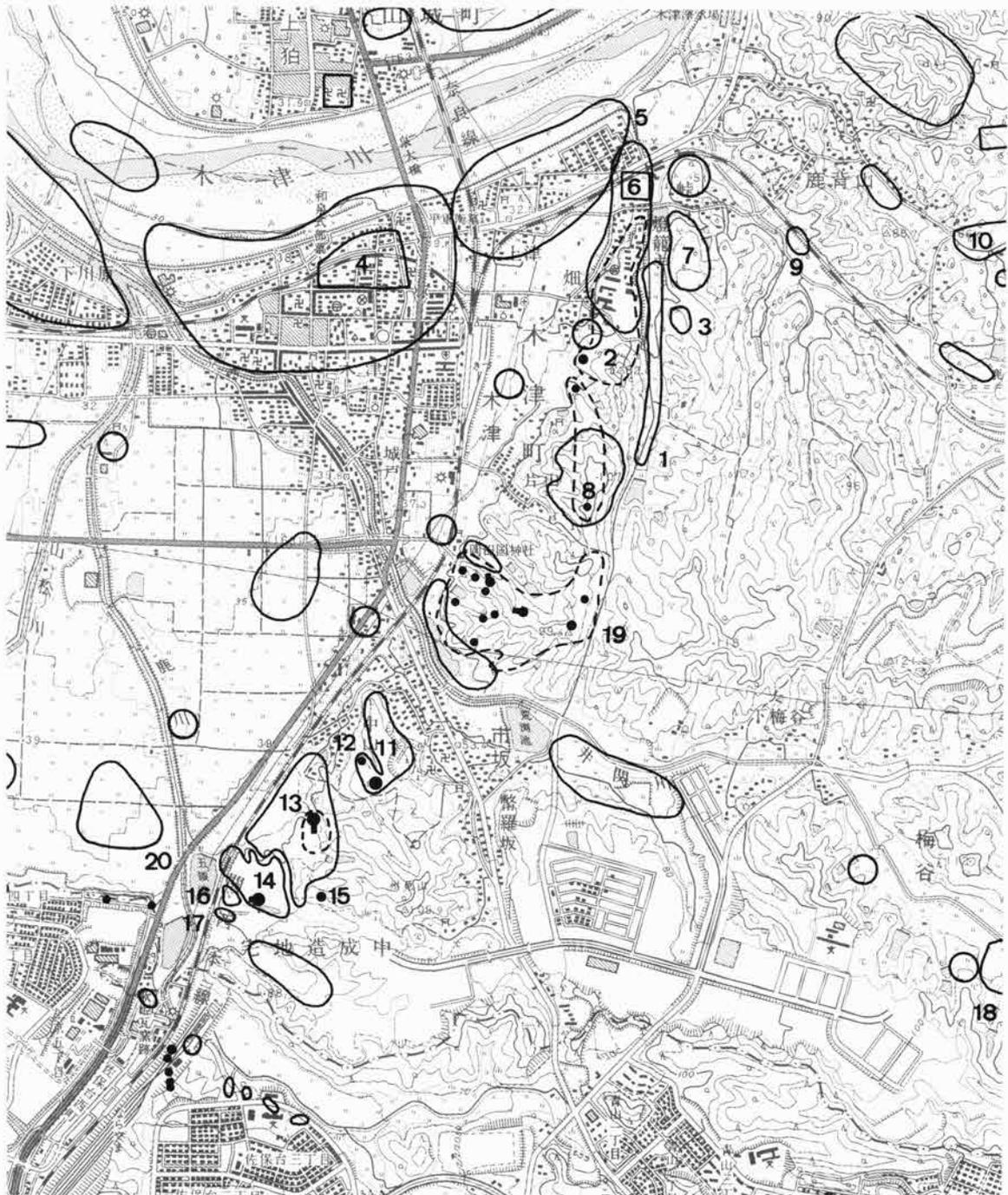
これらの現地調査については、当調査研究センター調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正・同第2係主任調査員戸原和人・同調査員筒井崇史が担当した。調査に係る経費は、都市基盤整備公団が負担した。なお、調査にあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課・木津町教育委員会・京都府立山城郷土資料館・木津の緑と文化財を守る会などの関係諸機関からご教示、ご協力いただいた。また、調査および報告書の作成にあたっては、多くの作業員・調査補助員・^(注2) 整理員の協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(戸原和人)

(1)内田山遺跡・内田山B 1号墳

1. 調査の経過

内田山遺跡および内田山B 1号墳は、木津町の東部に位置する、通称、城山から北に向かってのびる丘陵に位置する。この丘陵の東側には釜ヶ谷と呼ばれる谷があり、西側には木津川の沖積作用によって形成された平野部が広がる。この丘陵からは小丘陵が舌状に多数派生するが、その



第49図 調査地位置図および周辺遺跡配置図(1/50,000)

- | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 木津城山遺跡 | 2. 内田山古墳群 | 3. 菰池遺跡 | 4. 木津平城跡 | 5. 燈籠寺遺跡 |
| 6. 燈籠寺廃寺 | 7. 赤ヶ平遺跡 | 8. 片山古墳群 | 9. 鹿背山瓦窯跡 | 10. 巾ヶ谷遺跡 |
| 11. 西山遺跡 | 12. 西山古墓 | 13. 瓦谷古墳群 | 14. 上人ヶ平遺跡 | 15. 幣羅坂古墳 |
| 16. 市坂瓦窯跡 | 17. 五領池東瓦窯跡 | 18. 梅谷瓦窯跡 | 19. 天神山古墳群 | 20. 弓田遺跡 |

うち、西に向かってのびる小丘陵の1つに内田山遺跡・内田山B 1号墳は立地する。これらは、丘陵の先端に位置し、平野部との比高差は20m余りを測る。遺跡からの眺望は、眼下に木津町の平野部、遠方に精華町・京田辺市など木津川左岸の平野部や京阪奈丘陵を見渡すことができる。

内田山遺跡は、これまで須恵器・土師器などの遺物散布地として知られていた。また、内田山B 1号墳は周辺で埴輪片が採集されたこともあり、内田山遺跡内に認められたわずかな高まりを

古墳状隆起として周知されていた。

今回の調査は、道路建設予定部分に内田山遺跡や内田山B 1号墳が所在するため、遺跡の範囲やその内容の確認を目的として実施した試掘調査である。調査は、対象地内に4か所の試掘トレンチ(第1～第4トレンチ)を設けて実施した。調査面積は約700m²である。

調査は平成11年9月1日から開始した。まず、掘削に先立って内田山B 1号墳の調査前墳丘測量図を作成したのち、重機によって表土掘削を行った。重機掘削後人力による精査を行ったが、内田山遺跡として顕著な遺構は検出されなかった。出土遺物としては、従前から知られていた須恵器・土師器のほか、新たに弥生土器が出土した。一方、内田山B 1号墳では、墳頂部は大きく削平されていたが埴輪棺2基を検出したほか、試掘トレンチ内で周溝・墳丘裾などを検出し、B 1号墳が一辺18m前後の小規模な方墳であることが明らかになった。出土遺物は周溝から多数の埴輪片や不明鉄製品などが出土した。また、埴輪棺1からは玉類約180点が出土した。

記録作業は、平板で略測を行いながら遺構番号を付け、必要に応じて遺構図・遺物の出土状況図などを作成し、また写真撮影を行った。遺構の検出・掘削作業がおおむね終了した12月1日には現地説明会を行い、約90名の参加があった。その後、B 1号墳の埴輪棺を取り上げて、12月22日に全ての作業を終了した。

2. 調査の概要

(1)内田山遺跡

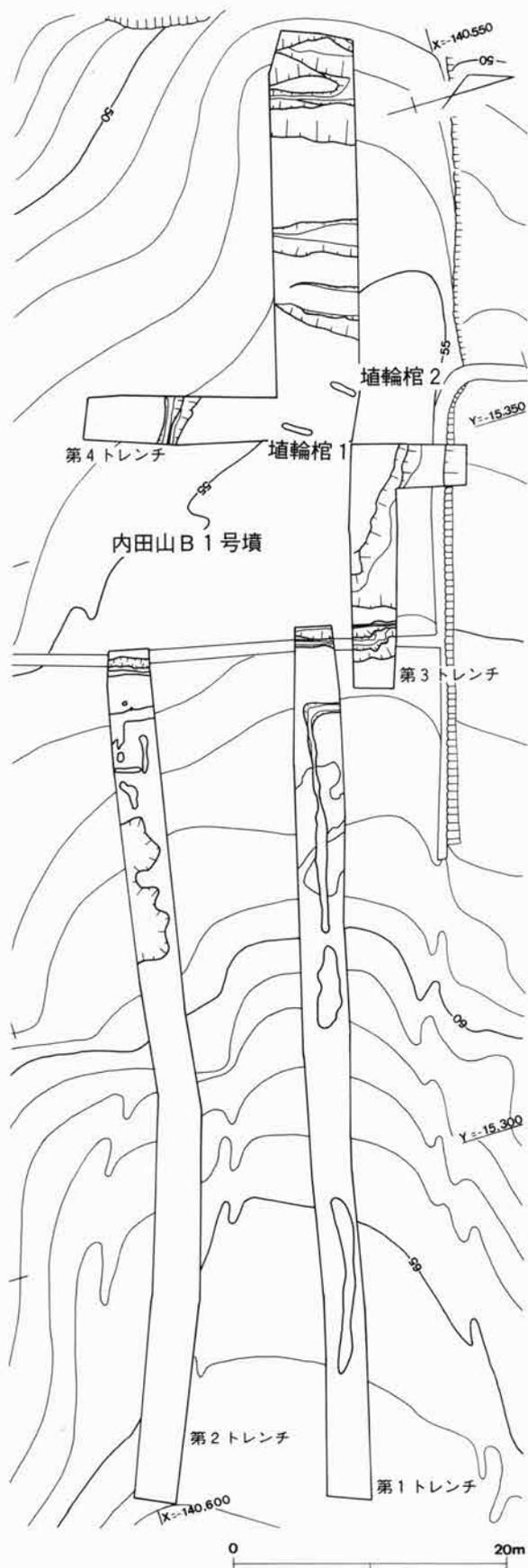
調査対象地内に、第1～4の試掘トレンチを設けた。このうち、第3・4トレンチは内田山B 1号墳の状況を調査するために、「L」字形のトレンチとして設定した。

内田山遺跡では、以下に述べるように、顕著な遺構は検出されなかったものの、各トレンチから須恵器・土師器・弥生土器などが出土した(第53図1～7)。土師器の詳細な時期は不明であるが、須恵器は奈良時代、弥生土器は弥生時代後期にそれぞれ位置づけられる。

第1トレンチ 全長64m・幅3mを測る。トレンチの東半分(丘陵上位側)では遺構・遺物ともに確認されなかった。西半分では、溝状の遺構などが検出されたが、時期は不明である。また、弥生土器片が地山上に堆積した灰色粘質土から出土した。この遺物包含層は第3トレンチに向かって広がることが確認された。

第2トレンチ 全長62m・幅3mを測る。現地形の関係で中央部付近で「く」字状に屈曲させるをえなかった。第1トレンチ同様、トレンチの東半分(丘陵上位側)では、遺構・遺物ともに確認されなかった。西半分でも、時期不明の柱穴・溝状の遺構が検出されたに過ぎない。また、須恵器・土師器など土器片が少量出土した。なお、第2トレンチ中央付近で埴輪片1点が出土しており、内田山B 1号墳のほかにも古墳が存在した可能性が高い。

第3トレンチ 長辺18m・短辺8.5m・幅3mを測る「L」字形のトレンチである。上下2層あり、上層では、時期不明の耕作溝を検出した。上層からは弥生時代から近世にかけての土器片や瓦片などが出土した。上層遺構群は、下層のB 1号墳の周溝を最終的に整地したのちに形成さ



第50図 調査トレンチ配置図

れていた。下層ではB1号墳の北東側の周溝SD84を検出した。

第4トレンチ 長辺30m・短辺20m・幅3～6mを測る「L」字形のトレンチである。第3トレンチと同様、上下2層確認した。上層では時期不明の耕作溝を検出し、弥生時代から近世にかけての土器片や瓦片などが出土した。「L」字形の屈曲部でも耕作溝を検出したが、これらに重複して大きく削平された埴輪棺2基を検出した。B1号墳に伴う埋葬施設と考えられる。下層では、B1号墳の埴輪溜まりSX89と周溝SD90をそれぞれ検出した。また、埴輪溜まりSX89の西側で時期不明の直線状の溝を検出しており、古墳の周溝の可能性もある。

(2)内田山B1号墳

①墳丘

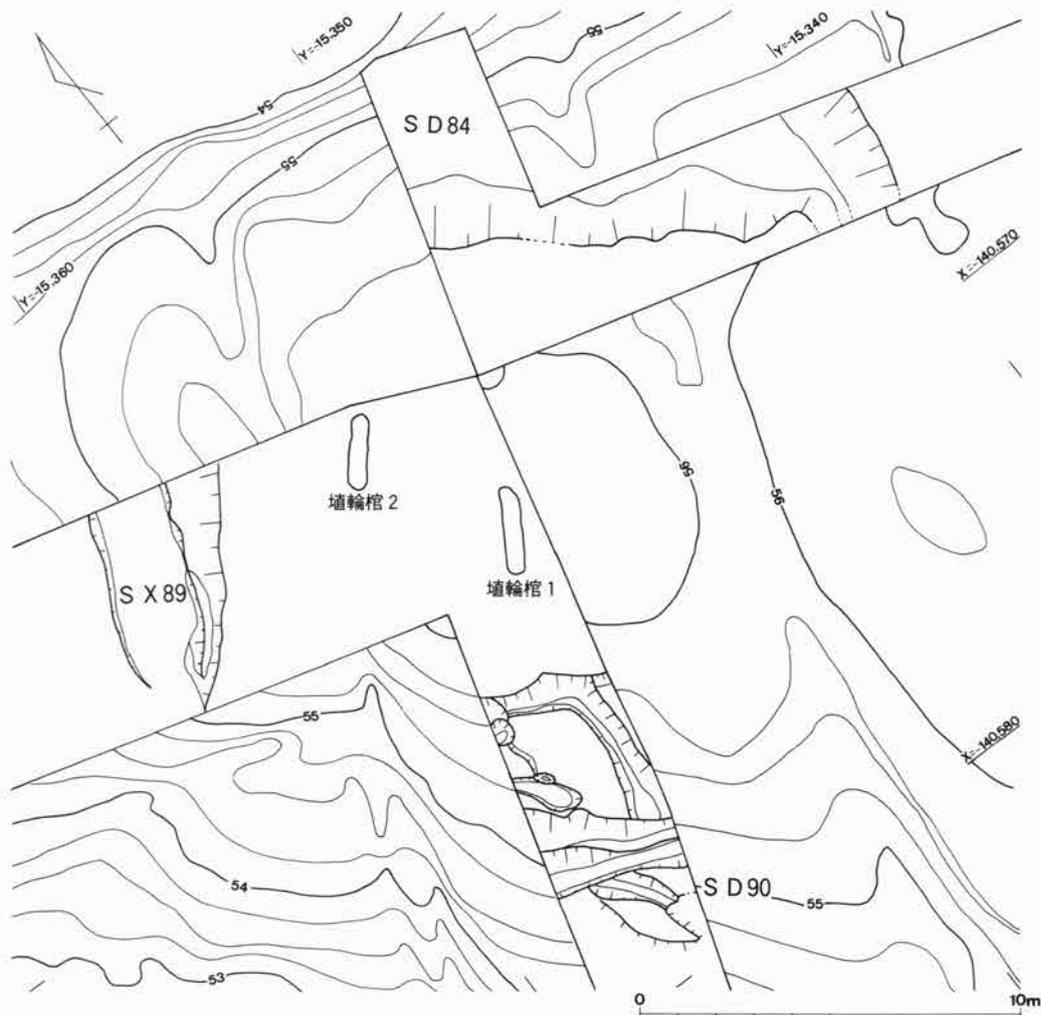
調査前の状況からは直径約20mの円墳と予想されたが、試掘調査の結果、周溝・墳丘裾をそれぞれ検出し、いずれも直線状を呈することから、墳形は方形と考えられる。周溝SD84の東端で「造り出し」もしくは「陸橋」状の高まりを検出したので、B1号墳のコーナーと判断した。検出された遺構から、内田山B1号墳は一辺18m前後の小規模な方墳であることが明らかになった。古墳の主軸はN37°Eを測る。なお、埴輪列・葺石などは検出されなかった。

周溝SD84 その全容は明らかでないが、第3トレンチの大半を占め、墳丘側の肩を長さ12m余りにわたって検出した。外堤側の肩は丘陵上位側において検出したのみである。地形的にみて丘陵上位側のみ掘り割り状の周溝がめぐる可能性が高い。周溝底の標高は54.5mあり、陸橋状を呈する南東端では54.4

mを測る。周溝内からは埴輪片約50～60点が出土したが、いずれも周溝底よりも20～30cmほど浮いており、完形に近い状態に復せるものがほとんどないことから、周溝がある程度埋没したのち、投棄されたか、あるいは流入したものと考えられる。この他、不明鉄製品4点(41～44)がまとめて出土した。これらも周溝底より浮いた状態で出土した。

埴輪溜まり S X 89 トレンチの幅いっぱいには大量の埴輪片が墳丘裾に堆積していたものである。周溝 S D 84同様、大半の埴輪片が周溝底よりも20cm前後浮いた状態で出土したことや、完形に近い状態に復せるものがほとんどないことから、周溝がある程度埋没してから、投棄されたか、あるいは流入したものと考えられる。これらの埴輪片を取り除いたのち、北西辺に伴う周溝を検出した。外堤検出面からの深さはわずか5～10cmほどしかなく、南西端では削平のために検出できなかった。

周溝 S D 90 墳丘が開墾などによって大きく攪乱されていたが、幅1.2～2.5mの溝がトレンチを横切るように検出された。溝からは数点の埴輪片が出土したのみであるが、S D 84・S X 89との位置関係からB 1号墳の南西辺を示すものと考えられる。ただし、周溝底の標高がS D 84・S X 89ともに、54.5m前後であるのに対して、S D 90では53.8m前後と著しく違いをみる。この違



第51図 内田山B 1号墳測量図

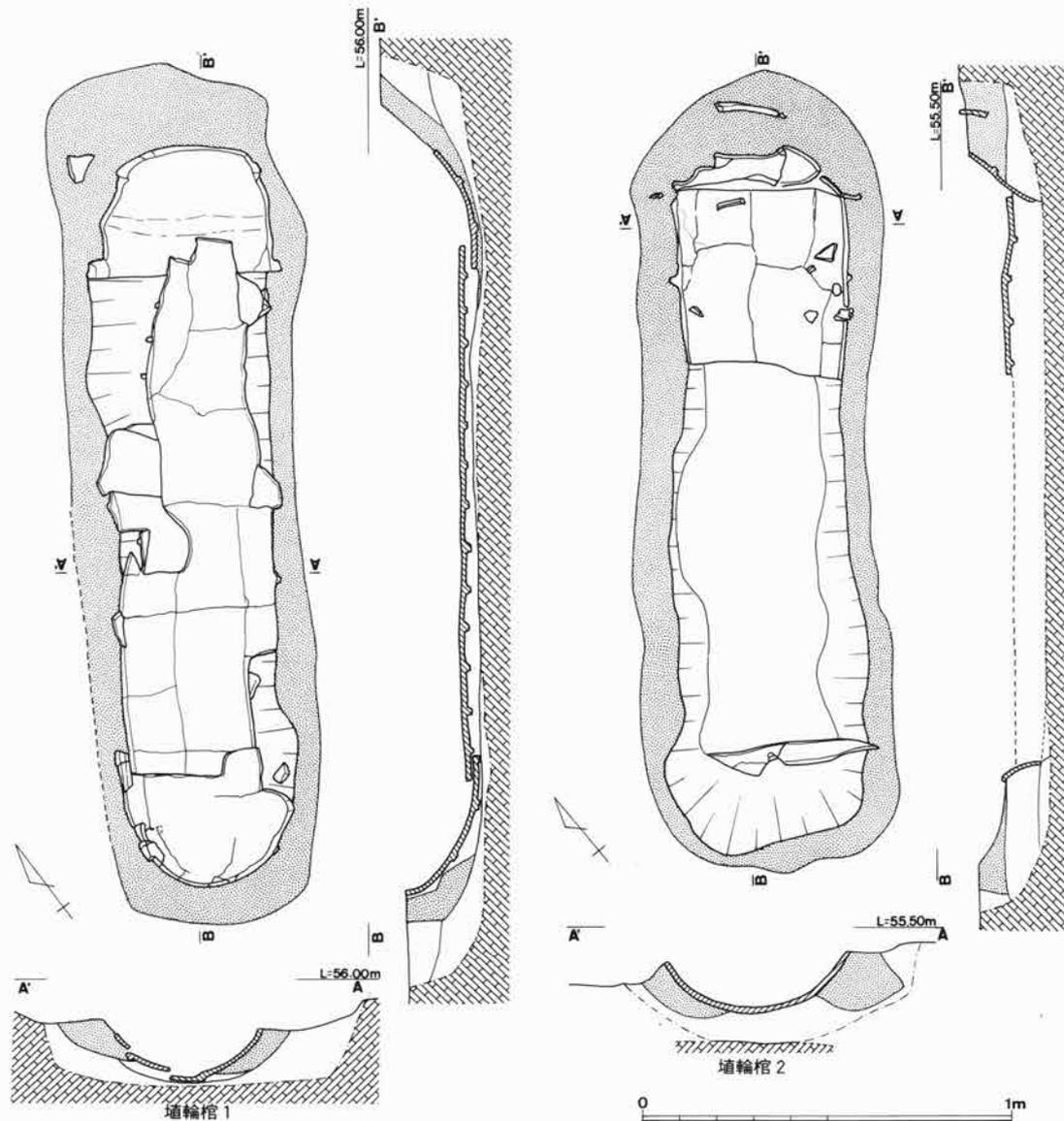
いが何に基づくのかは、今後に予定される本調査の際に明らかにしたい。

②埋葬施設

墳頂部で埴輪棺2基を検出した。ともに耕作などによって上部が大きく削平されており、下部が残存していたに過ぎない。今後、本調査が予定されていることから、埴輪棺の調査は棺の取り上げと墓壙の断ち割りを実施したにとどまり、完掘には至っていない。

埋葬施設としての構造は2基ともほぼ同じであり、断ち割りから次のように考えられる。墓壙を穿ったのち、黄褐色粘質土を置いて棺床とする。次いで埴輪を固定するための黄褐色小ブロック混じり淡青灰色粘土(第52図網掛け部)を墓壙の掘形内側に置いて、埴輪を据える。埴輪の周囲は粘土で囲われる。ただし、粘土が棺上部まで被覆していたかは、削平が著しく不明である。

埴輪棺1 全長2.4m・幅0.6mの墓壙に、特製埴輪棺を納める。特製棺は棺身(10・9)からなる。棺は全長2.0m・残存幅0.53mを測り、専用の蓋で小口部分を閉塞する。埴輪棺1



第52図 内田山B 1号墳埴輪棺1・2実測図

の主軸はN37°Eである。副葬品として管玉・棗玉・白玉などの玉類が約180点出土した。玉類は攪乱が及んでいたため原位置を保っているものはほとんどなかった。

埴輪棺 2 全長2.3m・幅0.7mの墓壇に、普通円筒埴輪を棺身(12)に転用し、朝顔形円筒埴輪の口縁部(11)で小口部分を閉塞する。棺身は後世の耕作などによって南側2/3が抜き取られるなど、攪乱が著しいが、南側の小口部分を閉塞する朝顔形円筒埴輪の口縁部が一部残存していた。残存長0.55m・幅0.48mを測る。埴輪棺2の主軸はN39°Eである。副葬品などはなかった。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器などの土器類・埴輪・玉類・不明鉄製品など、整理箱にして約20箱ある。出土遺物の大半は、B1号墳周溝SD84および埴輪溜まりSX89から出土した埴輪片や、埴輪棺1・2を構成していた埴輪である。以下、出土遺物の種類ごとに報告する。

(1) 土器類

内田山遺跡から出土した土器類は、図示したような小片が大半である。1～5は弥生土器である。1・2は壺の口縁部、3・4は甕もしくは壺の底部、5は壺の底部であろう。小片のため詳しい時期は不明であるが、底部の形状から弥生時代後期と考えられる。6・7は須恵器である。6は杯もしくは碗の底部、7は蓋である。蓋の形状から奈良時代と考えられる。

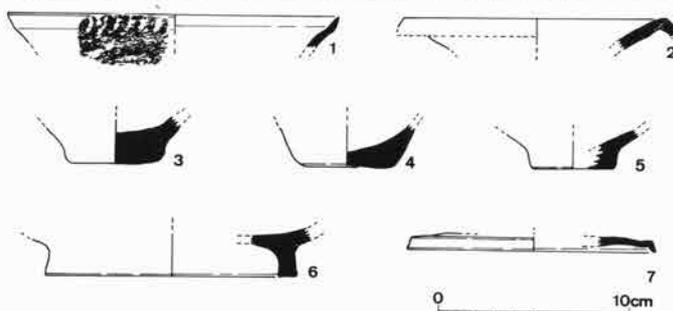
1～5は第1トレンチ、6は第4トレンチ、7は第2トレンチから出土した。

(2) 埴輪類

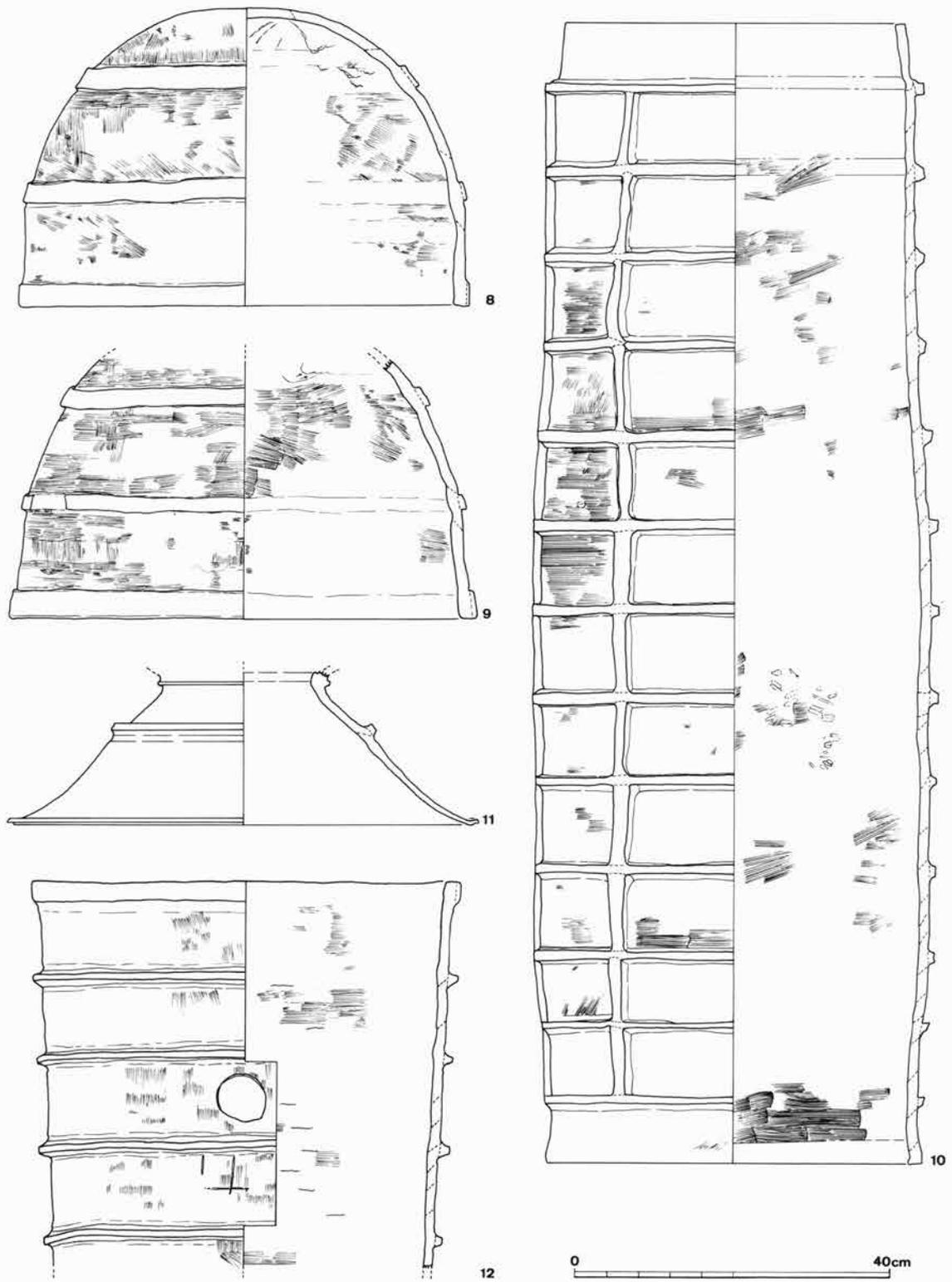
上述のように出土遺物の大半は埴輪類で、埴輪棺1・2を構成していたもののみ図示した。

8～10は埴輪棺1を構成していた特製棺である。8・9は、ほぼ同形同大のドーム形を呈する蓋である。8は口径57cm・全高38cm、9は口径59cm・残存高33cmを測る。外面に幅2～3cm・高さ0.5cmを測る突帯を3条めぐらせる。内面に赤色顔料が塗布されていた。8は南側の、9は北側の閉塞に用いられていた。10は口径43cm・底径47.4cm・全高145.4cmを測る特製棺である。体部中程でやや膨らんでおり、最大径は51.6cmを測る。13条の突帯をほぼ等間隔にめぐらせ、最上段と最下段を除く各段に縦方向の突帯を張り付ける。縦方向の突帯の数は6条に復原される。最上段と最下段に縦方向の突帯をめぐらせないのは、棺身と閉塞用の蓋を結合させる部分とするためである。8～10と類似した特製棺としては、大阪府藤井寺市土師の里8号墳円筒棺墓6出土特製棺などがある。^(註3)

11・12は埴輪棺2を構成していた埴輪である。通常の埴輪を棺に転用したものである。11は朝顔形埴輪で、小口の蓋に転用されていた。口径58cm・残存高19cmを測る。12は普通円筒埴輪で棺身に転用されていた。口径



第53図 内田山遺跡出土遺物実測図(土器類)



第54図 内田山B 1号墳出土遺物実測図(1) 埴輪

8~10: 埴輪棺1 11・12: 埴輪棺2

54.5cm・残存高49.5cmを測る。口縁端部の外縁に幅3cmのやや幅広の突帯をめぐらし、以下ほぼ等間隔に4条の突帯がめぐらされていることが確認できる。上から3段目に円形のスカシ穴、4段目にヘラ記号がある。

(3) 玉類

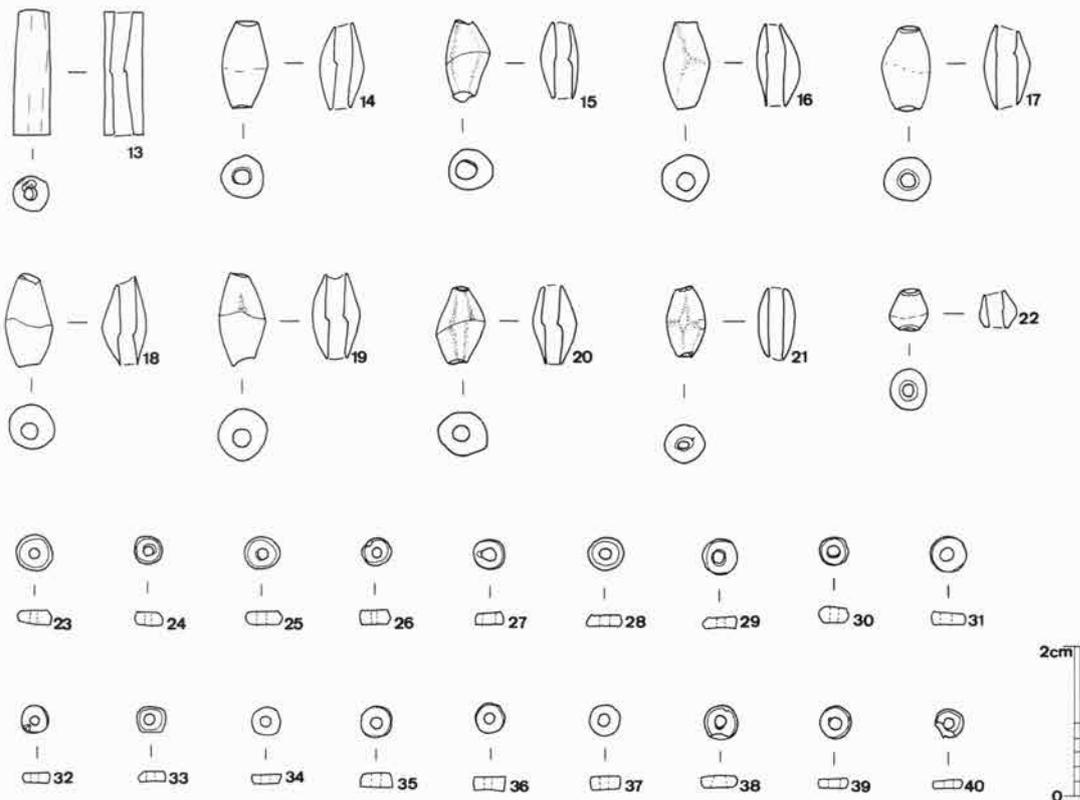
玉類は全て埴輪棺1から出土したものである。出土玉類は管玉1点・棗玉20点・白玉161点のほか、棗玉・白玉の破片が7点前後あり、そのうち28点を図示した。玉類の材質はいずれも滑石である。法量等は第2・3表を参照されたい。

(4) 不明鉄製品

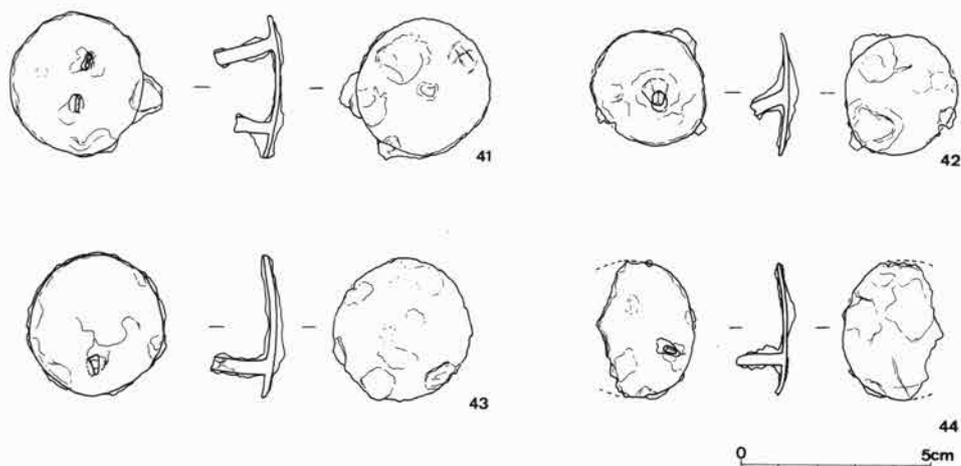
いずれも円板状の鉄板に長さ1.5cm前後の鉾が付く。鉾の取り付け方は錆のために不明である。これらは法量に若干の違いがあり、直径3.5cm前後のもの(41・43)と直径3cm前後のもの(42・44)がある。43・44は欠損しているが、41のように鉾が2本つくと考えられる。42は不明である。

4. 小 結

内田山遺跡では、新たに弥生土器が出土したことから、弥生時代の遺構の存在が想定される。また、第2トレンチで埴輪片が出土したことや、B1号墳の西側で周溝状の遺構を検出したことから、B1号墳以外の古墳の存在も想定される。内田山B1号墳は、一辺18m前後の小規模な方墳であることが明らかになった。木津町東部では、これまでもB1号墳と同規模の小規模な方



第55図 内田山B1号墳出土遺物実測図(2) 玉類(埴輪棺1出土)



第56図 内田山B 1号墳出土遺物実測図(3) 不明鉄製品(周溝S D84出土)

第2表 管玉・棗玉法量表

| 番号 | 種類 | 全長 (mm) | 最大径 (mm) | 色調 |
|----|----|------------|-------------|----------------|
| 13 | 管玉 | 16 | 5 | やや緑がかった暗灰色 |
| 14 | 棗玉 | 11 | 6 | 淡緑がかった灰色 |
| 15 | 棗玉 | 11 | 5.5 | 緑っぽい暗灰色 |
| 16 | 棗玉 | 11 | 6 | 淡緑がかった灰色 |
| 17 | 棗玉 | 12 | 6 | 淡緑がかった灰色 |
| 18 | 棗玉 | 12 | 6 | 淡緑がかった灰色 |
| 19 | 棗玉 | 11.5 | 7 | 青緑っぽい暗灰色 |
| 20 | 棗玉 | 10 | 7 | 青緑っぽい暗灰色 |
| 21 | 棗玉 | 9 | 5.5 | 濃淡のある緑色 |
| 22 | 棗玉 | 5 | 5.5 | 白い斑の入った青っぽい暗灰色 |

第3表 白玉法量表

| 番号 | 種類 | 厚さ (mm) | 最大径 (mm) | 色調 |
|----|----|------------|-------------|------------|
| 23 | 白玉 | 1.5 | 5 | 青緑 |
| 24 | 白玉 | 2 | 4 | 暗緑 |
| 25 | 白玉 | 2 | 5 | |
| 26 | 白玉 | 2 | 4 | 白灰色 |
| 27 | 白玉 | 2 | 4 | 少し青みを帯びた灰色 |
| 28 | 白玉 | 1.3 | 5 | 黒っぽい灰色 |
| 29 | 白玉 | 2 | 5 | 黒 |
| 30 | 白玉 | 2 | 4 | 灰色がかった緑 |
| 31 | 白玉 | 2 | 4 | 黒い灰色 |
| 32 | 白玉 | 1.5 | 4 | 濃緑 |
| 33 | 白玉 | 1.5 | 4 | 暗灰色 |
| 34 | 白玉 | 1.1 | 4.1 | 黒灰色 |
| 35 | 白玉 | 2 | 4.5 | 灰色っぽい薄緑 |
| 36 | 白玉 | 1.5 | 4 | 黒い緑 |
| 37 | 白玉 | 1.8 | 4 | 灰色がかった緑 |
| 38 | 白玉 | 1.8 | 5 | 黒い緑 |
| 39 | 白玉 | 1.5 | 4.2 | 灰色がかった緑 |
| 40 | 白玉 | 1.3 | 4 | 黒っぽい緑 |

墳が多数検出されており、今回は新たな1例を加えることになった。築造時期も、出土した埴輪片から、古墳時代中期前半頃と考えられる。しかし、約180点を数える玉類が出土した点については、これほど多くの玉類が埴輪棺から出土した例がなく、検討を加えていく必要がある。

(筒井崇史)

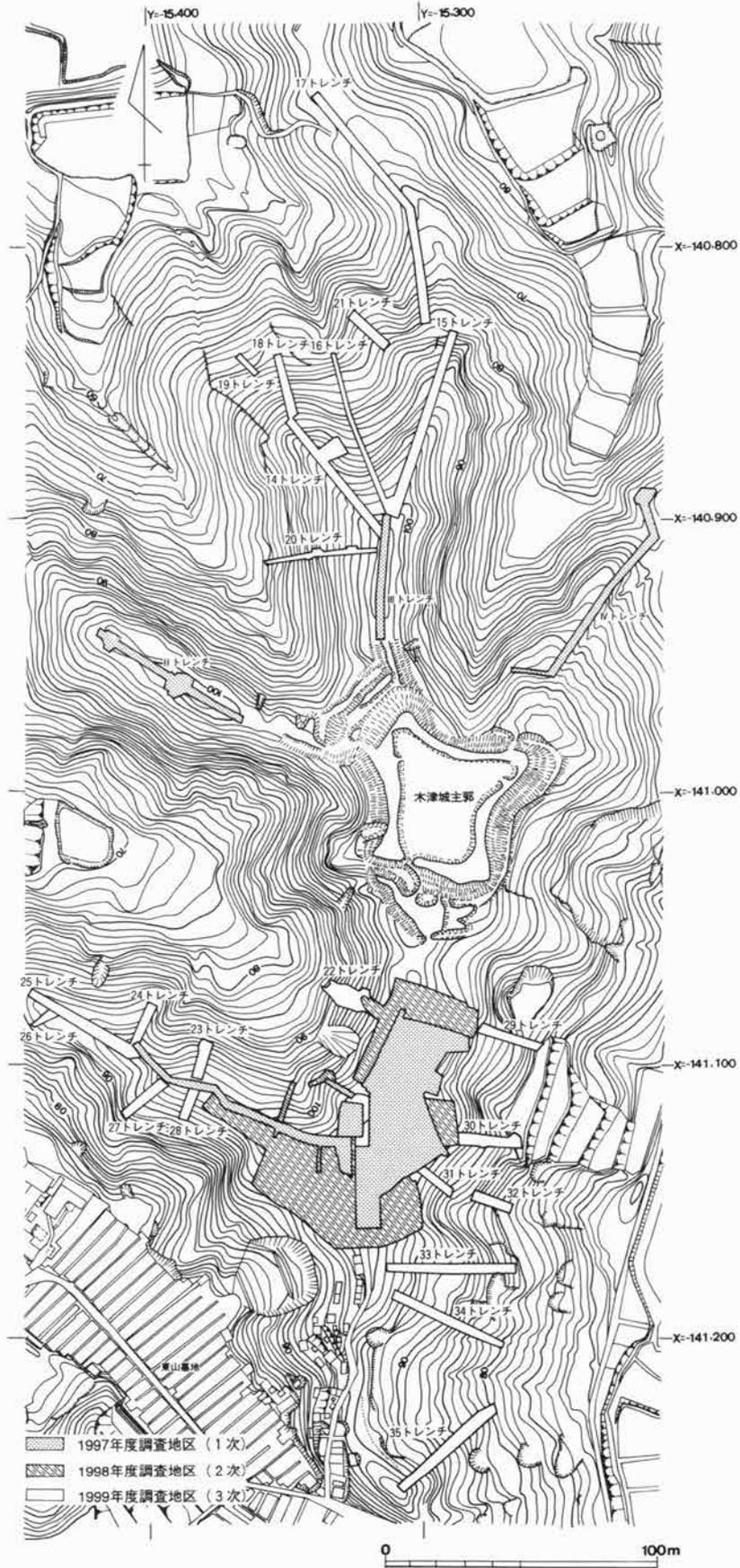
(2)木津城山遺跡

1. 調査の概要

当遺跡では、これまでの調査で弥生時代の竪穴式住居跡や方形台状墓などの遺構を検出している。これらの調査成果によって、遺跡の範囲がさらに広がることが予想されたため、試掘トレンチを北地区で8か所、南地区で14か所設定した(第57図)。

(1)北地区(第58図)

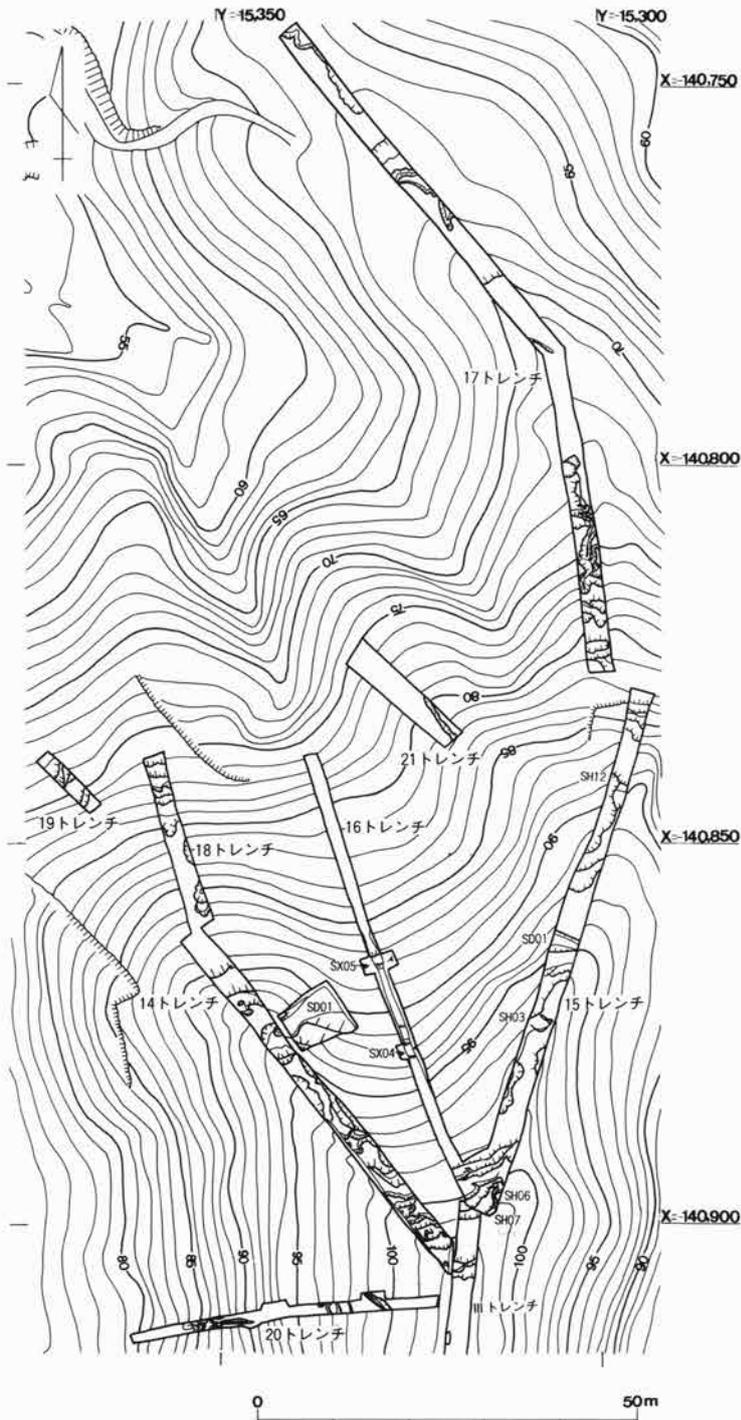
平成9年度に北地区で試掘調査をしたⅢトレンチの北辺で弥生時代後期の土器が出土したことをうけて、同トレンチの北に派生する2本の支尾根に2か所の試掘トレンチを設定して、西側支尾根を14トレンチ、東側支尾根を15トレンチとした。つぎに、14トレンチの延長では、表面観察でテラス状地形の認められる2か所に、東側支尾根の15トレンチの尾根筋で1か所、16トレンチの谷筋では、トレンチを延長し、木津の平野部を望む調査地の西斜面に1か所トレ



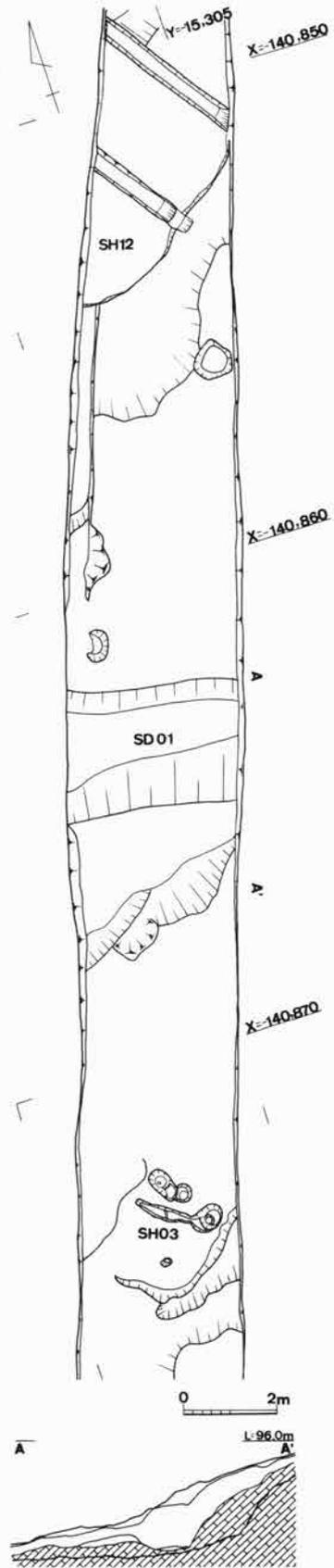
第57図 木津城山遺跡トレンチ配置図(1/2,500)

ンチを設定した。さらに、16トレンチと17トレンチの間の枝尾根に1か所トレンチを設定した。

14トレンチ(第57・58図・図版第43) 標高94~95mの地点で幅約5m、尾根側での深さ約1.5mを測る尾根切の溝SD01を検出した。溝の埋土からは、弥生時代後期の土器が出土した。この溝は当初、尾根の先端部を切断して構築した古墳の溝か、あるいは

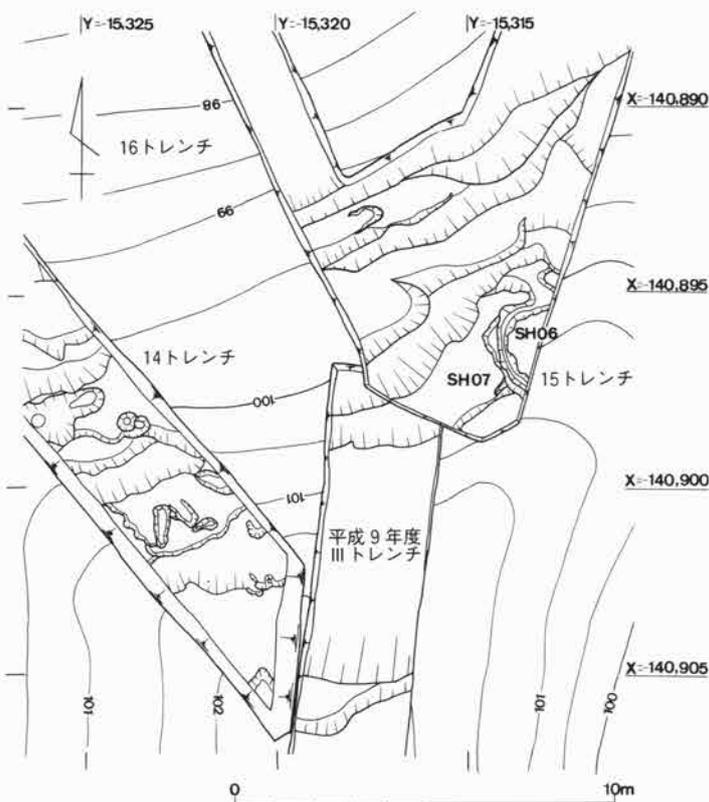


第58図 北地区遺構配置図(1/1,000)



第59図 15トレンチ中央付近遺構配置図(1/150)

木津城山の中世城郭関連遺構とも考えられたが、マウンド状の高まりの調査によって、古墳ではないことが判明した。この構造を確認するため東の谷側に拡張を行った結果、尾根側では、約45°で5mの斜面を削り出しており、この崖面には、拳大から人頭大までの円礫の露頭を検出した。調査トレンチ上位の標高97～102mでは、3段のテラス状地形の埋没が、丘陵の鞍部であるにもかかわらず、現地表下約1.2mで検出された。テラス状地形を検出した直上の埋土中からは、弥生時代後期の加飾壺、甕(26)、高杯(28・29)などが出土した(第66図)。



第60図 14～16トレンチ南端付近遺構配置図(1/200)

15トレンチ(第58～60図・図版第

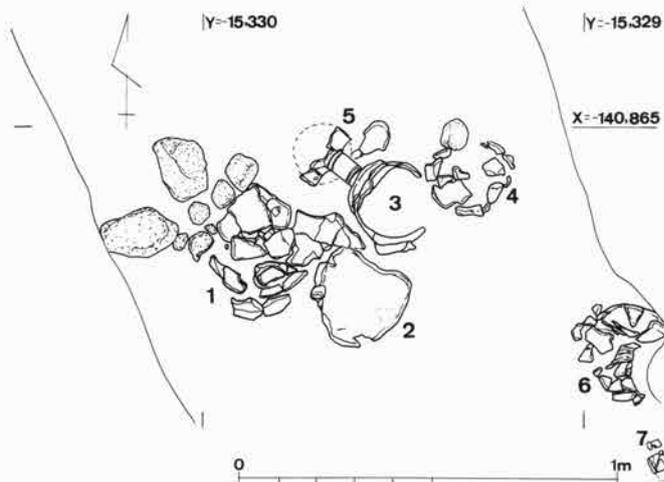
44) 標高94～96mの地点で幅約3m、尾根側からの高さ約3mを測る崖と地山を削り込んだ幅約1.5m・深さ約0.5mの溝を検出した。丘陵側の崖面には、拳大から人頭大までの円礫の露頭が認められ、崖の埋土からは弥生時代後期の土器(第66図27)を出土した。検出した溝は、地形からみて、14トレンチの溝SD01に連続すると考えられ、一連の遺構の検出状況から、この溝は、弥生時代に掘削されたものとするのが妥当と判断するに至った。

崖の上面では、標高約97mの地点で平面プランが隅丸方形と考えられる竪穴式住居跡SH03を検出した。丘陵の上部側を約0.7m掘削し、住居の平坦面を確保しており、残存する床面の幅は、丘陵の裾に向かって約2.3m、丘陵に平行する側で3.5m程度を測る。床面のコーナー付近では、直径約20cmの柱穴と、住居の中央寄り直径約50cm・深さ約30cmを測る二段構造のピットと、このピットから丘陵の裾部側に向かって延びる幅約20cmの溝を検出した。この住居の出土遺物としては、柱穴横の床面から小型の鉢(第66図30)を1点と弥生土器小片などが出土した。

調査トレンチ南端の標高99～100mの地点では、竪穴式住居跡SH06・07を検出した。SH06は、直径約3.0m程度の小さいもので、周壁構の幅20cmを測る。周壁構内より弥生土器(第66図31)を出土している。SH07は、SH06によって東側の辺を約30cm程度削平されているが、平成9年度調査で検出している部分を含めると等高線に平行する幅が約5.0mのテラスの残存を測る。

調査地の中位で検出した溝SD01の北でも、竪穴式住居跡と考えられる丘陵側を削り出したテラスSH12を検出した。

16トレンチ(第58・60・61図・図版第45) 14トレンチ・15トレンチに連続する崖面と谷側のテ



第61図 16トレンチSX05実測図(1/20)

土器は、西側に壺が2個体(第66図1・2)、中央で甕をのせたまま倒れた状態で高杯(5)の杯部が南東を向きに倒れており、その上に甕(3)が同じく口縁を南東に向け出土した。この甕の東には口縁を北西に向けた甕(4)が倒れており、割れた破片が南東の高杯のそばまで広がっていた。南東部で検出した高杯(6)は、基底部がこれらの甕より少し高い位置にあり、北に向かって倒れていた。この高杯の脚部南で小型壺(7)が出土した。このトレンチの北への延長、標高下部では包含層は認められるが、明確な遺構は検出していない。

17トレンチ(第58図・図版第45) 標高71mの地点で直径約1.8mの円形土坑1基と、南北約1.7m・東西3.0m以上の掘形を持つ長方形土坑1基を検出したが、土坑内からは遺物が出土しておらず時期は不明である。このほかには、地境溝などを検出しているものの弥生時代の集落遺跡の存在を示すような遺構などは検出しておらず、城山遺跡の弥生遺跡の範囲外と考えられる。

18・19トレンチ(第58図) 17トレンチ同様、調査の結果、テラス状の地形を検出したものの、出土遺物がないため明確な遺構の広がりを確定できない。

20トレンチ(第58図) 標高98~99mのテラス状の地形で、尾根側からの崩落と考えられる弥生土器片と、17世紀後半から18世紀にかけての丸瓦と1800年代のカンテキが出土した。また、標高93~95mで拳大の円礫を露頭する地山を検出した。この状況は、14・15トレンチで検出した環壕SD01の崖面の状況と同じである。

21トレンチ(第58図) 15トレンチから派生する小さな尾根状の地形が周辺の伐採により確認されたため、遺構の有無を確認するために設けた小トレンチである。調査の結果、包含層中より須恵器(壺底部か)が出土したが、古墳等の明確な遺構は検出しなかった。

(2)南地区

平成9・10年度に面的な調査を行っており、今年度はその調査区の周囲に第22~35トレンチの14か所を設定した。

22トレンチ(第62・63図・図版第46) 標高約95mのテラス部の上下で2段の崖面を検出した。さらにテラス部で、幅約3.1m・深さ約0.6mを測る断面「U」字形の壕SD18を検出した。溝底

ラス部分で壺・甕・高杯を置いた遺構SX05を検出し、崖の上面で同じく土器を置いた遺構SX04を検出した。

SX05は、土器の集積を確認した段階で、テラス部の左右に拡張を行い掘形などの検出に努めたが、果たせなかった。東西幅約1.5m・南北幅約1.0mの範囲に土器が並べて置かれた状態であった。検出した土器の周りには、拳大から人頭大の河原石が並べられた状態で検出された。

から約3.0mを人工的に盛土しており、その上面には、平成10年度に検出した焼土が厚く堆積する部分S X91が広がっている。S X91の上面では、幅約0.8m程度の等高線に並行する曲輪状のテラスが北の中世城郭の堀切の裾に向かって延びる。このことは、今回検出した高さ約3.0mの人工的な盛土の構築時期を考える上できわめて示唆的である。

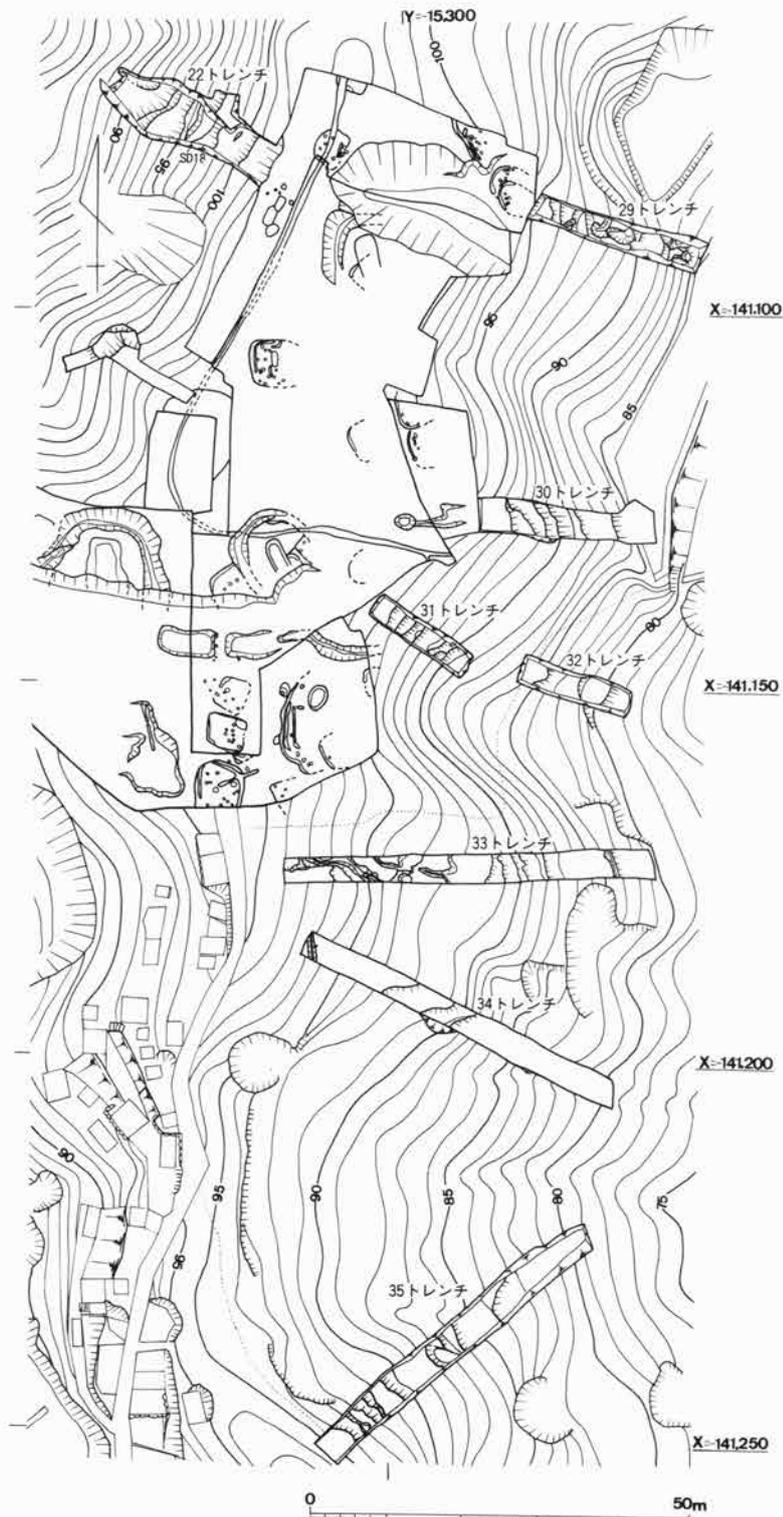
下位で検出した崖面は、下端を検出していないものの、北地区で検出したS D01の状況と似ており、人頭大の礫の露頭が認められる。

23～28トレンチ(第64図・図版第46・47) 丘陵の西尾根および斜面に設定した調査区である。これらの調査区では、環壕に関わると考えられる崖面の削出し上部を検出している。

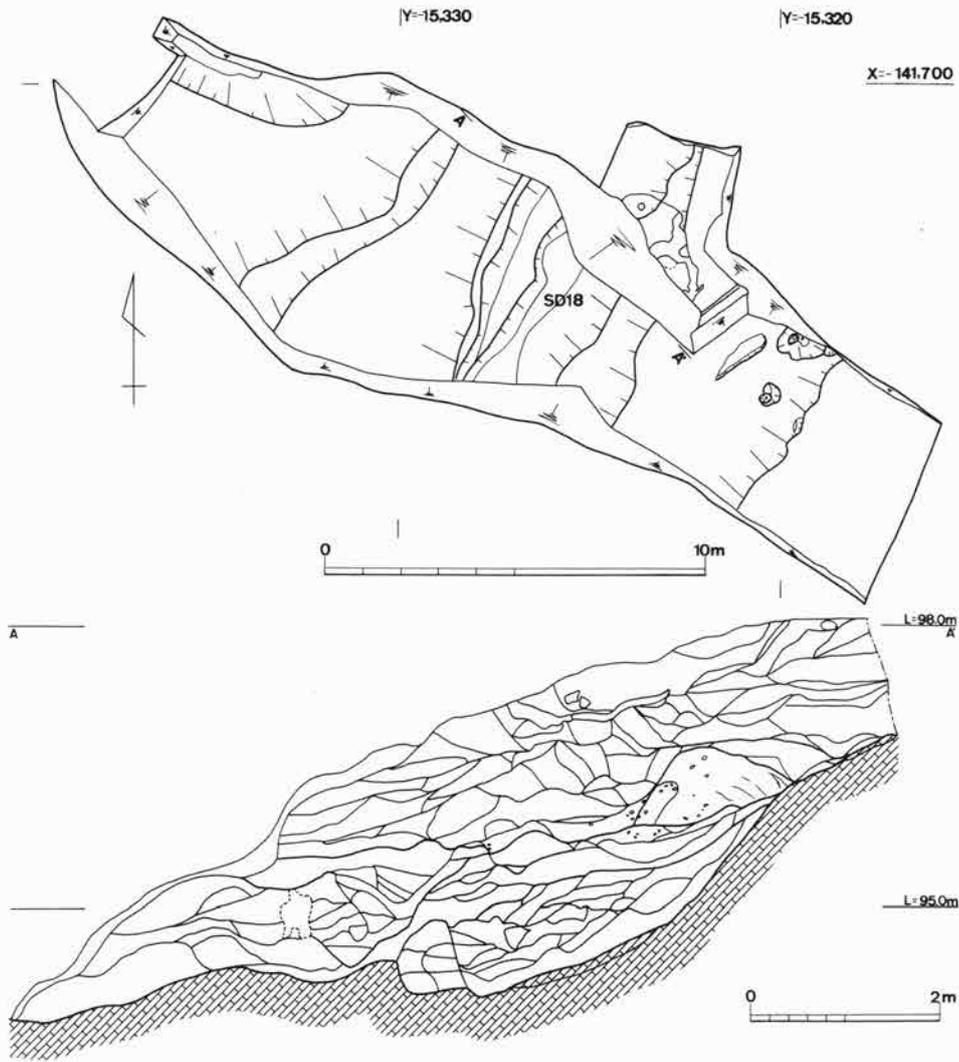
23トレンチでは、標高96～97mの地点で丘陵稜部から約1.5m掘削した住居状テラスを検出した。27トレンチでは、標高99m付近で丘陵稜部から約0.3m掘削した住居状テラスS X19を検出した。また、南端崖面の埋土中からは、弥生土器壺(第66図32)、甕(34)、ミニチュア壺(33)などが出土した。

29～31・33～35トレンチ(第62図・図版第47・48) 丘陵東斜面に設定した調査区であり、標高85～90m付近で岩盤の露出する崖面の削出しと、その裾部で幅1.5～2.0mのテラスを検出した。

環壕関係以外の遺構としては、34トレンチの標高97m付近



第62図 南地区遺構配置図(1) (1/1,000)



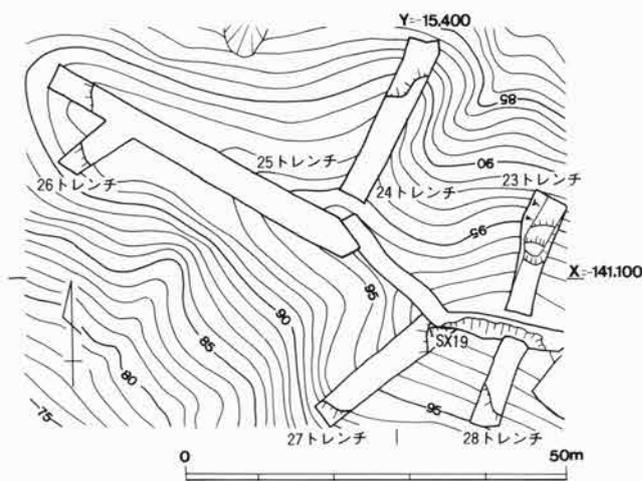
第63図 22トレンチ実測図(1/80)および土層堆積図

で、幅約0.5m・深さ約0.3mを測る溝SD16を検出した。溝内からは上面で須恵器、下面から弥生土器を出土した。

2. 出土遺物(第65・66図・図版第51・52)

今回の調査で出土した遺物には、弥生時代後期の土器、古墳時代終末期の須恵器、近世の瓦、カンテキ(七輪)などがある。

弥生土器は、調査区のはほぼ全域から出土しており、なかでも16トレンチの



第64図 南地区遺構配置図(2) (1/1,000)

テラス状遺構 S X 05からは、完形の壺 2 個体、甕 2 個体、高杯 2 個体と小型壺 1 個体を出土し、同じく S X 04からも同種の土器がまとまって出土した。

S X 05から出土した土器は、丘陵上の遺跡から出土した土器としては保存状態が良く、南山城で資料の少ない弥生時代後期の土器として貴重なものである。

壺 1 は、口径13.5cm・器高29.5cm・最大腹径24cmを測る。2 は、口径15.6cm・器高30cm・最大腹径27.5cmを測る。口縁端部を下方に拡張し、その端面には円形浮文を施す。頸部には断面三角形の突帯を貼り付ける。いずれの壺も、外面の下半にはハケメ調整を残し、上半部に縦方向にヘラミガキを施している。

甕 3 は、頸部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、口径15.8cm・器高22.9cm・最大腹径20cmを測る。4 は、口縁部が外反気味に立ち上がり、端面を下方に強くつまみヨコナデを施しているため、端面がくぼむ。口径15.3cm・器高25.3cm・最大腹径20.4cmを測る。いずれの甕も、内外面にハケメ調整を施し、口縁部外面は、ヨコナデにより仕上げる。

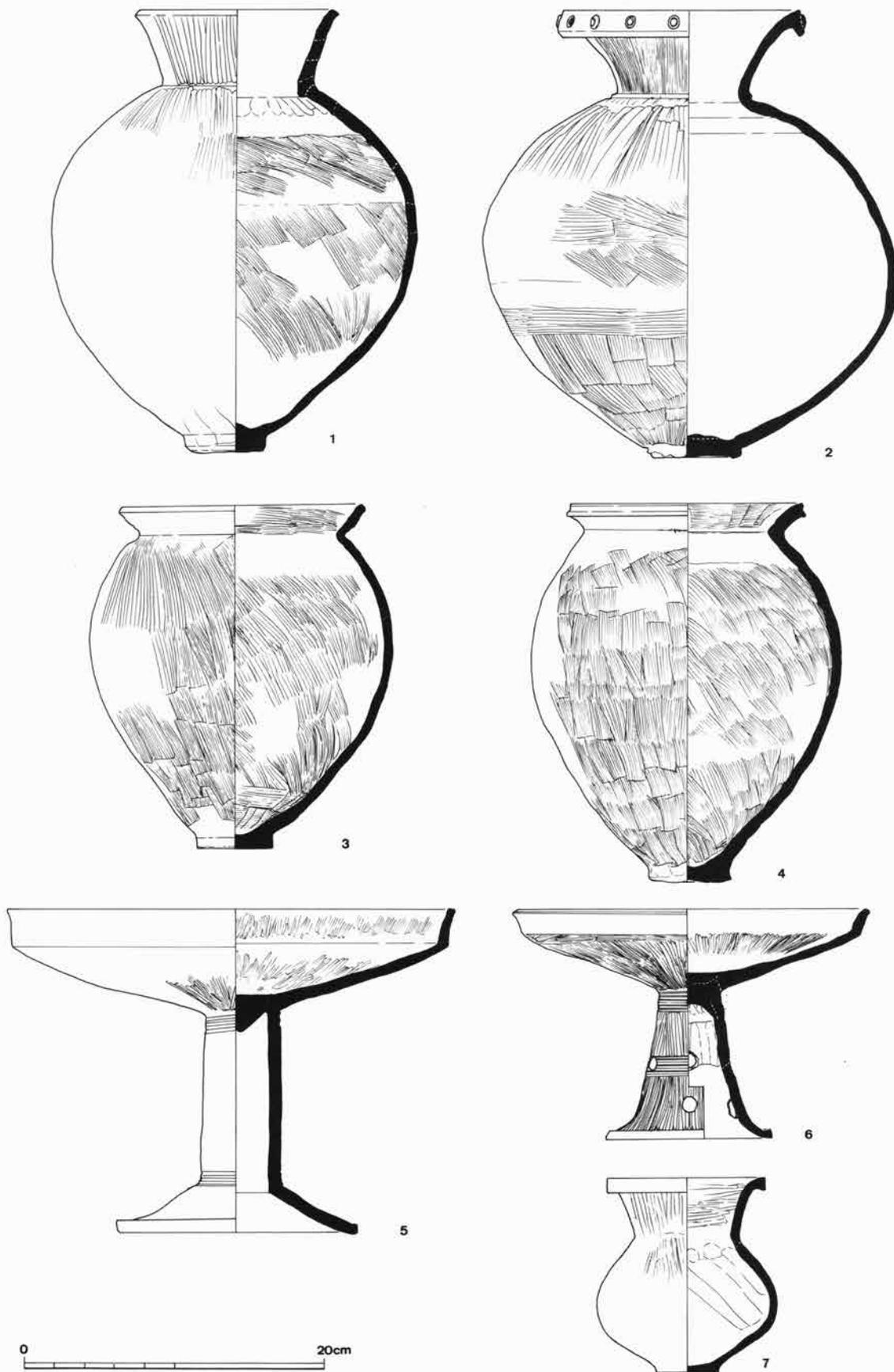
高杯 5 は、皿形の杯部に柱状の脚を持ち、杯部の口径29.8cm・器高21.6cm・脚裾部径15.8cmを測る。脚部の上下には、ヘラによる沈線 3 条を施している。また、脚裾部には 2 個一対の穿孔を 3 か所に施す。6 は、皿形の杯部にゆるやかに開く脚を持ち、杯部の口径23.7cm・器高15.3cm・脚裾部径11cmを測る。脚柱の上端と中程には、櫛描の沈線を 6 条施し、中位と下位の 2 段に、各 3 か所の穿孔を施す。いずれの高杯も、杯部内面と外面には縦方向のヘラミガキを施している。

小型壺 7 は、器全体が赤褐色を呈する赤い土器である。口径10.4cm・器高13.3cm・最大腹径12cmを測る。口縁端部を下方に拡張し、面をもたせる。調整は、口縁部内面を横方向にヘラミガキを施し、外面の上半部に縦方向のヘラミガキを施している。

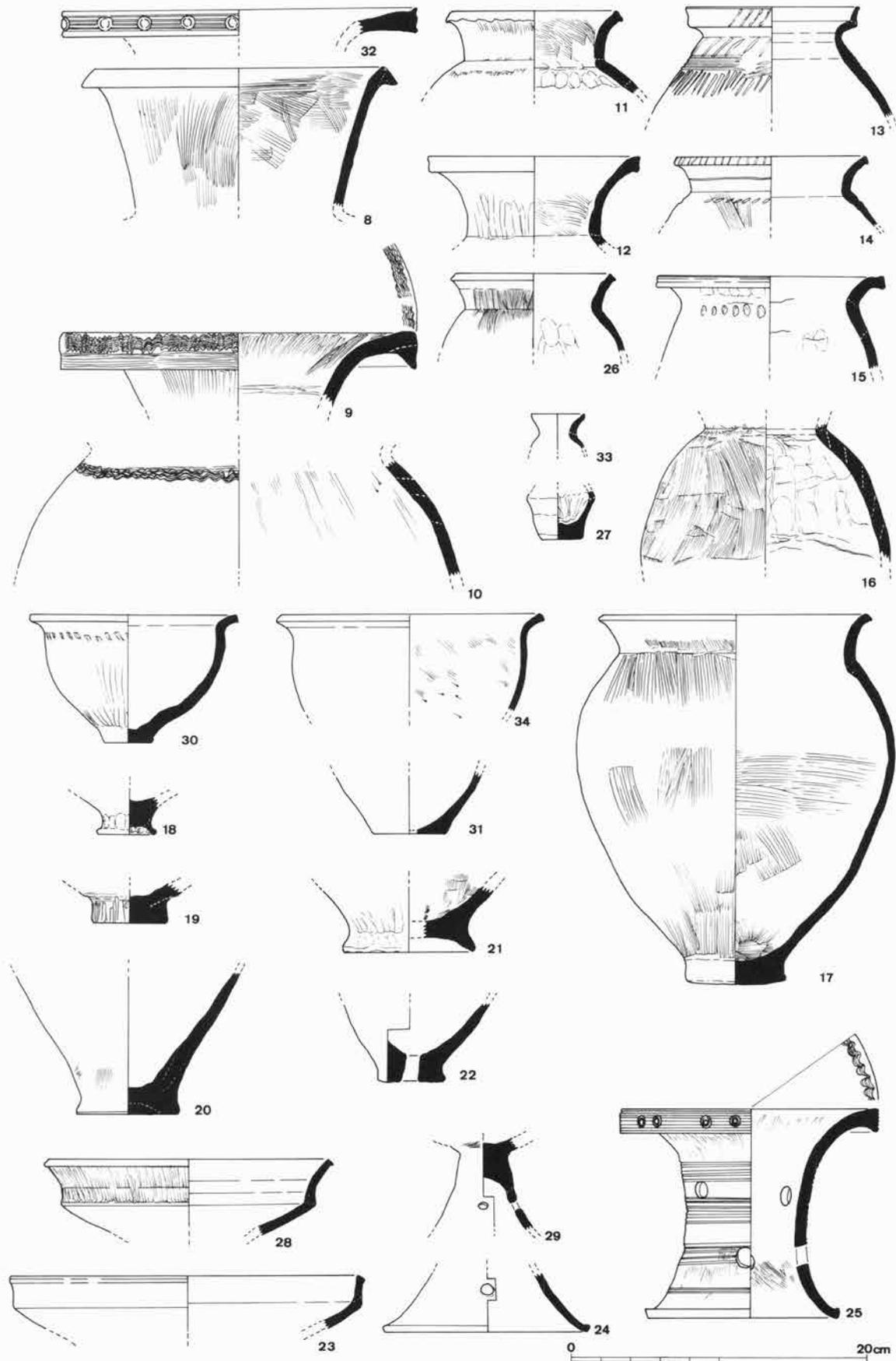
S X 04から出土した土器は、S X 05のそれと比べ器種の構成や個体数は多いが、保存状態が悪かったために完形に復原できるものは少ない。

壺では、口縁端部に粘土紐を貼り付け、外上方に開く面を作るもの(第66図8)や、口縁に対し垂直な面を持つもの(12)、垂下させる端面とその上面にクシ描の波状文を施すもの(9)、肩部にクシ描の波状文を施す体部(10)などがある。調整では、加飾の壺 9 が口縁の内外面に縦方向のヘラミガキを施しているのに対し、8・12では、内面にハケメ調整を施す。甕では、口縁部に刻み目を施し、頸部に列点文を施すもの(14)や、同じく頸部に指もしくは棒状工具による刺突を施すもの(15)などがある。13は、近江系の土器で、口縁部外面に櫛による刺突文と肩部に同じ工具による沈線文を施している。完形に復原した甕(17)では、S X 05出土甕と内面調整の中位ヨコハケを施す点で違いが認められる。高杯では、接合しないが皿状の杯部(23)とゆるやかに開く脚部(24)がそれぞれ出土している。器台(25)は、口径17.6cm・器高14.8cm・裾部径12.8cmを測る。口縁部端面に擬凹線と円形浮文に竹管による押圧を施し、口縁上面に櫛描き波状文、筒部の上下には、擬凹線を 4 帯施している。また、筒部には上下 2 段に穿孔を施す。

鉢は、15トレンチ S H 03から出土している。口径14.4cm・器高8.8cmを測る。内湾する体部に大きく開く口縁部を持つ。頸部に棒状工具による刺突を施す。調整は、内面なでナデ、外面縦方



第65図 木津城山遺跡出土遺物実測図(1)



第66図 木津城山遺跡出土遺物実測図(2)

8~25(16tr. S X04) 26(14tr) 27(14tr. S D01) 28-29(14tr) 30(15tr. S H03) 31(15tr. S H06) 32~34(27tr)

向がヘラミガキで仕上げられている。

この他、図示しなかった遺物として20トレンチで出土したカンテキがある。これは、1800年頃の製品で、吸気の窓の部分には、「三河名産 製造組合 大楠増太郎」の刻印が認められる。

3. 小 結

本年度は、集落の範囲を示す環壕を確認するための調査を中心に行った。

城山遺跡の北地区では、丘陵の鞍部にあたる14・15トレンチで、環壕・竪穴式住居跡4基とその造成面と考えられる4段のテラス状地形を検出した。また、谷部にあたる16トレンチでは、環壕の崖面と、その上下のテラス部分で祭祀遺構と考えられるSX04・05を検出した。南地区では、丘陵の東斜面で、岩盤の露頭する崖面の削り出しと、その裾部でテラスを検出した。さらに西斜面では、23・27トレンチで、竪穴式住居跡の造成面と考えられるテラス状地形を検出するなどの成果もあったが、全体としては崖面の削り出しを検出しているものの、下面のテラスや堀切が想定される位置が調査地外になっており、検出するには至っていない。また、遺跡の南端についても、調査地周辺の諸条件により明確な遺構を確認していない。ただ、各トレンチで岩盤の露頭上面より弥生土器の包含層を検出していることにより、集落を取り巻く崖面の削り出しや尾根切りが南地区でも施行されていたと考えられる。これらの調査成果から木津城山遺跡では、山を構成する地層である大阪層群のうち、勾配の急な斜面で、岩盤の露頭する地層を選択し、崖面を掘削したと考えられる。この崖状遺構の検出によって、木津城山遺跡の範囲をほぼ確定できると考えられる。また、ここ数年の調査では、7世紀の古墳を切った崖面の検出など一定の成果はあったものの中世山城に関する明確な資料を得ていない。これは、当時期の遺物が全くと言っていいほど出土していないことにもよるが、主郭部分が保存されることになったことにより、その構造と周辺部の関係が追求できないことが大きく影響している。22トレンチで検出した盛り土は、木津山城の主郭造成との関わりが考えられるものであるが、今後は、主郭部の精密な地形測量を行い、検出遺構との関連を追及したいと考えている。

(戸原和人)

注1 伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注2 調査参加者は次の通りである(順不同・敬称略)。

飯塚里絵・井上 聡・久田 亨・陸田初代・五島梨恵・小牧健太郎・坂手華子・迫越佐登己・佐々木公平・清木寛史・田中美和子・塚田高史・筒井由香・土井 司・長井謙治・榎本順子・西村香代子・萩谷良太・林 益美・原田美友紀・福井紘子・福島 緑・松尾洋次郎・松田早映子・宮崎敦・室林由香・森川敦子・山内基樹・山口良太・山岡匠平・山田三喜子・山名郁代・吉永清美

注3 天野末喜・中西康裕ほか『土師の里8号墳』(『藤井寺市文化財報告』第11集 藤井寺市教育委員会) 1994

圖 版

図版第1 下植野南遺跡

(1)下植野南遺跡 全景（東から）



(2)下植野南遺跡 Gトレンチ
調査区全景（東から）



(3)下植野南遺跡 F-2トレンチ
調査区全景（北から）



図版第2 下植野南遺跡



(1)下植野南遺跡 SB79 (南から)



(2)下植野南遺跡 SH55・56
(北から)



(3)下植野南遺跡 SH54
(南東から)

図版第3 下植野南遺跡

(1)下植野南遺跡 Gトレンチ
方形周溝墓群 (北東から)



(2)下植野南遺跡 S T66完掘状況
(南東から)



(3)下植野南遺跡 S T73完掘状況
(北から)



図版第4 下植野南遺跡



(1)下植野南遺跡 S T85出土遺物
(北から)



(2)下植野南遺跡 F-2 トレンチ
方形周溝墓群 (東から)



(3)下植野南遺跡 F-2 トレンチ
方形周溝墓群 (南から)

図版第5 下植野南遺跡

(1)下植野南遺跡 Hトレンチ
全景（北から）



(2)下植野南遺跡 Hトレンチ
全景（東から）



(3)下植野南遺跡 Hトレンチ
S R08（北から）



図版第6 下植野南遺跡



(1)下植野南遺跡 Hトレンチ
S D13・S E11 (北から)



(2)下植野南遺跡 Hトレンチ
S D22 (東から)



(3)下植野南遺跡 Hトレンチ
墨書人面土器出土状況 (東から)

図版第7 算用田遺跡

(1) I K 32 (算用田遺跡) 調査地
全景 (完掘段階・西南西から)

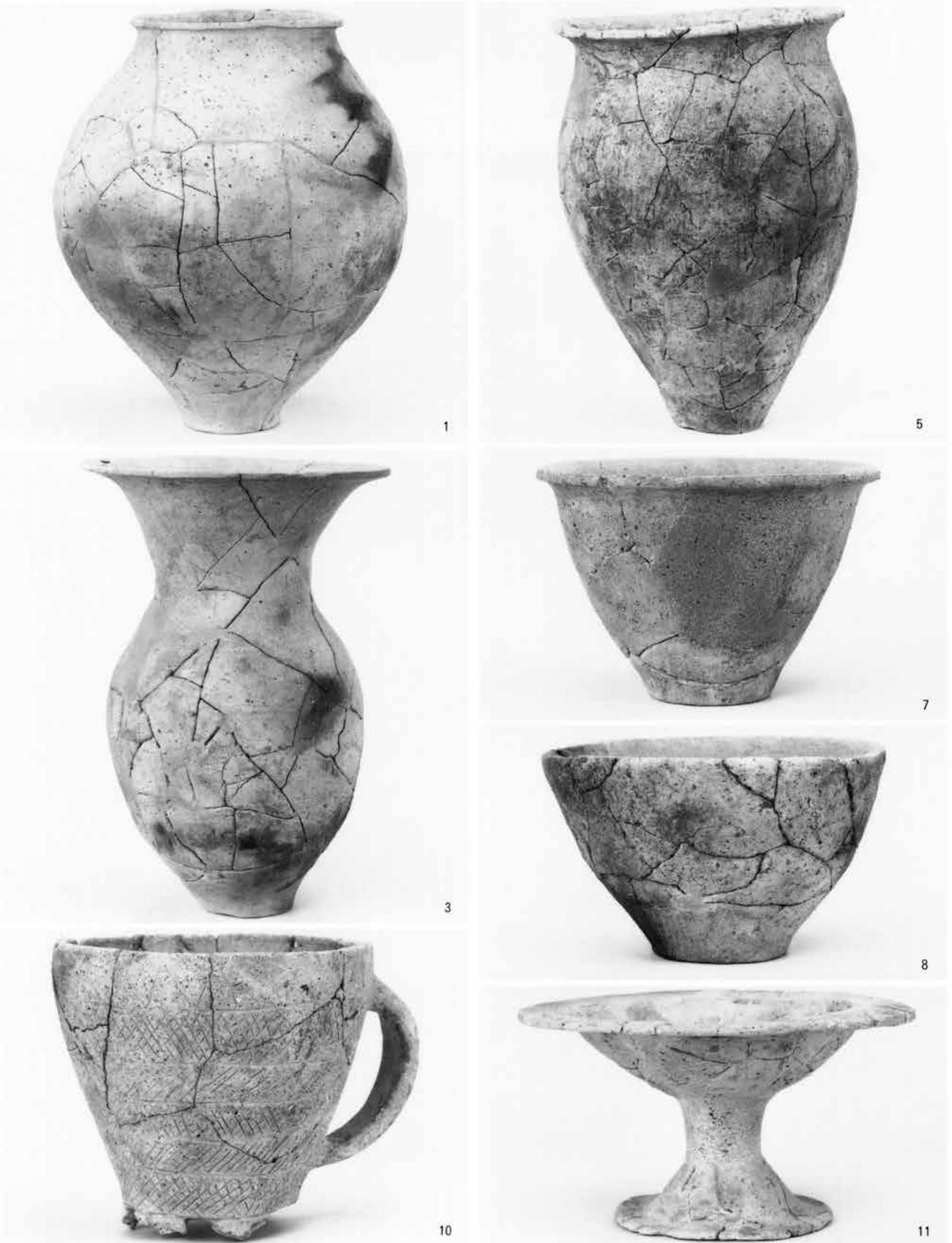


(2) I K 32 (算用田遺跡) 1トレン
チ遺構検出状況 (第1遺構面・
西南西から)



(3) I K 32 (算用田遺跡) 1トレン
チ遺構検出状況 (第2遺構面・
西南西から)







16



24



26



38



41



63



64



17



25



34



42



66



68



69



67



70



75



77



71

(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Aトレンチ完掘状況（西から）

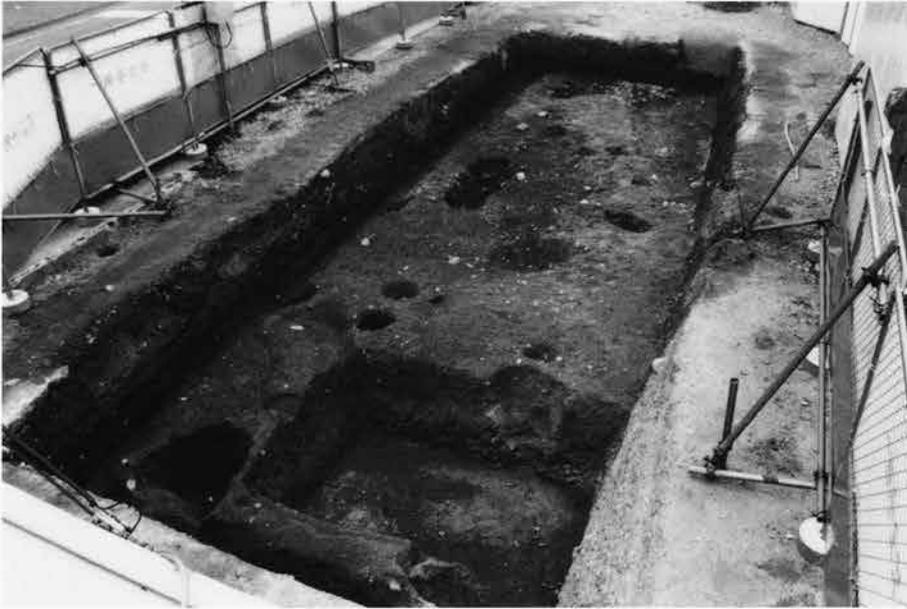


(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Aトレンチ完掘状況（北東から）



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Aトレンチ掘削風景（西から）





(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Bトレンチ完掘状況（北東から）

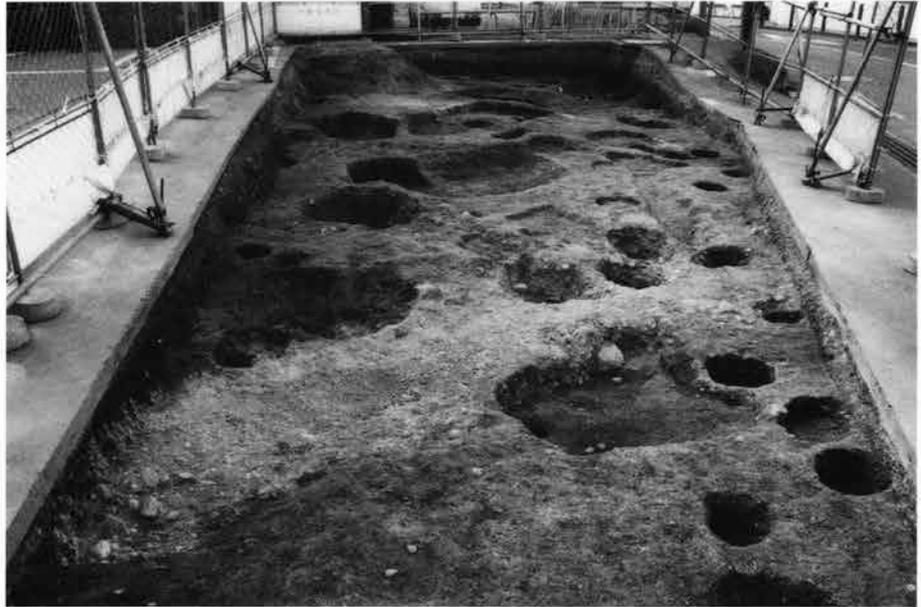


(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Bトレンチ完掘状況（西から）



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Bトレンチ土層堆積状況
（北東から）

(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ完掘状況（北東から）



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ掘削状況（北東から）



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK12掘削状況
（北東から）





(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ S K09完掘状況
(北から)



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ S K03完掘状況
(北から)



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ S K02完掘状況
(北から)

(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ S K07完掘状況
(南から)



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ S K07埋土の状況
(北から)



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Cトレンチ S K06完掘状況
(西から)





(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチS K04検出状況
(東から)



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチS K04掘削状況
(北西から)



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチS K02掘削状況
(南東から)

(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK04瓦検出状況
(北東から)



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK04瓦検出状況
(南西から)



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK04瓦検出状況
(北東から)





(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK04瓦検出状況
(北東から)



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK04瓦検出状況
(東から)



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
CトレンチSK04瓦検出状況
(真上から)



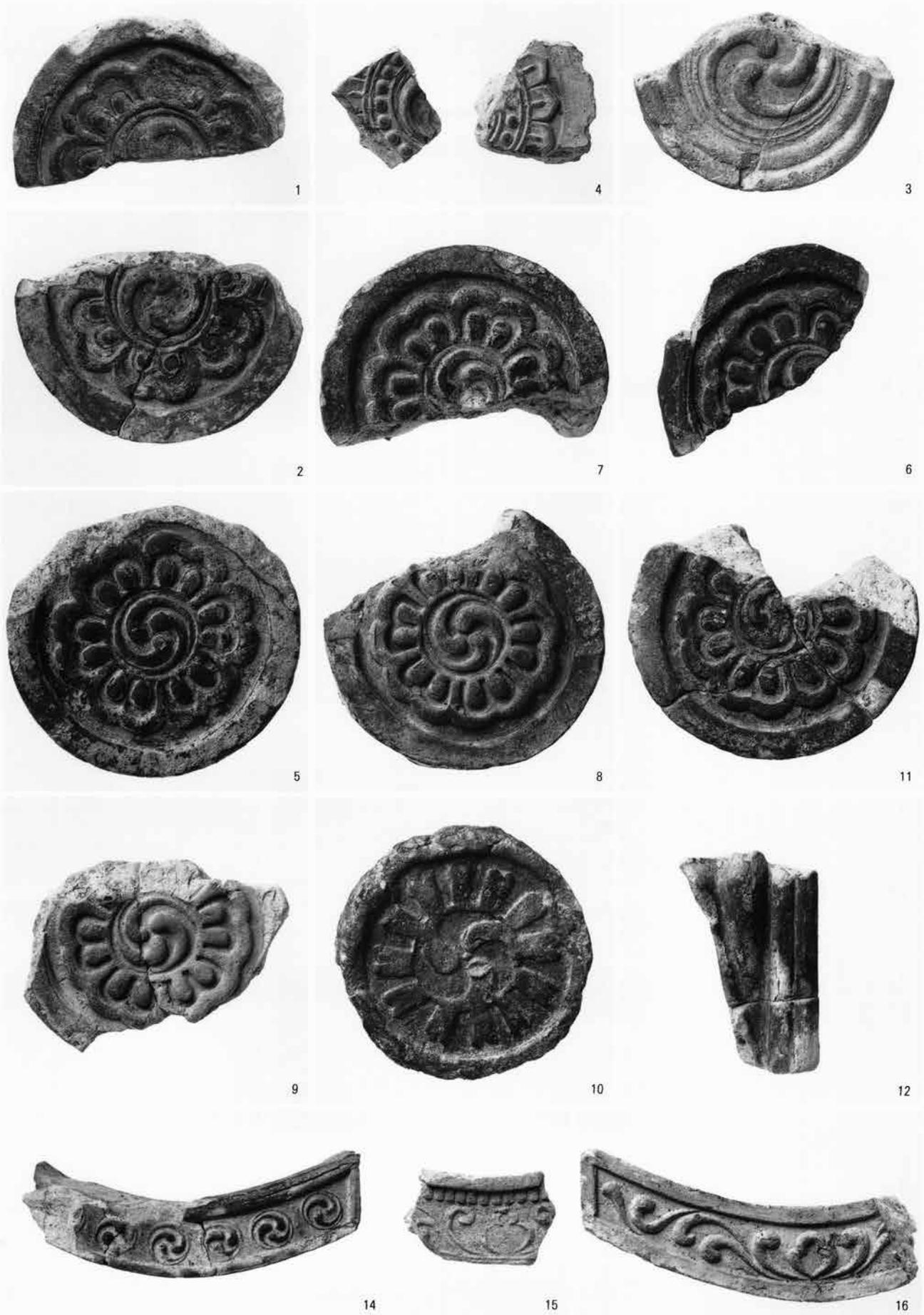
(1)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Dトレンチ掘削風景



(2)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Dトレンチ完掘状況(南西から)



(3)平等院旧境内・宇治市街遺跡
Dトレンチ土層堆積状況(南壁)



図版第21 市田齊当坊遺跡

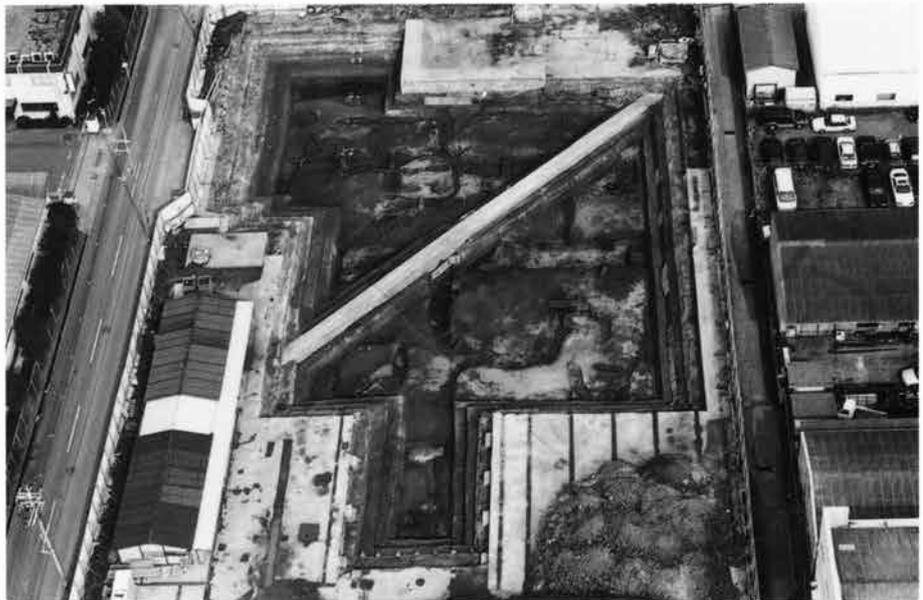
(1)市田齊当坊遺跡 遠景 (南から)



(2)市田齊当坊遺跡 C地区全景 (南から)



(3)市田齊当坊遺跡 D地区遠景 (南から)





(1)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ中世遺構面全景(南から)



(2)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ中世南北坪境道検出状況
(南から)



(3)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ中世東西坪境道検出状況
(東から)

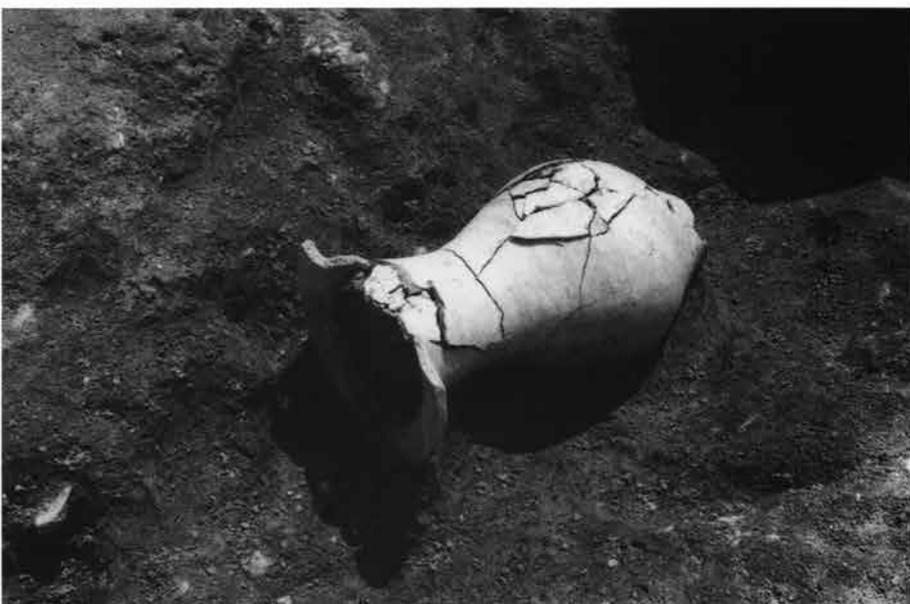
(1)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ方形周溝墓S T410全景
(西南西から)



(2)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ方形周溝墓S T455検出状況
(北から)



(3)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ方形周溝墓S T437西溝内土
器検出状況(北西から)



図版第24 市田齊当坊遺跡



(1)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ堅穴式住居跡SH451全景
(南から)



(2)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ溝SD40検出状況(西から)



(3)市田齊当坊遺跡 C-2トレン
チ井戸SE108検出状況
(東から)

(1)市田斉当坊遺跡 C-2トレンチ井戸SE453井戸枠全景
(北東から)



(2)市田斉当坊遺跡 C-2トレンチ井戸SE453井戸枠細部
(北東から)



(3)市田斉当坊遺跡 C-2トレンチ井戸SE453井戸枠細部
(南から)





(1)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ
南半周溝墓群検出状況
(南西から)



(2)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ
溝S D18検出状況 (西から)



(3)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ
溝S D18内土層 (トレンチ東壁
部・西から)

(1)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ
井戸SE31全景(南東から)



(2)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ
井戸SE31井戸枠全景
(南東から)



(3)市田齊当坊遺跡 Dトレンチ
井戸SE31井戸枠全景
(南西から)





佐山遺跡 A-1地区中世遺構面全景（上が北）

(1)佐山遺跡 A-1地区全景
(西から)



(2)佐山遺跡 A-1地区東部全景
(西から)



(3)佐山遺跡 坪境道S F126北壁
断面(南から)



図版第30 佐山尼垣外遺跡



(1)佐山尼垣外遺跡 調査前全景
(北から)



(2)佐山尼垣外遺跡 坪境道南側溝
(S D202・203) 全景
(北から)



(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D31
全景 (北から)



(1)佐山尼垣外遺跡 池状遺構 S X
226全景 (東から)



(2)佐山尼垣外遺跡 池状遺構 S X
226獣骨出土状況 (北から)



(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T119全景 (南から)



(1)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T119絵画土器壺出土状況
(南から)



(2)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T119遺物出土状況 (南から)



(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T119遺物出土状況
(北西から)

(1)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T101全景 (南東から)



(2)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T101土層断面 (東から)



(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T101遺物出土状況 (東から)





(1)佐山尼垣外遺跡 竪穴式住居跡
S H09遺物出土状況 (南から)



(2)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D09
全景 (南東から)



(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D09
遺物出土状況 (西から)



(1)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T 228全景 (南東から)



(2)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T 227全景 (東から)



(3)佐山尼垣外遺跡 方形周溝墓
S T 227遺物出土状況 (南から)



(1)佐山尼垣外遺跡 土壙S K239
検出状況(北東から)



(2)佐山尼垣外遺跡 土壙S K239
遺物検出状況(北西から)



(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡S D229
検出作業風景(北西から)



(1)佐山尼垣外遺跡 溝跡 S D 229
遺物出土状況 (北西から)



(2)佐山尼垣外遺跡 溝跡 S D 229
遺物出土状況 (南東から)



(3)佐山尼垣外遺跡 溝跡 S D 229
遺物出土状況 (北西から)



1



2



3



a

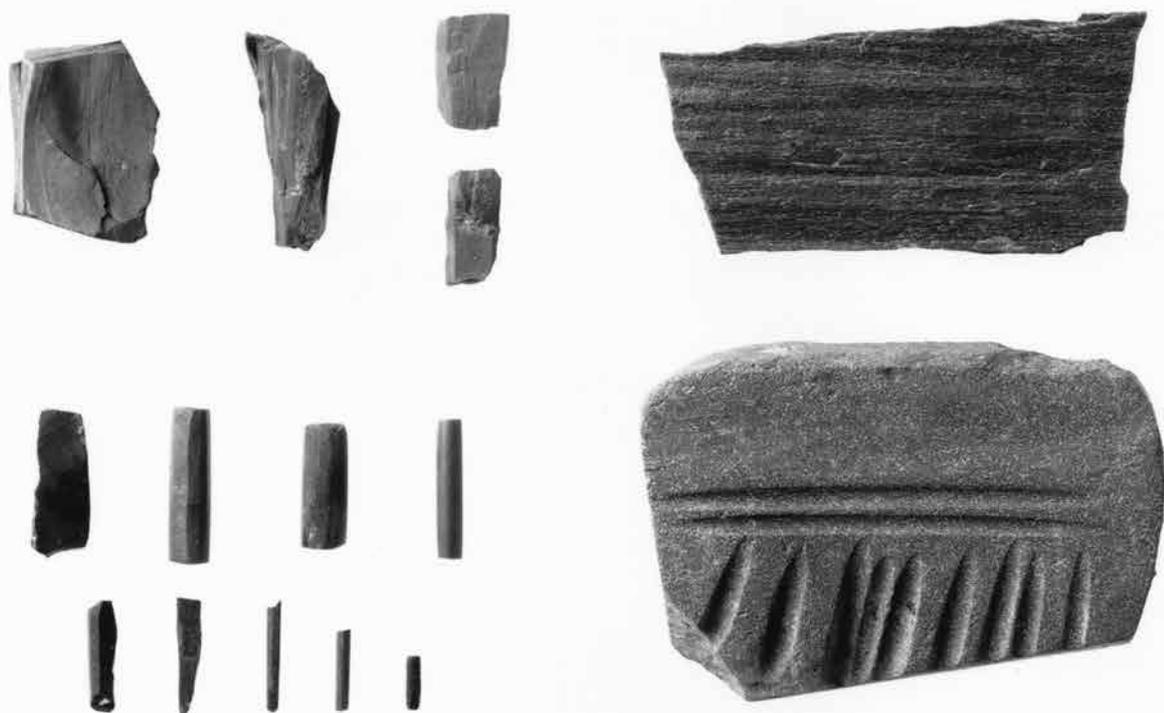


b



9

市田齐当坊遺跡 出土遺物(1)



(1)市田齐当坊遺跡 出土遺物(2)



(2)佐山尼垣外遺跡 出土土器(1)



1



4



5



3



6

佐山尼垣外遺跡 出土土器(2)
1・2. 方形周溝墓S T119出土(絵画土器) 3~6. 方形周溝墓S T101出土

(1)内田山遺跡・内田山B1号墳
第1トレンチ全景(西から)

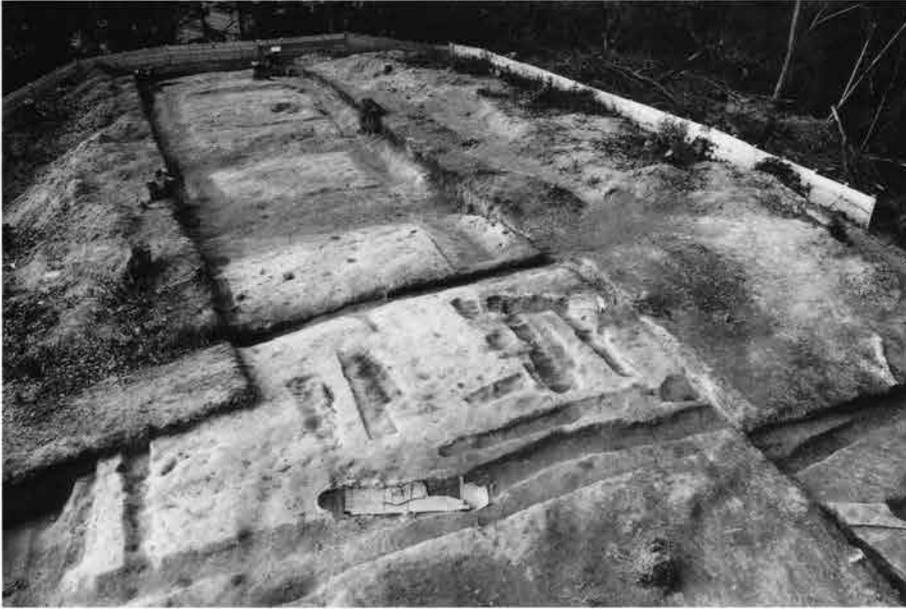


(2)内田山遺跡・内田山B1号墳
第2トレンチ全景(北西から)



(3)内田山遺跡・内田山B1号墳
第3・4トレンチ全景
(南東から)





(1)内田山B1号墳 墳頂部全景
(南東から)



(2)内田山B1号墳 埴輪棺1全景
(南西から)



(3)内田山B1号墳 埴輪棺2全景
(南西から)

図版第43 木津城山遺跡

(1)木津城山遺跡 全景（北西から）



(2)木津城山遺跡 第14トレンチ
調査風景（南東から）



(3)木津城山遺跡 第14トレンチ
S D01検出状況（南東から）





(1)木津城山遺跡 第15トレンチ
S D01・S H03検出状況
(北東から)



(2)木津城山遺跡 第15トレンチ
S H03検出状況 (北東から)



(3)木津城山遺跡 第15トレンチ
S H06・07検出状況 (北から)

図版第45 木津城山遺跡

(1)木津城山遺跡 第16トレンチ
S X 04遺物出土状況（北から）



(2)木津城山遺跡 第16トレンチ
S X 05遺物出土状況（北から）



(3)木津城山遺跡 第17トレンチ
調査範囲（南東から）





(1)木津城山遺跡 第22トレンチ
調査状況 (南東から)



(2)木津城山遺跡 第22トレンチ
北断面 (人工盛土の状況)
(南から)



(3)木津城山遺跡 第23～28トレン
チ調査状況 (南東から)

図版第47 木津城山遺跡



(1)木津城山遺跡 第23トレンチ
テラス検出状況



(2)木津城山遺跡 第29トレンチ
テラス検出状況 (東から)



(3)木津城山遺跡 第30トレンチ
テラス出土状況 (北東から)

図版第48 木津城山遺跡



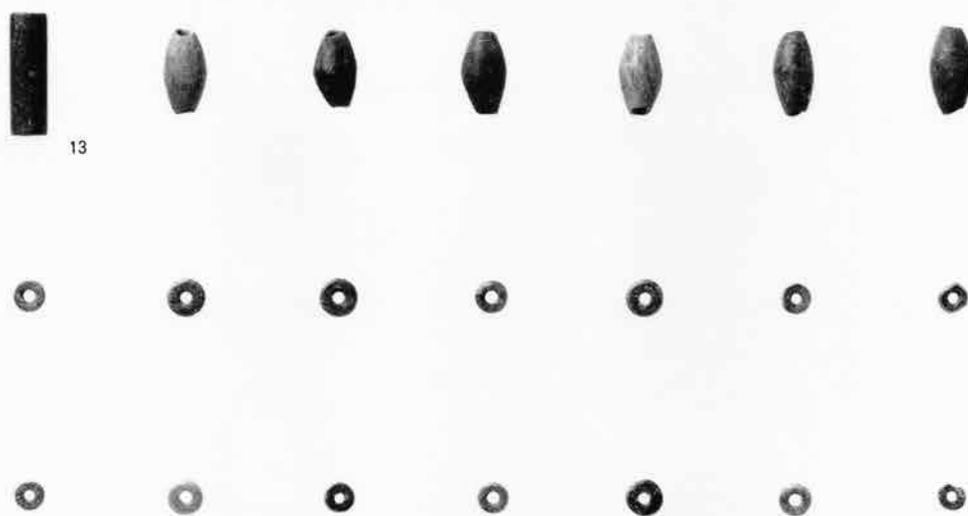
(1)木津城山遺跡 第31トレンチ
調査状況（南東から）



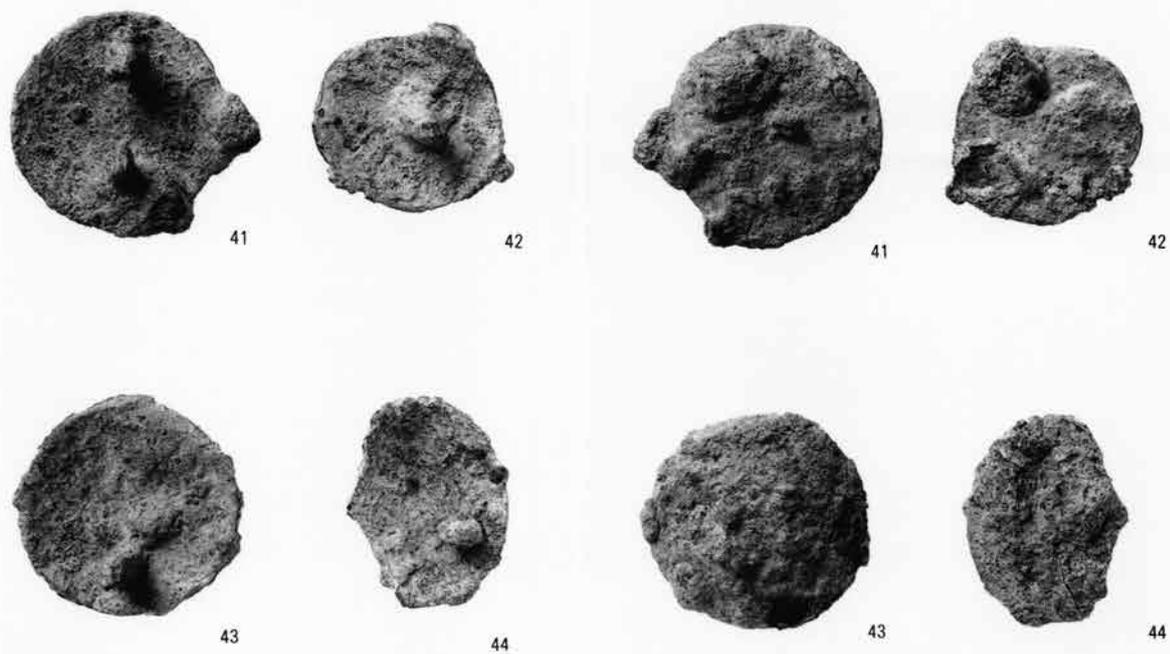
(2)木津城山遺跡 第34トレンチ
調査状況（北西から）



(3)木津城山遺跡 第35トレンチ
調査状況（北東から）



(1)内田山B1号墳 埴輪棺1出土玉類



(2)内田山B1号墳 S D84出土不明鉄製品 (左が鋳側)



10 (外面)



10 (内面)



8



9



12



1



2



3



4



5



6



7



12



18



17



30



25

報告書抄録

| ふりがな | | | | | | | | |
|---|--|-----|------|-------------|--------------|---------------------------|-----------|------|
| 書名 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査概報 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第95冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | 松井忠春・石井清司・藤井 整・中島史子・伊賀高弘・田代 弘・森下 衛・岩松 保・竹原一彦・野々口陽子・中村周平・柴 暁彦・筒井崇史・戸原和人 | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2000 年 11 月 26 日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東経 ° ' " | 調査期間 | 調査面積 - | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| めいしんおおやまざきじゃんく しょんかんけいいせき 名神大山崎ジャンクション関係遺跡 | | | | | | | | 道路建設 |
| しもうえのみ なみいせき 下植野南遺跡 | おとくにぐんおおや まざきちょうおおあ ざえんみょうじこあ ざかどた 乙訓郡大山崎町大 字円明寺小字門田 | 303 | 29 | 34° 54' 2" | 135° 41' 49" | 19990412 ~ 20000128 | 7,460 | |
| さんようでん いせき 算用田遺跡 | おとくにぐんおおや まざきちょうおおあ ざえんみょうじこあ ざいじり 乙訓郡大山崎町大 字円明寺小字井尻 | 303 | 30 | 34° 54' 35" | 135° 44' 55" | 19990714 ~ 19990811 | 120 | |
| びょうどうい んきゅうけい だいいせき・ うじしがいい せき 平等院旧境 内遺跡・宇 治市街遺跡 | うじしとうのかわ 宇治市塔ノ川 | 204 | 80 | 34° 52' 14" | 134° 6' 19" | 19991220 ~ 20000228 | 200 | 道路建設 |
| こくどういちごうきょうとみなみ どうろかんけいいせき 国道1号京都南道路関係遺跡 | | | | | | | | 道路建設 |
| いちださいと うぼういせき 市田齊当坊 遺跡 | くぜぐんくみやま ちょうおおあざいち だこあざしんたまき 久世郡久御山町大 字市田小字新珠城 | 322 | | 34° 53' 0" | 135° 45' 8" | 19990514 ~ 20000303 | 3,500 | |
| さやまいせき 佐山遺跡 | くぜぐんくみやま ちょうおおあざさこ こあざそとやしき 久世郡久御山町大 字佐古小字外屋敷 | 322 | 1 | 34° 52' 37" | 135° 45' 7" | 19990908 ~ 20000114 | 3,500 | |
| さやまあまが いといせき 佐山尼垣外 遺跡 | くぜぐんくみやま ちょうおおあざさや まこあざあまがいと 久世郡久御山町大 字佐山小字尼垣外 | 322 | | 34° 52' 26" | 135° 45' 5" | 19990621 ~ 20000303 | 5,000 | |

| | | | | | | | | |
|---|--|----------------|------|--------------------------|--------------|---------------------------|-------|-------------|
| きづちくしよざいいせき 木津地区所在遺跡 | | | | | | | | 学研都市建設 |
| うちだやまい せき・うちだ やまB1ごう ふん 内田山遺 跡・内田山 B1号墳 | そうらくぐんきづ ちようきづうちだ やま 相楽郡木津町木津 内田山 | 362 | 53-4 | 34° 43' 57" | 135° 49' 56" | 19990901 ～ 19991222 | 700 | |
| きづしろやま いせき 木津城山遺 跡 | そうらくぐんきづ ちようおおあざきづ こあざかたやま 相楽郡木津町大字 木津小字片山 | 362 | | 34° 43' 39" | 135° 49' 58" | 19990412 ～ 20000228 | 2,300 | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 下植野南遺 跡 | 集落 | 弥生 古墳 奈良 | | 方形周溝墓 竪穴住居・掘立柱建物 溝 | | 弥生土器 土師器・須恵器 墨書人面土器 | | |
| 算用田遺跡 | | | | | | 須恵器・土師器 | | 顕著な遺構 無し |
| 平等院旧境 内遺跡・宇 治市街遺跡 | 寺院・集落 | 縄文 弥生 平安 | | 土坑・ピット 瓦溜まり | | 縄文土器 瓦 | | |
| 市田齐当坊 遺跡 | 集落・墓地 | 弥生 中世 | | 方形周溝墓・竪穴住居・井戸 道 | | 弥生土器・玉作関連 遺物 | | |
| 佐山遺跡 | 集落 | 中世 | | 島島・道 | | 須恵器 | | |
| 佐山尼垣外 遺跡 | 墓地 | 縄文 弥生 | | 埋甕 方形周溝墓 | | 縄文土器 絵画土器・弥生土器 | | |
| 内田山遺 跡・内田山 B1号墳 | 集落・墓地 | 古墳 | | 主体部・埴輪棺 | | 白玉・不明鉄製品 | | |
| 木津城山遺 跡 | 集落 | 弥生 | | テラス状建物・溝 | | 弥生土器 | | |

京都府遺跡調査概報 第95冊

平成12年11月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)